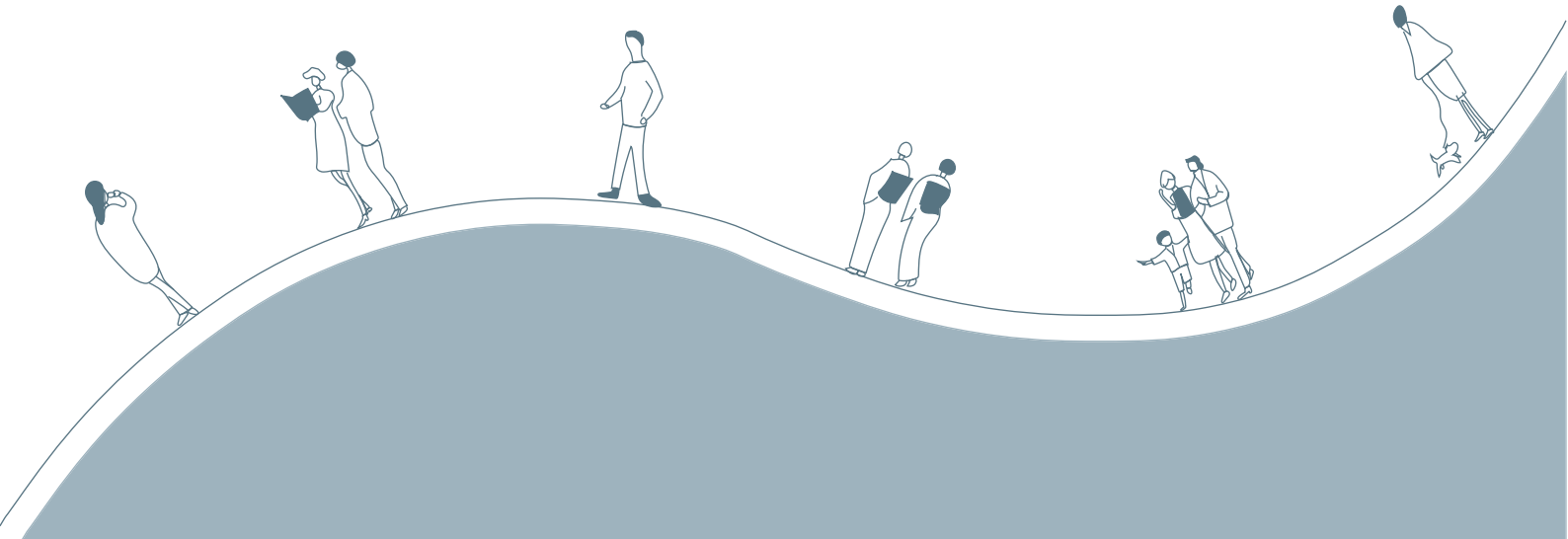
伊豆の国市
ウォーカブルビジョン
に向けて

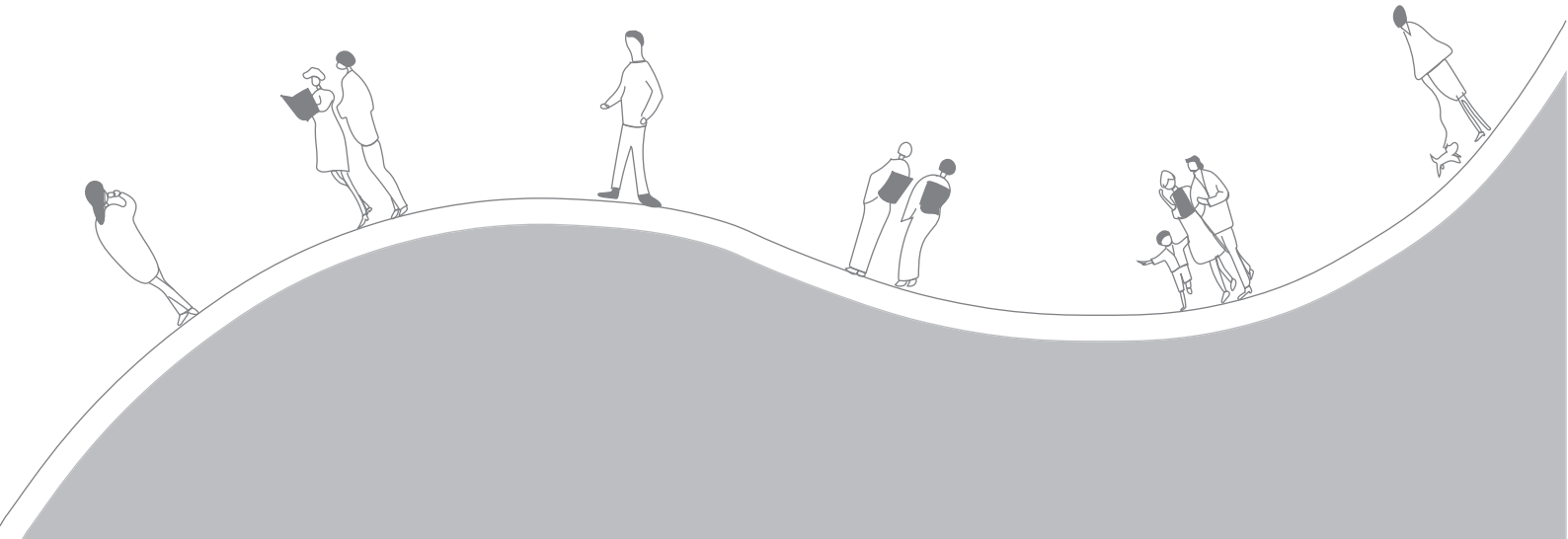
伊豆の国市
ウォーカブルビジョン策定
のための基礎調査報告書



横浜国立大学都市計画研究室
株式会社オオバ

伊豆の国市
ウォーカブルビジョン
に向けて

伊豆の国市
ウォーカブルビジョン策定
のための基礎調査報告書



横浜国立大学都市計画研究室
株式会社オオバ

目次 index

Chapter01

第１章
伊豆の国市でなぜ、今、ウォーカブルか？

1-1　日本全国におけるウォーカブルなまちづくりの状況と課題 …… p.6

1-2　伊豆の国市におけるまちなかの課題と可能性 …… p.12

1-3　伊豆の国市のウォーカブルの動き …… p.14

1-4　伊豆長岡地域におけるまちづくりの展開 …… p.18

Chapter02

第２章
伊豆の国市におけるウォーカブルの考え方

2-1　「ウォーカブルなまちづくり」とは？ …… p.22

2-2　「ウォーカブルなまちづくり」における目的の整理 …… p.23

2-3　伊豆の国市におけるウォーカブルビジョンの考え方 …… p.27

Chapter03

第３章
伊豆の国市におけるウォーカブルなまちづくりの現状

3-1　ウォーカブル基礎調査分析 …… p.31

3-2　ウォーカブル現状インタビュー調査 …… p.66

3-3　バイカブルリサーチ …… p.70

Chapter04

第４章
伊豆の国市ウォーカブルビジョンにおけるコンセプト

4-1　伊豆の国市におけるまちづくり（上位計画）のコンセプト整理‥　p.76
4-2　伊豆の国市におけるウォーカブルなまちづくりのコンセプト‥‥　p.78

Chapter05

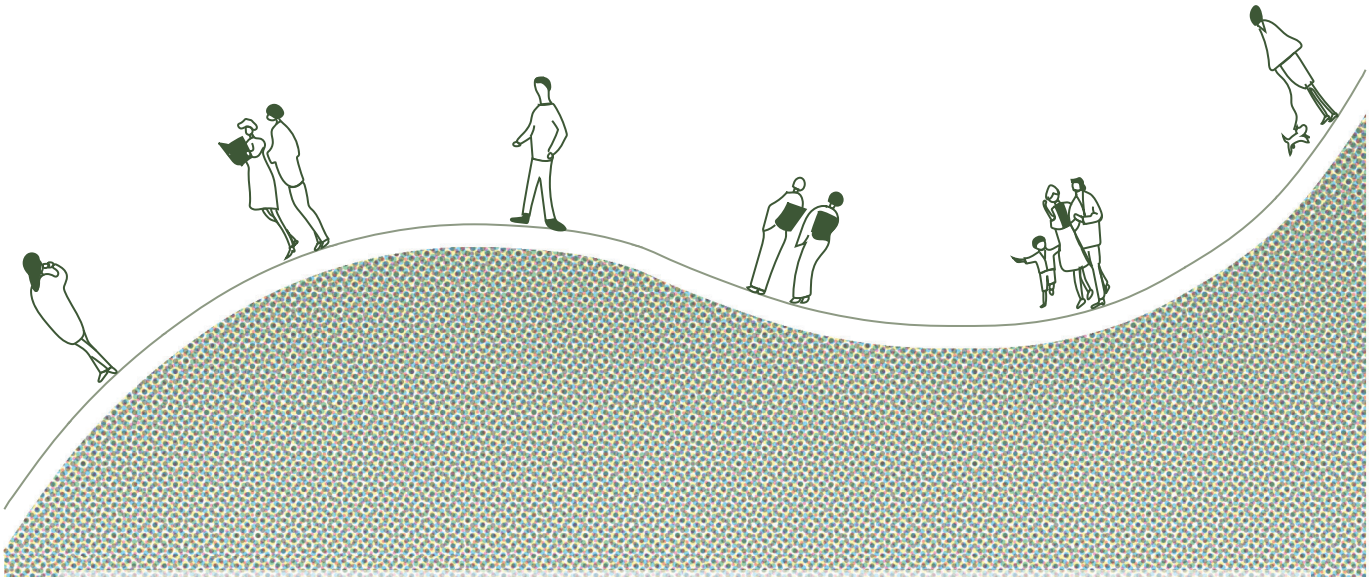
第５章
伊豆の国市ウォーカブルビジョンを実現をするためのプロジェクト

5-1　伊豆の国市におけるウォーカブルなまちづくりの実現戦略‥‥‥　p.82
5-2　重点エリア（長岡地区）での戦略実現のためのツボ押しプロジェクト
5-2-1　ウォーカブル（バイカブル）なまちの「骨格」をつくる‥‥‥‥‥　p.84
5-2-2　立ち寄りできる「ほっとすぽっと」を配する‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥　p.90
5-2-3　そぞろ歩きできるみちを生む‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥　p.96
5-2-4　狩野川を活かすバイカブルなまちづくり‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥　p.102
5-2-5　モバイルツールを活かして「場」をつくる‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥　p.108
5-2-6　暮らしの中でウォーカブルなまちをはぐくむ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥　p.114

Chapter06

第６章
伊豆の国市ウォーカブルなまちづくりのマネジメント

6-1　ビジョンを実現するためのマネジメント‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥　p.125
6-2　「外部空間の目的地化」を促す「ほっとすぽっと」社会実験‥‥‥　p.126
6-3　市民が参画するワークショップ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥　p.130
6-4　ウォーカブルなまちの実現へのステップ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥　p.132
6-5　フリンジパーキングを用いた「車」から「徒歩」へのシフト‥‥‥　p.134



Chapter 01
伊豆の国市でなぜ、今、ウォーカブルか？

1-1. 日本全国におけるウォーカブルなまちづくりの状況と課題

1-2. 伊豆の国市におけるまちなかの課題と可能性

1-3. 伊豆の国市におけるウォーカブルの動き

1-4. 伊豆長岡地域におけるまちづくりの展開

1-1 日本全国におけるウォーカブルなまちづくりの状況と課題

道路のあり方が変わってきている

高度成長期・人口増加時代において、日本では機能や効率性、性能を重視したまちづくりが中心となっており、特に移動のために利用する「道路」は自動車を円滑に走らせることを中心に整備されていた。その結果として、必ずしも「人」にとって歩きやすい、居心地の良い、魅力ある空間は創られていなかった。

しかし縮減時代を迎えた現代においては、自動車通行量も減少し、道路に関する考えが変化してきている。歩行者と自動車の関係については、歩車分離や歩行者天国化、シェアドスペースやクランク・スラロームによる「歩車共存」など、歩きやすい道路の実現を目指して様々な検討が重ねられてきた。また、2000 年代以降、道路の利活用に関してはオープンカフェをはじめとした道路占用によりまちに賑わいを生む効果が注目されており、特に近年では、歩きたくなる道路の実現を目指して道路占用許可の緩和特例等が拡充している。

さらに言えば、都市づくりのあり方自体についても、「つくる」から「つかう」を重視して、マネジメントや持続性を考えた都市づくりが重視されるようになってきている。

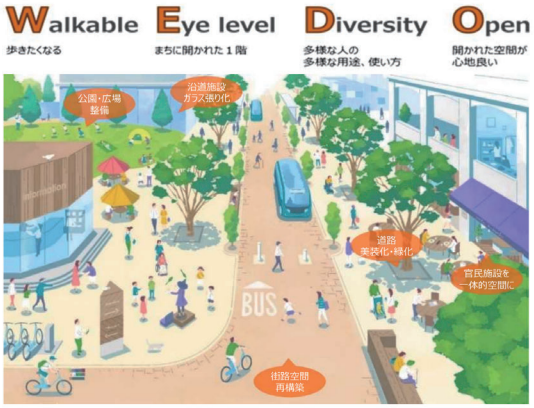
このように、今まで移動を主目的として整備されてきた道路を、豊かな暮らしを実現するための「都市アセット」（資産）として見る考え方が近年では生まれている。

国土交通省が発表した道路ビジョン

▶ 居心地が良く歩きたくなるまちなか（国土交通省都市局・道路局）

国土交通省では、新たなまちづくりの方向性として「居心地が良く歩きたくなるまちなか」の形成を目指し、2019 年にウォーカブルなまちなかの形成を推進することを発表した（「都市の多様性とイノベーションの創出に関する懇談会」）。

ビジョンの中では、WEDO(Walkable, Eyelevel, Diversity, Open)が掲げられ、その一つとして「ウォーカブル」なまちなか形成が示されている。また、国土交通省では、これらの動きを「まちなかウォーカブル推進プログラム」として予算化しているほか、ウォーカブルなまちづくりを推進する「ウォーカブル推進都市」には、361 都市の賛同（2023.12.31 時点）があり、日本全国で取り組みが進んでいる。



出典：国土交通省「まちなかウォーカブル推進プログラム」

▶ 2040 年、道路の景色が変わる（国土交通省道路局）

国土交通省道路局は道路政策を通じて実現を目指す 2040 年の日本社会の姿と政策の方向性を提案するビジョンを 2020 年に策定し、新たな道路のあり方を発表した。

このビジョンでは、「通勤・帰宅ラッシュが消滅」、「公園のような道路に人が溢れる」、「人・モノの移動が自動化・無人化」、「店舗（サービス）の移動でまちが時々刻々と変化」、「『被災する道路』から『救援する道路』に」という道路の 5 つの将来像を示している。

出典：国土交通省「2040 年、道路の景色が変わる」

道路政策の変遷（道路占用に対する考え方）

日本における道路に対する考えが変化する中で、道路政策、特に道路占用の考え方も変わってきている。元々道路は通行を主目的とされていたため、都市空間に賑わいを生むことを目的とした利活用の際には道路管理者への占用許可が必要であり、特別な理由がないと許可を得ることが難しかった。

これに対し、2011 年の都市再生特別措置法の改正により、街の賑わい創出等のため、道路占用許可の基準が緩和された。「都市再生特別措置法」のほかに、「国家戦略特別区域法」や「中心市街地活性化法」等に基づく特例許可があり、これらいずれかの特例の位置づけにより、道路占用許可の対象物件が拡充されることとなった。

また近年は「コロナ占用特例（2023 年 3 月まで）」や「歩行者利便増進道路制度（通称：ほこみち制度）」の創設により、指定された区域内であれば特例なしでの道路占用許可が可能となり、賑わいを目的とした道路利活用が行いやすくなった。

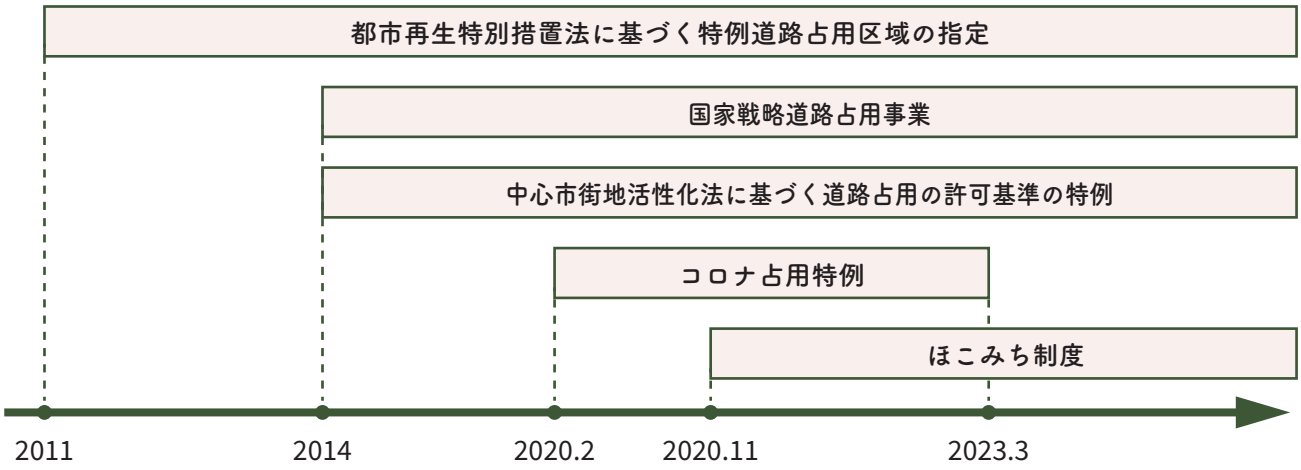


図　道路占用の政策の展開

▶ コロナ占用特例（2020.06~2023.03）

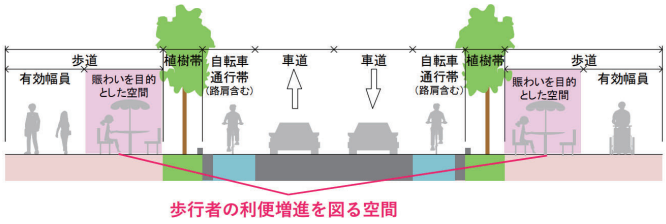
新型コロナウイルス感染症の影響を受ける飲食店等を支援するため、沿道飲食店等の路上利用の占用許可基準を緩和する特例措置。これにより道路占用による効果が見直され、後述する「ほこみち制度」への移行にもつながった。コロナ占用特例は期限付きであったが、現在では多くの自治体がほこみち制度の活用に移行している。

出典：国土交通省「道路占用に関するコロナ特例について」

1-1 日本全国におけるウォーカブルなまちづくりの状況と課題

▶ ほこみち制度（歩行者利便増進道路制度：道路法）

「ほこみち制度」は、地域を豊かにする歩行者中心の道路空間を目指すために国土交通省道路局が 2020 年に定めた制度である。



出典：国土交通省「歩行者利便増進道路（ほこみち）制度の詳細説明」

道路管理者が「ほこみち」指定を行った道路は、歩道等の中に、通行区間を確保したうえで利便増進誘導区域を定めることができる。この区域では占用許可申請の手続きを簡略化でき、特例なしで占用を行うことができる。区間内には看板やベンチのほか、食事施設やレンタサイクル用の自転車駐車器具等、要件を満たせば様々な施設を設置できる。

2021 年 2 月にほこみち第１号として御堂筋（大阪市）、神戸市（三宮中央通り）、姫路市（大手前通り）の３つが指定され、今では 119 路線がほこみちとして指定されている（2023 年 5 月 31 日時点）。指定された区域では道路を占用した実証実験等が行われ、歩きやすい道を目指した様々な活動が行われている。

御堂筋（大阪市）の実証実験
出典：大阪市「御堂筋チャレンジ 2020 検証結果概要」

大手前通り（姫路市）の実証実験
出典：国土交通省「多様なニーズに応える道路の事例集」

▶ まちなかウォーカブル区域（滞在快適性等向上区域：都市再生特別措置法）

まちなかウォーカブル区域（滞在快適性等向上区域）は、ウォーカブル推進都市が都市再生整備計画の中で定めるものであり、歩ける範囲のエリア（概ね１km程度以内）であって賑わい溢れるまちなかづくりに必要な施策を重点的・集中的に講じる区域である。

出典：国土交通省「歩行者利便増進道路（ほこみち）の普及展開に向けて」

ウォーカブル推進都市の多くはこの区域を定め、ウォーカブルな空間整備やアイレベルの刷新、滞在環境の向上など「居心地が良く歩きたくなるまちなか」を実現するための事業を図っている。

ほこみち制度は、歩道上を活用してウォーカブルなまちを目指す手段であるのに対し、これは、その周辺のオープンスペース等を官民一体となって活用するための手段である。ほこみち制度とまちなかウォーカブル区域を併用することで、①歩行者の利便増進のための道路整備や、その周辺で民間によるオープンスペースが提供されるなど、エリア内でまちづくりが行いやすくなる、②カフェ、ベンチ等の道路の占用について、占用基準・期間の緩和、都市再生推進法人による手続面のサポートにより、空間活用が行いやすくなるなどのメリットがある。

公共空間の利活用に関するその他の諸制度

▶ Park-PFI 制度（都市公園法）

Park-PFI は、飲食店や売店等の公園利用者の利便の向上に資する公園施設の設置と、それらによる収益を活用してその周辺の施設の整備・改修等を一体的に行う者を、公募により選定する制度である。都市公園に民間の優良な投資を誘導し、公園管理者の財政負担軽減に加え、都市公園の質の向上、公園利用者の利便の向上を図る整備・管理手法となっている。例えば、東京都豊島区の南池袋公園では、Park-PFI を活用して設置した便益施設にカフェを入れることで、その売り上げの一部を公園の維持管理に活かすという収益モデルを構築している。

南池袋公園
出典：https://www.city.toshima.lg.jp

▶ 道路協力団体制度（道路法）

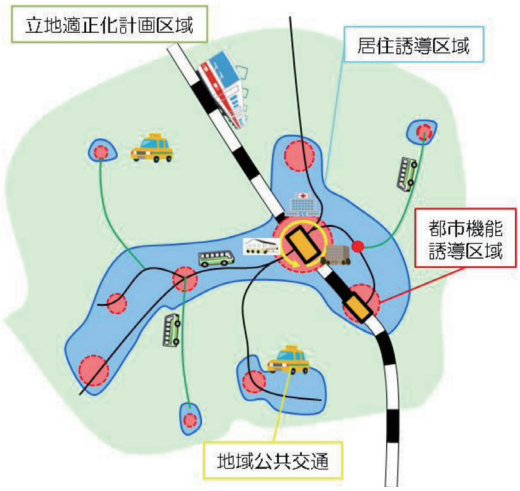
道路協力団体とは、道路管理者と連携して業務を行う団体として法律上位置づけられた団体である。この制度により道路における身近な課題の解決や道路利用者のニーズへのきめ細やかな対応などの業務に自発的に取り組む民間団体等を支援し、地域の実情に応じた道路管理の充実を図っている。道路協力団体に指定されると、オープンカフェや物販施設等の占用を通じた道路における収益活動が行いやすくなる。それらの活動から得られた収益を用いて、道路清掃・植栽等の活動をさらに充実させることができる。

出典：国土交通省「道路協力団体制度」

周辺施策の変遷

▶ 立地適正化計画（都市再生特別措置法）

2014 年には、立地適正化計画制度が創設されている。この制度は、コンパクトシティの実現に向けて、都市全体の構造を見渡し、居住機能（居住誘導区域）や医療・福祉・商業等の都市機能の誘導（都市機能誘導区域）とそれと連携した地域交通ネットワークの形成を推進するものである。策定主体は市町村で、税制や融資等の優遇措置と届出・勧告制度によって立地誘導を行う仕組みとなっている。制度の創設以降、数多くの市町村で立地適正化計画が作成され、コンパクトシティ化が本格的に推進されている。伊豆の国市では、2018 年に策定された。



出典：国土交通省「立地適正化計画の意義と役割」

▶ 官民連携まちなか再生推進事業

国土交通省では、新たな時代のまちづくりの方向性として、「居心地がよく歩きたくなるまちなか」の形成を目指し、官民連携まちなか再生推進事業として、「居心地がよく歩きたくなる」まちなか形成をはじめ、多様な人材の集積や様々な民間投資を惹きつけ、都市の魅力・国際競争力の向上を目的とした「未来ビジョン」の策定やそれを策定し、実行するための「エリアプラットフォーム」の構築に対し、総合的な支援を行っている。

1-1 日本全国におけるウォーカブルなまちづくりの状況と課題

ウォーカブルなまちづくりをめぐる日本の課題

(1) 移動機会（トリップ数※）の減少（外出機会の創出、健康まちづくりの必要性）

令和 3 年に実施した第 7 回全国都市交通特性（パーソントリップ）調査の結果によると、調査日に外出した人の割合、トリップ数ともに、調査開始以来最低の値であった。このように、近年全国的に人々が外に出て活動する機会は減少していると言える。この社会課題の解決に向け、「居心地がよく歩きたくなるまちなか」を形成し、外出機会を創出したり、高齢者が安心して楽しく外出できる環境を整備したり、健康まちづくりを展開していくことが求められている。

※人がある目的をもって、ある地点からある地点へと移動する単位をトリップという。１回の移動でいくつかの交通手段を乗り換えても１トリップと数える。トリップ数は、１日あたりのトリップの数を指す。

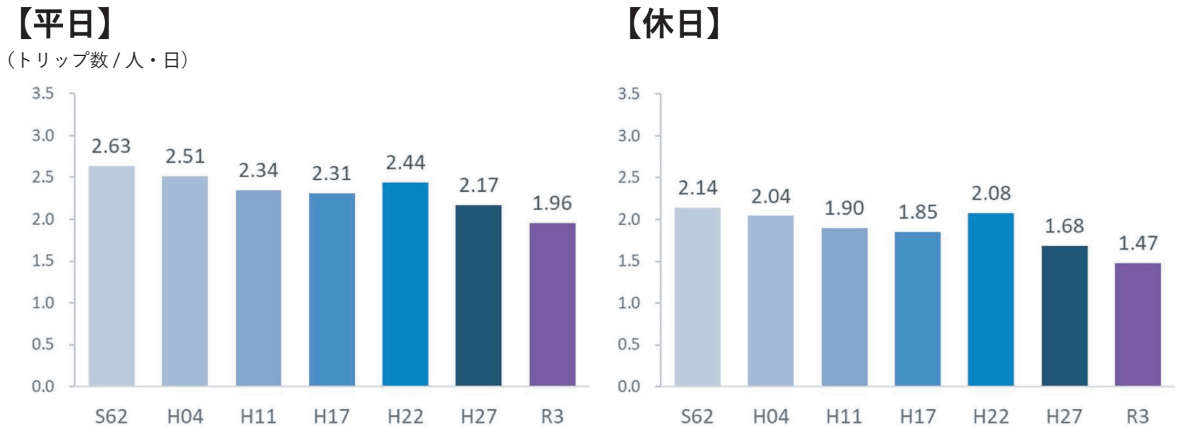


図　全国 1 人あたりのトリップ数の変化

出典：国土交通省「令和 3 年度全国都市交通特性調査結果（速報版）」

(2) 中心市街地やまちなかの活力減少

特に近年、地方の中心市街地では人口減少が進み、それに伴ってサービスの縮小や空き家・空き店舗の増加が生じている。このような状況は、生活利便性の低下や地域の魅力の低下につながり、さらなる人口減少を招く要因にもなる。今後のまちづくりでは、まちなかでのにぎわい創出へのニーズが高まっていると言える。

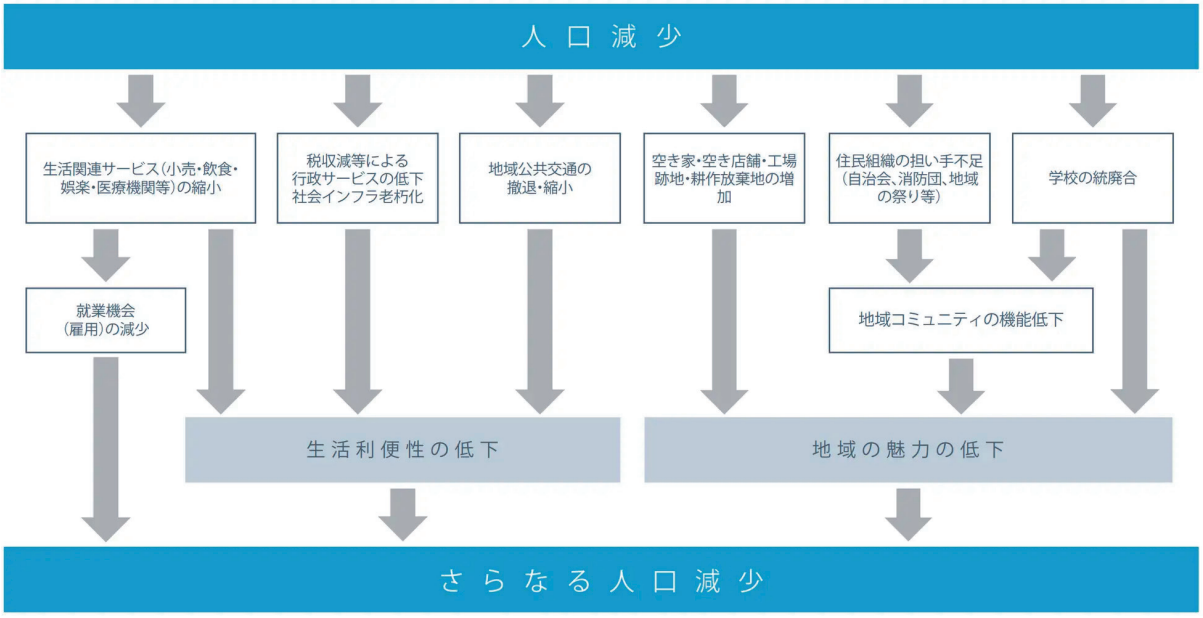


図　人口減少がさらなる人口減少を引き起こしている悪循環

出典：国土交通省

(3) シビックプライド※の希求（魅力ある都市空間創出の必要性）

近年、全国的なシビックプライドや「まちへの愛着」の欠如が指摘されている。一般に、シビックプライドの高さと定住率は比例関係にあるとされており、シビックプライドを高めることが、人口流出を緩やかにすることにつながる可能性があると考えられている。現在は、多くの自治体がシティプロモーションに関連してシビックプライドを取り上げており、魅力ある都市空間の創出が検討されている。

※「市民の／都市の」という意味の「Civic」と、「誇り」を意味する「Pride」から成り立つ言葉であり、19 世紀　のイギリスで発展したと言われる概念。「都市に対する市民の誇り」であるが、単なるまち自慢や郷土愛ではなく、「ここをよりよい場所にするために自分自身がかかわっている」という、当事者意識に基づく自 負心を意味して　いる。

［参考：日本都市センター・戸田市「住民がつくる『おしゃれなまち』ー近郊都市におけるシビックプライドの醸成ー」（令和元年３月）伊藤香織「シビックプライドを醸成するまちと市民の接点」（同書第３章第２節８９頁）］

(4) 地域コミュニティの弱体化

自治会・町内会への加入率の低下や近所付き合いの希薄化、地域活動の担い手不足などにより、地域の関係が希薄化し、地域コミュニティの弱体化が指摘されている。

● 自治会・町内会への加入率の低下

加入のメリットがわからないこと、忙しいことなどを理由に、特に都心部では自治会の加入率の低下が見られる。

● 近所付き合いの希薄化

人口の移動が活発化したことやインターネットの普及による顔の見えない「弱い繋がり」が増加したことにより、現代の近所付き合いは約 50 年前に比べて希薄化している。

● 地域活動の担い手不足

近年、自治会役員等の高齢化が進み、人も固定化する傾向にある。また、自営業者等が減少し、代わりに参入した外部企業等は地域活動への協力が得にくいケースが多く、地域活動の担い手となる人材不足が生じている。

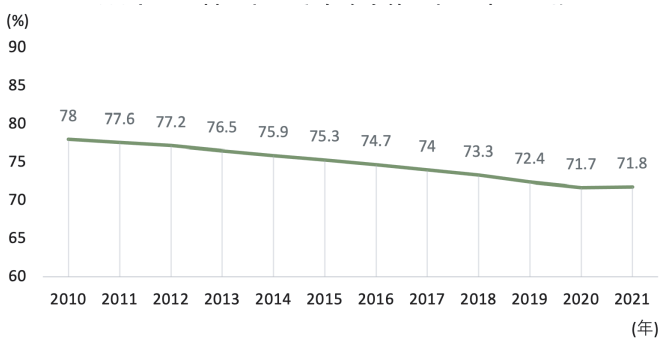


図　600 市区町村における自治会等の加入率の平均
総務省「自治会等に関する市区町村の取組についてのアンケートとりまとめ結果」に基づいて作成

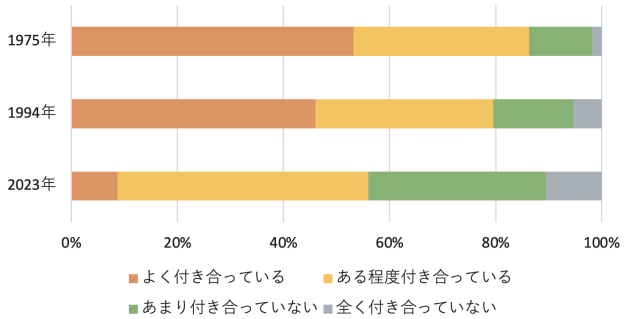


図　近所付き合いの程度の推移
内閣府「社会意識に関する世論調査」に基づいて作成

1-2　伊豆の国市におけるまちなかの課題と可能性

▌人口減少の進展

右図は伊豆の国市における年齢 3 区分別人口推移を示している。生産年齢人口（15 ～ 64 歳）は 1995 年にかけて増加していたが、1995 年以降は減少に転じ、総人口は 1995 年から 2015 年の 20 年間で 2,176 人（4.3%）減少している。

2020 年以降の社人研推計によると、今後は人口の減少スピードが加速し、2045 年にはピークの 1995 年と比較して 30%減少し、年齢の割合は生産年齢人口と老年人口が近づいていくことが推計される。

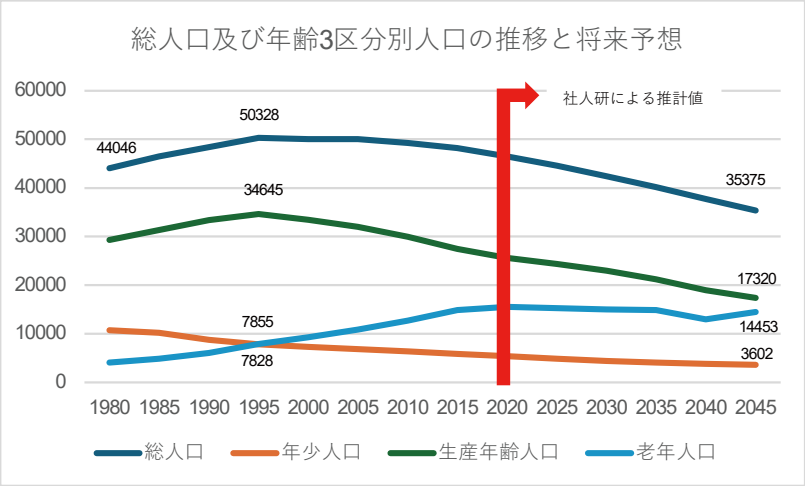


図　伊豆の国市　人口の移り変わりと推計

「伊豆の国市まち・ひと・しごと創生長期人口ビジョン」より作成

▌まちなか衰退への懸念

▶ 生活環境

人口減少や高齢化の進展などによって空き家の老朽化・空き地の発生などが起こり、治安の悪化、資産価値の低下など市民生活に影響を及ぼすことが懸念される。実際に、現在の活用されていない空き店舗を調査した結果、伊豆長岡駅前周辺、古奈温泉の北側（県道沿い）、長岡温泉（県道沿い）に集積していることが分かった（詳細は 3-1-11）。

▶ 地域経済

伊豆の国市内の第三次産業就業者数は、2010 年国勢調査の結果から産業全体の構成比 68.1%となっている。小売業など主に地域内を対象に事業を行う産業にとって、人口減少に伴い市内の消費活動が縮小した場合、大きな打撃を受ける。第三次産業のうち、観光に深く関連する「宿泊業、飲食サービス業」は、今後とも観光地としての魅力づくりや就業環境の改善を継続しなければ、事業継続や従業員の確保が難しくなっていくことが考えられる。

▌「活動の見える化」の必要性

1-1 にあったように、近年、日本各地では人をまちなかに惹きつけ、過ごすことを目指し、回遊性を向上させる「ウォーカブルなまちづくり」が行われている。その一方で、地方都市では高齢化や施設が少ないといった背景から、回遊性がなかなか生まれにくいことが大きな課題である。

地方都市において回遊性を向上させるために、人の立ち寄り行動をより活発化させることが考えられる。現状、この地域を対象に立ち寄り施設の数をアンケート調査した結果、平均一人当たりの立ち寄り施設数は 1.75 か所であった（出典：林俊宇（2022）『地方都市のまちなか回遊における立ち寄り行動の可能性に関する研究』横浜国立大学修士論文）。

調査結果より、2 つの温泉街があることから、観光客が多いが、伊豆長岡区域内での立ち寄り回数は少ないという課題があり、区域外への移動が少ないといえる。また、対象者の立ち寄らない理由を見ると、魅力ある施設の情報発信が大切だと言える。人がまちなかで滞在している様子が、さらに人をひきつけ、立ち寄る回数を増やすと考えられ、さらに、人の立ち寄る回数が増えることが、まちなかの回遊性の向上も期待されると考えられる。

伊豆の国市が有するポテンシャル

地域資源と活用可能性のある資源

人口減少に伴う空き家・空き店舗の増加や立ち寄り回数が少ないといった課題がある一方で、伊豆の国市が有する地域資源や活用可能性のある資源はいくつか考えられ、以下の 4 つを提示する。これら 4 つを本地域のポテンシャルとして捉え、うまく活用していくことは、ウォーカブルなまちへの実現に向けた大きなカギとなると考えられる。

● 豊かな地域資源

伊豆の国市の豊かな地域資源として、伊豆長岡や古奈の温泉や狩野川や源氏山といった自然が挙げられる。自然を楽しみ、温泉につかるといった、資源を組み合わせた楽しみ方ができる可能性がある。

よりともの足湯

源氏山の山頂広場

出典：サイト「伊豆桜スポット総合案内」
https://izu-sakura.com

● 東京圏からの近距離性

東京と伊豆半島をつなぐ特急「踊り子号」が開通しており、新宿・渋谷や品川、横浜といった主要駅から直通で伊豆長岡駅に向かうことができる。（品川ー伊豆長岡で所用時間約 1 時間 45 分）また、新幹線でも品川ー三島を 45 分で移動でき、そこから伊豆箱根鉄道で三島から伊豆長岡駅まで約 20 分で向かうことが可能である。

● 重ね合わせ戦略による複合的な利用者像

伊豆長岡エリアは、建物用途が混在していることから、多様な属性の人がバランスよく存在していることが大きなポテンシャルであるといえる。

下図から分かるように、現在、住民：仕事：医療：観光それぞれの人数が均衡している。これらの属性に対して、伸ばす・維持する戦略と新しい層を加える戦略を重ねることが考えられる。

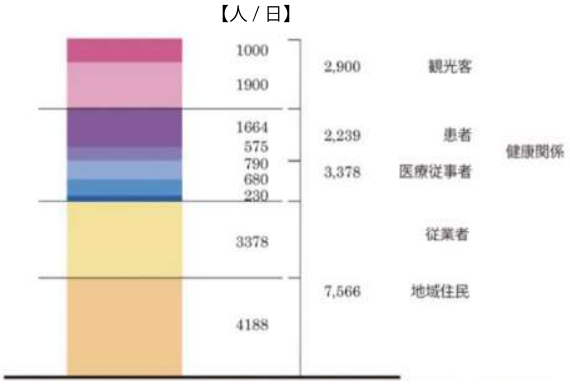


図　1 日あたりの伊豆長岡温泉周辺潜在者
（住民、宿泊者、病院利用者等）の重ね合わせ

● E-bike・サイクルツーリズムの優位性

伊豆の国市は坂が少なく、さらに気候も穏やかであることから、自転車利用に適した地形・気候である。

また、2020 年の東京オリンピックでは、自転車競技の会場として伊豆市の「伊豆ベロドローム」が選ばれたとともに、E-bike の活用が積極的に行われており、近年では「Eroika Japan」のイベントが行われるなど、伊豆エリアが自転車のまちとして注目が高まっている。

エロイカジャパン 2024 の様子
出典：伊豆の国市公式 HP　https://x.gd/ew0Xj

1-3　伊豆の国市におけるウォーカブルなまちづくりの動き

ウォーカブルに関する全市的なまちづくりの現状（上位計画）

▶ 第２次伊豆の国市総合計画後期基本計画　２０２２年３月策定

伊豆の国市では、第２次総合計画において将来像を「ほんわり湯の国、美し国、歴史文化薫る国、未来を拓く伊豆の国」とし、住んでいる人も、訪れる人も、歴史や文化が薫る美しい地で温泉や食を楽しみ、ほっとする（ほんわりする）時間を有意義につくれるまちを目指すとともに、時代の潮流をつかみ各分野で未来を拓くまちを目指したいとしている。

ウォーカブルに関連する施策としては、「観光推進体制の強化と交流人口の拡大」、「歴史・文化・芸術を生かしたひとづくり・まちづくりの推進」、「健康長寿を目指すまちづくりの推進」、「持続可能なまちづくりの推進」が掲げられている。

▶ 伊豆の国市都市計画マスタープラン　２０１１年３月策定　/２０２１年２月部分改定
伊豆の国市立地適正化計画　２０１８年６月策定

第２次伊豆の国市総合計画に即して策定された伊豆の国市都市計画マスタープランの改定及び伊豆の国市立地適正化計画では、安心で、ほんわりとした健やかな暮らしがいつまでも続くまちを目指し、少子高齢化、人口減少という成熟型社会の更なる進展に対応し、将来に渡って持続可能な社会の形成を目指すため、鉄道駅及びバスターミナル周辺に安全で利便性の高い市街地を創出（鉄道やバスを基軸とした多極ネットワーク型集約都市の構築）を掲げ、３つの「都市機能誘導区域※」（伊豆長岡駅周辺、温泉駅周辺、田京駅周辺）を設定している。

※医療・福祉・商業等の都市機能を都市の中心拠点や生活拠点に誘導し集約することにより、これらの各種サービスの効率的な提供を図る区域

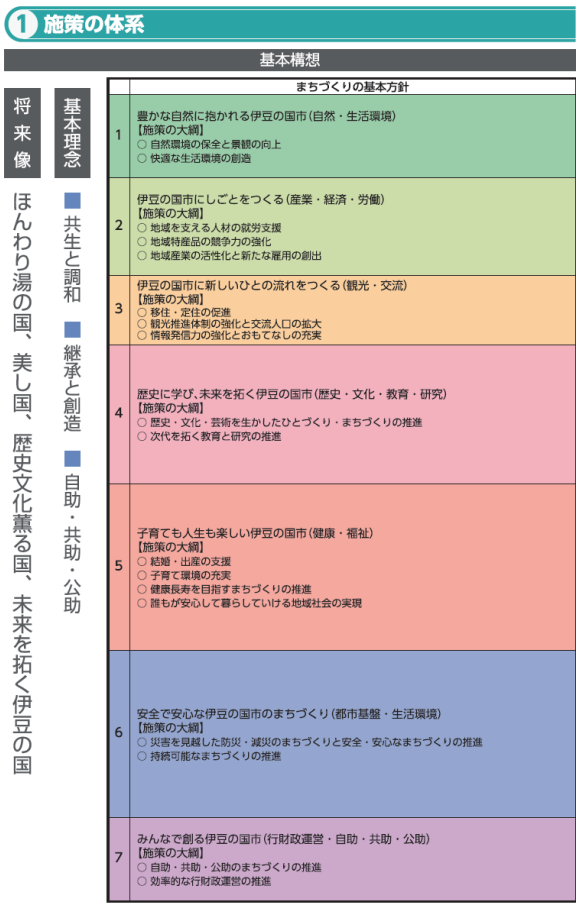


図　伊豆の国市の都市計画の基本構想と基本指針
出典：伊豆の国市「第2次伊豆の国市総合計画後期基本計画」

図　居住区域及び都市機能誘導区域図
出典：伊豆の国市「 伊豆の国市立地適正化計画」

都市再生整備計画におけるウォーカブルの実施プラン

▶ 都市再生整備計画（伊豆長岡地区）　2022年1月策定

地域の特性を踏まえ、都市の再生に必要な事業を重点的に創意工夫してまちづくりを行うため、I まちづくりの目標、II 目標を定量化する指標、III目標を達成するために実施する事業を定める都市再生整備計画を、2021 年度に一般社団法人伊豆長岡温泉エリアマネジメントが提案し、市の都市再生整備計画として策定した。

● 都市再生整備計画（伊豆長岡地区）

立地適正化計画で示す３つの都市機能誘導区域の中で、伊豆長岡地区（伊豆長岡駅周辺＋温泉駅周辺）では都市再生整備計画を定め、大目標を、伊豆長岡地域の中心にふさわしい活気に満ちあふれた魅力あるまちの賑わいの創出とし、「日常的に歩行者やサイクリストが快適に過ごせる空間の創出によるまちなかの回遊性向上」、「地域資源を活用した魅力ある滞留空間・交流拠点の創出」、「官民一体となった賑わいのある歩行者空間の創出とモビリティとの共生」を掲げている。

● 滞在快適性等向上区域（まちなかウォーカブル区域）

伊豆長岡温泉の中心である長岡地区と古奈地区および伊豆長岡温泉駅周辺に滞在快適性等向上区域（まちなかウォーカブル区域）を設定している。

長岡地区では、南山荘と温泉駅を拠点とし、両施設を結ぶ温泉場出逢い通り約 200m を中心に滞在快適性等向上区域を設定し、歩道の拡幅などによりゆとりある歩行者空間を確保するとともに、沿道の民間事業者による歩道と一体となったオープンスペースの創出等により、官民一体での居心地の良いまちなかの形成を図っている。

古奈地区では、あやめ小路約 410m を目安に滞在快適性等向上区域を設定し、沿道のみ関係事業者による歩道と一体となったオープンスペースの創出等により、官民一体となって居心地の良いまちなかの形成を図っている。

伊豆長岡駅前では、駅前ロータリーに設置された観光案内所を中心に約 2.74ha の範囲に滞在快適性等向上区域を設定し、滞在型の駅前空間を創出し、観光客だけでなく多くの市民が滞在可能なまちづくりを促進する。

なお、上記のとおり滞在快適性等向上区域は設定されているものの同区域の具体的な将来像は示されていないため、検討が必要である。

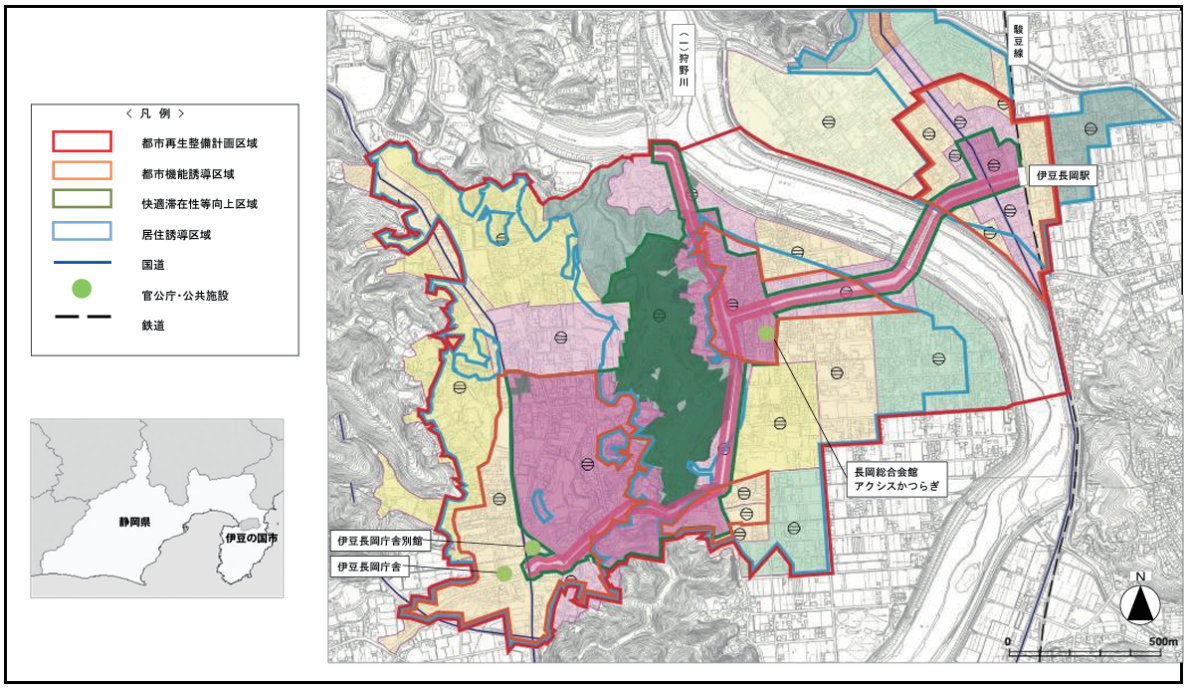


図　伊豆長岡地区に設定されている区域を示した図

出典：伊豆の国市「 都市再生整備計画（伊豆長岡地区）」

1-3　伊豆の国市におけるウォーカブルなまちづくりの動き

その他のウォーカブルに関する計画

▶ 伊豆の国市緑の基本計画　２０１７年８月策定

本計画では、「暮らしを彩り、みどりあふれた おもてなし～伊豆の国、水と緑と歴史の京（みやこ）～」を基本理念とし、伊豆の国市内どこでも公園・緑地が身近にある環境を享受できるまちづくりを進めることを方針としている。

ウォーカブルに関連する狩野川周辺の整備・活用としては、狩野川ツーリズムによる狩野川全体の利活用（サイクリングやカヌー等のスポーツと連携することで、狩野川全体の利用を促進）、ゾーンごとの狩野川の利活用の促進（狩野川コリドーや河川敷グラウンドを活かしスポーツ振興を図る「中島公園周辺」）を位置づけている。

ウォーカブルに関連する源氏山周辺の整備・活用としては、源氏山の魅力を引き出し（源氏山への登り口等の整備により、源氏山のエントランス機能を向上）、温泉街の魅力を向上（源氏山の遊歩道や温泉街裏道の整備推進等による回遊性を向上し、エリアとして温泉街の魅力を向上）を位置付けている。

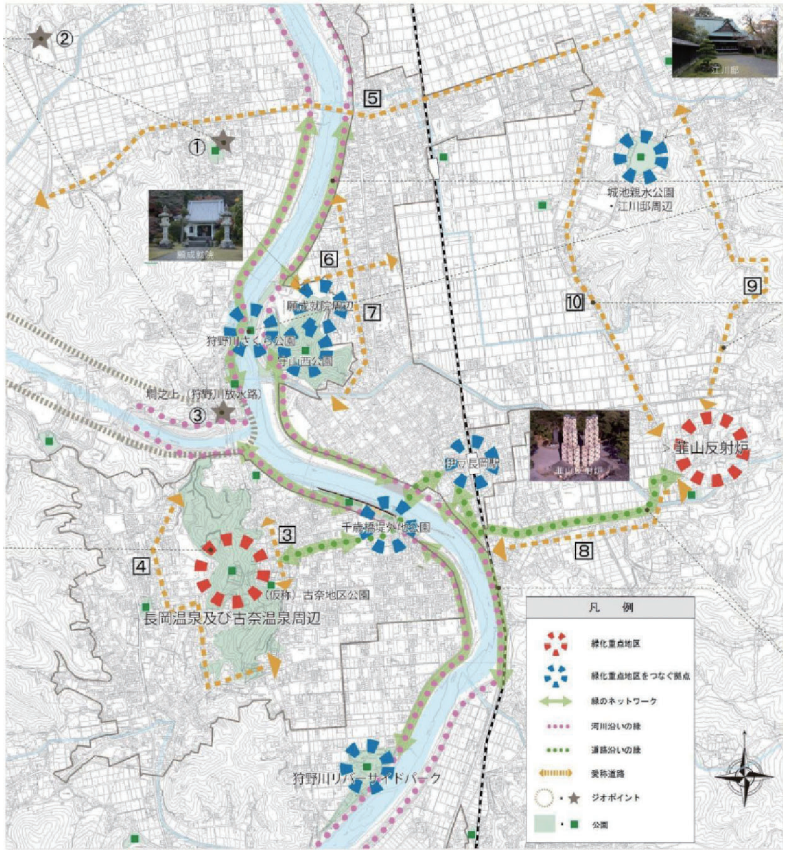


図　伊豆の国市緑の基本計画の全体像を示した図

出典：伊豆の国市「伊豆の国市緑の基本計画」

▶ 伊豆の国市歴史的風致維持向上計画　２０１８年３月策定

・本計画は、市指定無形民族文化財のほか、地域に根ざした祭りの維持・継承が困難となっていることなどの状況に対応するため、「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づき、地域に受け継がれてきた人々の営みの継承をはじめ、文化財の周辺環境の整備や歴史的建造物の復原等、歴史的な資産を活用したまちづくりを展開することを目的とするものである。

本計画では、維持及び向上すべき歴史的風致として６つの歴史的風致を位置付け、そのうち、狩野川は「狩野川をめぐる祭りと信仰にみる歴史的風致」に位置付けられている。

▶ 伊豆の国市景観計画　２０１４年６月策定　/２０２０年５月改定

本計画は、本市の豊富な景観資源を活かし良好な景観形成を推進するための基本的な考え方や取り組み方についてまとめたものであり、市域全体を景観計画区域として設定している。

景観形成の基本方針として、「美しい自然が織り成す景観を守る」、「歴史と文化が紡いだ景観を伝える」、「いきいきとした街並みの景観を育てる」、「周辺景観と調和する公共施設の景観を創る」、「人の暮らしや交流の景観を活かす」を掲げている。

特に狩野川については、「美しい自然が織り成す景観を守る」の中で、狩野川等の河川とその周辺の良好な自然環境の保全を図るとともに、河川景観と調和するよう街並み景観 を誘導する、と位置付けられている。

▶ 伊豆の国市観光地エリア景観計画　2020年3月改定

観光地エリア景観計画は、静岡県の景観形成の基本指針「ふじのくに景観形成計画」に基づき、市町が地域特性に応じて、良好な景観形成と観光地域づくりを目指し、景観ビジョンや具体的な景観施策を定めるものであり、地域（住民）・民間・行政それぞれの役割分担による持続可能な地域景観の保全・活用の実現を目指している。

良好な景観形成と観光地域づくりにつなげるための目指すべき姿（景観ビジョン）やそれに向けた具体的施策を示す「伊豆の国市観光地エリア景観計画」を市内を以下の４エリアについて策定している。

●【歴史景観エリア】（韮山反射炉、江川邸、守山中世史跡群）

・施設周辺だけではなく、周遊を意識した誘導サインの整備や、歴史・文化施設の案内看板や解説板、観光情報サイン等のコントロール（植栽、樹木の修景伐採）（公共サインや観光案内板の色彩、形状、配置）

●【温泉景観エリア】（古奈温泉、長岡温泉、源氏山）

・景観を楽しみながら安全に歩ける温泉場通りの環境整備。（温泉場の景観を意識した街路照明、道路交通環境等）
・古奈温泉、長岡温泉を結ぶ散策ルートの整備（遊歩道整備、景観を楽しめる桜や紅葉等の植樹、植栽の維持管理）
・古奈温泉、長岡温泉に向かうルート上には、温泉場への誘導につながる街路照明を整備。（建物や工作物等の配置、形状）

●【自然景観エリア】（葛城山、城山、狩野川）

・ジオサイト葛城山、城山等の保全に向けたルールづくり。（植栽、樹木の修景伐採）
・ジオサイトや景観も楽しめる自転車用、ハイキングルートの整備。

●【農業景観エリア】（市内北部の観光農業を含む農業振興地域）

・田園風景と富士山の眺望を楽しめるビュースポットや移動しながら景観を楽しめる周遊ルートを発信。
・屋外広告物、誘導案内サイン等のコントロール。

▶ 伊豆の国市観光基本計画　2015年3月策定

本計画では、市民一人ひとりが参加し、「毎日が魅力ある“おもてなしの伊豆の国”」の実現のための取り組みを推進し、その取り組みの推進によって、市民の生きがいや安らぎを生み出し、また、生活のゆとりと潤いに寄与することを目指している。

ウォーカブルに関連する施策としては、『歴史資源を活かす観光地づくり』の一つとして「ものがたり性のある回遊ルートの創出」、『健康・スポーツによる交流づくり』の一つとして「スポーツツーリズムの推進」が位置づけられている。

また、2021年度に策定されたアクションプラン（後期）では、官民連携による伊豆長岡温泉の活性化や大河ドラマ「鎌倉殿の13人」を契機とした新たな歴史遺産の発掘と活用等の取り組みによる地域活性化の実現を目指している。

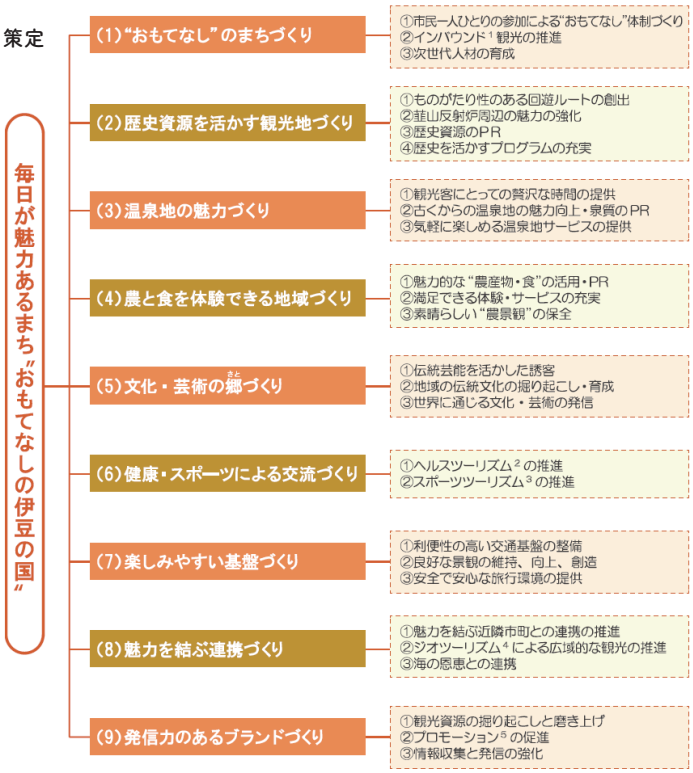


図　観光基本計画の施策の体系図

出典：伊豆の国市「伊豆の国市観光基本計画」

1-4 伊豆長岡地域におけるまちづくりの展開

官民連携まちなか再生推進事業と伊豆長岡温泉エリアマネジメント

▶ 温泉場通りお散歩市（2016 年～）

伊豆長岡温泉のメインストリートである「温泉場出逢い通り」沿いに立地する、歴史ある旅館「南山荘」が廃業した空き旅館となった後、地場産マルシェ「温泉場通りお散歩市」を 2016 年 3 月より、毎月第 2 日曜日に開催している。

近年では、旧南山荘だけでなく温泉場出逢い通り（道路と沿道）や、ミライ広場（旧さかなや跡地）などに拡張して開催されているほか、官民連携まちなか再生推進事業を契機とした「ミライ会議」をはじめとする公民学連携の取り組みと重なり合うことで「お散歩市」が徐々に進展している。幼児から高齢者が集う地域コミュニティ、新たな事業を生み出す出会いの場等、様々な取り組みを支援・創出する共創空間としても活用され始めている。

お散歩市の様子

▶ 一般社団法人伊豆長岡温泉エリアマネジメント

「伊豆長岡温泉ミライ会議」の事務局を務めるとともに、地域のシンクタンクとして、調査・企画や事業提案などを担う中間支援のための一般社団法人。未来ビジョンに基づく賑わいづくりの活動・社会実験などを通じ、温泉場にない新しい事業の創出や、地域の各事業者がつながるための企画や事業などを展開している。

▶ 伊豆長岡温泉地域のまちづくり変遷

萌芽期	2016.03	温泉場の有志メンバーが温泉場通りお散歩市を開始
初動期	2017.06	官民連携による伊豆長岡温泉の再生まちづくりの方向性について提言
プレ連携期	2018.07	まちづくりプラットフォーム事業によるプロジェクト会議がスタート （温泉駅の活用と再整備に向けた検討）
実践期	2020.05	国土交通省 官民連携まちなか再生推進事業に採択 「伊豆長岡温泉ミライ会議」の発足
	2020.12	お散歩市での実証実験（車両片側通行）１回目
	2021.01	お散歩市での実証実験（車両片側通行）２回目 お散歩市での歩行者天国 初実施
エリアマネジメント萌芽期	2021.03	伊豆長岡温泉未来ビジョンの策定
	2021.06	（一社）伊豆長岡温泉エリアマネジメントを設立
	2021.07	（株）まちづくり伊豆長岡温泉を設立
	2021.08	（一社）伊豆長岡温泉エリアマネジメントが都市再生推進法人に指定される
	2021.10	R３年度観光庁補助事業「既存観光拠点の再生・高付加価値化推進事業」の実施
	2022.03	伊豆長岡温泉未来ビジョンの改定に着手
エリアマネジメント構築期	2023.04	R５年度観光庁補助事業「地域と一体となった観光地の再生・観光サービス高付加価値化事業」に着手（２カ年事業として実施）

年表：(一社) 伊豆長岡温泉エリアマネジメント提供の資料をもとに作成

▶ 伊豆長岡温泉ミライ会議

国土交通省「官民連携まちなか再生推進事業」の採択に伴う、「未来ビジョン」策定及び実行のために設立された、伊豆長岡温泉地域のまちづくりについて、「居心地良く歩きたくなるまちなか」の形成に向けて多様な人材の集積や様々な民間投資を惹きつけ、まちの魅力向上を目的とした取り組みを支援する取り組みを進めるエリアプラットフォームである。大切な地域資源である温泉を守りながら、地域で暮らし続けられるコミュニティの構築を目指す。

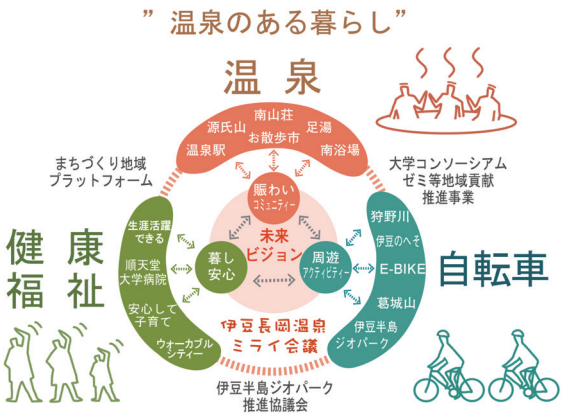


図　まちづくりを推進する 3 つのテーマ

参画事業者（2024 年 6 月現在）：
温泉場通り振興会、伊豆の国市、伊豆の国市観光協会、市内宿泊事業者・民間事業者（メリダジャパン、プラスニューオフィス、JM）、伊豆半島ジオパーク推進協議会（美しい伊豆創造センター）、伊豆箱根鉄道グループ、三島信用金庫、教育研究機関（横浜国立大学、日本大学、法政大学、図的表現活用研究所）

▶ 伊豆長岡温泉未来ビジョン

上記事業に基づいて 2021 年 3 月に策定した「未来ビジョン」は、「観光で訪れる方、地域で働く人・学ぶ人・暮らす人等あらゆる人にとって、快適で魅力あふれるまちとして再生し、”温泉のある暮らし”を目指しつつ、「温泉」×『健康・福祉』×『自転車』の掛け合わせによるまちづくり」を構想している。

ビジョンの中では、観光や生活拠点の強化、地域周遊の機会向上、温泉場空間の形成などを目指す 9 つの取り組みを掲げている。

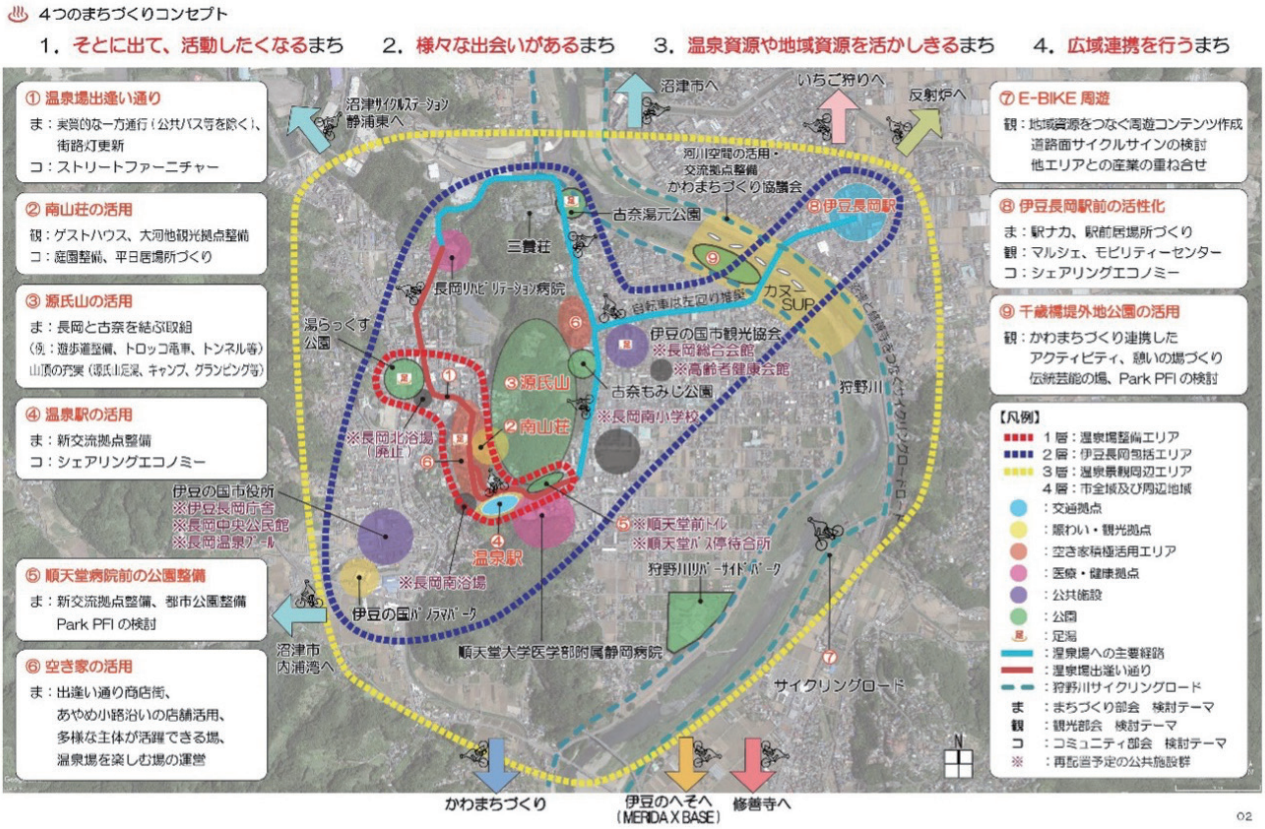
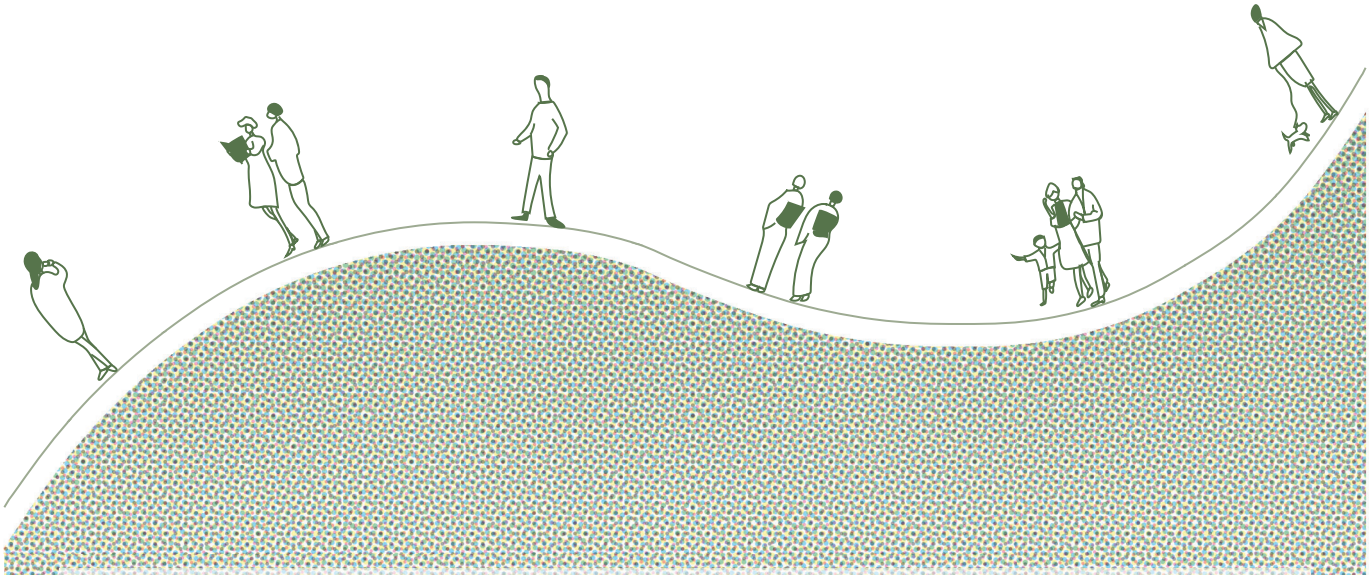


図　伊豆長岡温泉未来ビジョンにおける 4 つのまちづくりコンセプトと 9 つの取り組み



Chapter 02
伊豆の国市におけるウォーカブルの考え方

2-1.「ウォーカブルなまちづくり」とは？

2-2.「ウォーカブルなまちづくり」における目的の整理

2-3. 伊豆の国市におけるウォーカブルビジョンの考え方

2-1「ウォーカブルなまちづくり」とは？

「ウォーカブルなまちづくり」の多義性

近年、『「ウォーカブル」なまちづくり』という言葉を用いたまちづくりが全国各地で推進されている。主に、人を中心とした豊かなまち、そして、歩いて暮らせるまちを目指して使われているまちづくりの手法だと思われるが、実際には、「ウォーカブル」とは具体的に何を指しているのか、どういうまちがウォーカブルなまちなのか、あるいは、どんな目的のために「ウォーカブルなまちづくり」を行うのかというイメージは、実は、人やまちによってそれぞれ異なる可能性がある。実際、「ウォーカブル（Walkable）」という言葉には、「歩きやすい」「安全で」という意味や、「歩いて着くほど十分近い距離にある」という意味を有する場合もある（Cambridge Dictionary）し、「歩いて楽しい」「歩きたくなる」ということを含む場合もある。時には、健康増進のためにあるくまちづくりを指すこともあり、その目指すところは様々である。

ここでは、「ウォーカブルなまちづくり」をめぐるまちづくりの目的・目標の可能性を挙げ、伊豆の国市の「ウォーカブルなまちづくり」は、どんなところを考えて行うべきかを考えるための整理をしたい。

日本における「ウォーカブルなまちづくり」の進展

これまで、「歩行者をめぐる」まちづくりは、主に、自動車への対応が中心であり、自動車中心の道路網における交通安全、あるいは、移動円滑化の観点から行われるまちづくりが中心であった。歩車分離や歩行者専用化、あるいは、交通静穏化（自動車の速度を下げて、歩行者の安全な通行を促す）などが図られ、自動車と歩行者がどのように調和してまちを動くことができるかが考えられてきた。

これらはみな、自動車にとってであれ、歩行者にとってであれ、道路を「移動空間」とみなしており、道路が持つ機能は「移動空間」に限定されている。しかし、もっと時代を遡れば、江戸時代、高札場や橋詰広場など、人の集まる場は、「みち」とともにあり、お祭りも「みち」を用いて行われていた。また、海外に行けば、みちの脇にあるオープンカフェやオープンテラスなど、屋外や道路の上でもお茶したりたたずんだりしている人たちもたくさんおり、ストリートでマルシェが開催されていたり、緑豊かな街路樹のメインストリートや、路地裏などでも豊かな活動が行われている。日本でも、2000 年代以降、道路上でのオープンカフェ実施の取り組みや、ベンチやファニチュアの設置などを通じて、みちでたたずむ、遊ぶ、活用するなど、みちで「活動」するという観点でのまちづくりも進められつつある。

さらに、近年の日本では、社会経済構造の変革や人口減少による縮減時代を迎える中で、商店街のシャッター街化などによる地域の活力低下が懸念されている。そのような中で、都市の魅力を向上させ、まちなかに活気を創出することが求められており、改めて、都市空間における道路を含めた屋外空間や公共空間を「都市の資産（アセット）」ととらえ、この都市の資産を有効に活用してまちなかの活気づくりをすることが求められている。

そんな中で、近年、「ウォーカブルなまちづくり」という言葉を用いて、まちなかの豊かな都市空間創出を行うまちづくりが進められつつある。1 章でも述べたとおり、「都市の多様性とイノベーションの創出に関する懇談会」（2019）において、人口減少時代における付加価値の創出と地域課題の解決の場となる都市のあり方について、都市空間を人中心の空間へ転換し、民間投資と共鳴しながら「居心地が良く歩きたくなるまちなか」を形成することが目標とされ、その中で、WEDO（Walkable, Eye level, Diversity, Open）のうちの一つとして、「ウォーカブル」（歩きたくなる）が注目された。これを基に、ウォーカブル推進都市やまちなかウォーカブル区域の指定なども進んでおり、全国でウォーカブルなまちづくりが推進されているが、実際には、その内容や目的は、その都市によって様々である。

2-2「ウォーカブルなまちづくり」における目的の整理

「ウォーカブルなまちづくり」の具体的な目的

ここでは、ウォーカブルなまちづくりの具体的な目的として考えうる項目を列挙してみる。この中で、伊豆の国市のウォーカブルなまちづくりは、どの項目を重視して進めてゆくべきかを考える一助とする。

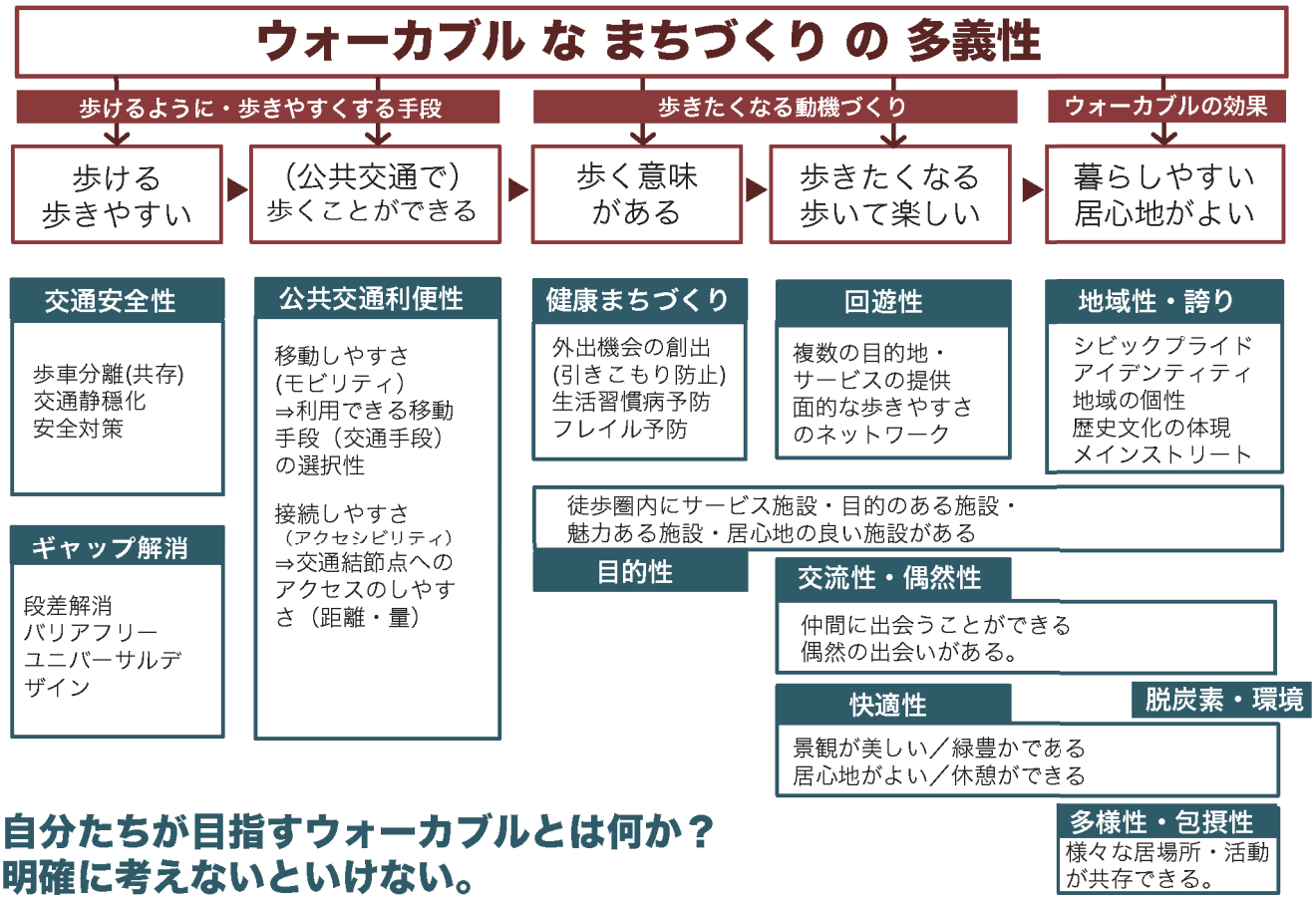
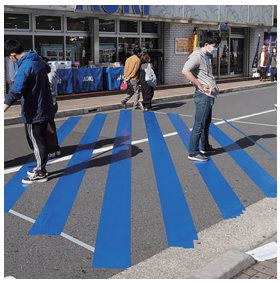


図　ウォーカブルなまちづくりがめざす多様な目標

2-2「ウォーカブルなまちづくり」における目的の整理

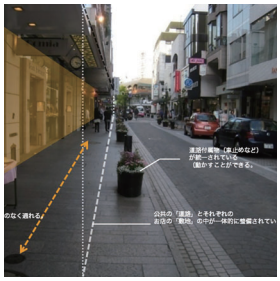
ここでは、「1. 歩けるように、歩きやすくなるための手段」として、「2. 歩きたくなる動機づくり」として、そして、「3. ウォーカブルなまちづくりの効果」として考えられる 13 の目的・目標を提示する。

1．歩けるように、歩きやすくなるための手段



（1）交通安全性・交通静穏性

まちが「歩きたくなるまち」となるには、そもそも、安全に歩ける（歩くことができる）、歩きやすいみちが用意されていることが大事である。そのためには、交通安全性の高いまち、安心して歩くことのできるまち、交通静穏性（自動車等が速度を抑えて事故が起こりにくい）の高いまちとなっていることは、重要な条件となりえる。日本の都市は、基本的に道路が狭いため、自動車の通行と歩行者の安全を両立するのが難しいことが多い。



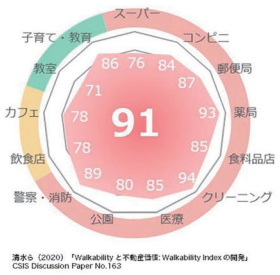
（2）ユニバーサルデザイン・移動円滑性

誰しも自由に歩けるまちになることを考えると、段差やギャップの少ない、移動円滑化が図られたバリアフリーなまちとなること、あるいは、すべての人にとって利用しやすいユニバーサルデザインを考えたまちをめざしてゆくことが必要となる。

（3）公共交通利便性

自由にまちを移動しようとすると、運転ができない人（高校生以下の若い人たち、免許返納した高齢者、免許を有していない人、車以外で訪れた観光客など）でも訪れやすい町である必要がある。つまり、公共交通が充実していて、車がなくともスムーズに移動できるまちは、公共交通を用いながら、目的地までまちをあるいて移動する機会も増えることになる。

2．歩きたくなる動機づくり

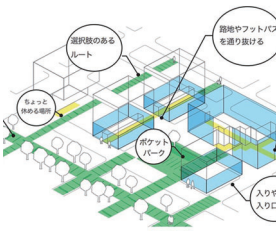


清水ら（2020）「Walkability と不動産価値: Walkability Index の開発」CSIS Discussion Paper No.163

出典：

（4）目的性及び目的地の近距離性

そもそも、まちのなかに、行きたいところ、あるいは行く目的があるところ、立ち寄りたいところがなければ、歩く以前に訪れないまちとなってしまう。そして、多数の目的地が、コンパクトに密集して存在している、行く目的が多く用意されているまちは、あるいて訪れることも多くなる。また、アメリカの Wark Score という指標では、ある敷地から徒歩で各サービス施設にアクセスできるかどうかが点数化されている。自分のいる場所からできるだけ多くの目的地やサービスに歩いて行ける確率が高いまちは、ある意味、ウォーカブルなまちであると言える。



（5）回遊性・ネットワーク性

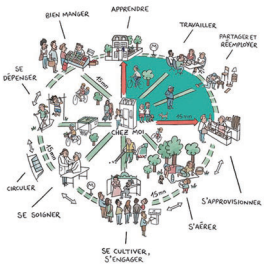
(4) に加えて、まちなかに目的地や活動の場がたくさん用意されたときに、それらがバラバラであると、相乗効果がなく、様々な活動の場を順番に、あるいは、まとめて訪れることができるような、連続性（回遊性）やそれらがネットワークとしてつながっているようなまちでは、ついでに歩いてまちの施設を用いたり、あるいて暮らすことのできるようなまちとなる可能性が高い。

（6）交流性・偶然性（セレンディピティ）

さまざまなものが集まり、自由に歩けるまちは、多様な「交流」が生まれるまちとなる。また、みんながまちを歩いているようになると、突然声をかけられたり、予期せぬ出会いに遭遇したり、偶然の出会いが生まれやすくなるが、こうした偶然性は、生活を豊かにする大事な要素でもある。

（7）快適性・景観や風景の魅力

単に歩ける、歩くことのできるだけでなく、居心地がよかったり、風景が美しかったり、快適で魅力的な場が用意されていることで、歩き「たい」と思える、歩く動機がアップするようなまちとなることが求められる。



出典：パリ市 HP「15 分都市」

（8）生活圏の構築

近年、パリ市では、「15 分圏都市」、メルボルンやポートランドでは「20 分圏都市」などと言われるように、誰もが生活を営むためのサービスに徒歩や自転車でたどり着くことのできる、「生活圏」を大切にしたまちづくりを推進する都市が増えている。(4) がさらに発展して、まち全体が生活圏内で暮らせるようなまち、暮らすだけでなく、働く (職住近接) や営むも生活圏内で行えるまちを目指すことが考えられる。

（9）健康まちづくりの増進

近年では、健康増進のためのウォーキングやランニングが盛んに行われているが、長い距離を快適に歩きやすいまちは、こうした健康増進にもつながる。また、高齢者の外出機会を増やすことが、健康寿命の増進に寄与することにもつながるため、まちにでて歩きたくなるまちを目指すことが健康まちづくりにもつながる可能性がある。

2-2「ウォーカブルなまちづくり」における目的の整理

3．ウォーカブルなまちづくりによる効果

（10）多様性・社会的包摂性

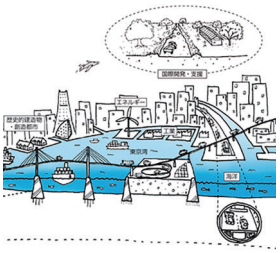
まちなかを自由に快適に歩けるようになると、まちに様々な人たちや機能が集まり、結果として、様々な世代や様々な属性の人たちが活動することのできる多様性のあるまちがはぐくまれる。また、(2) のユニバーサルデザインへの意識も背景としながら、誰もがまちに居場所を持つことができる、いてもよい場所が増えるような、寛容性・包摂性のあるまちとなる可能性がある。

（11）都市活力の向上・にぎわい創出

「居心地がよく歩きたくなるまちなか」を実現することを通して、多くの人たちがまちなかに集まり、まちなかを利用し、それが目に見える形となることで、都市の活力向上を図り、にぎわい創出に寄与する可能性がある。ただし、実際ににぎわい創出を実現するには、歩きやすく・歩きたくなるまちを目指すのみならず、様々な方法を重ね合わせることが重要であるとともに、そもそも、「活気」「にぎわい」とは何か、これを通じて何が得られるかを考えることも大切である。

（12）地域性・シビックプライド

人々がまちに出てまちをあるくようになり、快適で魅力的な居心地のよい都市空間ができてくると、地域への愛着もわき、地域への誇り（シビックプライド）も生まれてくる。逆に言えば、居心地のよい歩きたくなるまちなかづくりを進めることで、シビックプライドが醸成されうる、ということもできる。



（13）環境・低炭素社会

(3) も含めて、歩いて暮らせるまちを目指すことは、無駄に化石燃料の使用することも少なくなり、結果、低炭素社会や環境を考えるまちづくりの推進に寄与することにもなる。

2-3 伊豆の国市におけるウォーカブルビジョンの考え方

前述の通り、各地域で目指す「ウォーカブルなまちづくり」・「ウォーカビリティ」の目標は、それぞれ異なるものであり、それは、目指す都市のあり方によっても変わってくる。従って、伊豆の国市で、どの項目を目的としながら「ウォーカブルなまちづくり」を推進してゆくかは、独自に考える必要がある。また、地域の特徴に合わせて、その目標が目指すところも変わってくる（例えば、E-Bike や自転車利用が盛んであるまちでは、ウォーカブルの中に、自転車の使いやすさ（バイカブル）もまちづくりの目標に含む、など）。

1 章や 3 章における伊豆の国市のこれまで築いてきた計画や、地域のポテンシャル・課題などを読み込み、また、市民のみなさんで目指す伊豆の国市の将来像を踏まえた上で、どんな目的のためにウォーカブルなまちづくりを行うか、もしくは、ウォーカブルなまちづくりを通して何を実現してゆきたいか、考えることが大切である。

また、豊かなウォーカビリティを目指すには、上記の項目ができるだけ複数・沢山用意されてゆくような、「重ね合わせ」が重要になってくる場合もある。さらには、一つの施策を実施することが、上記の多くの項目を達成することにつながることも考えられる。したがって、伊豆の国市で目指すべき「ウォーカブルなまちづくり」は何であるか、そしてこれをを実現する施策の現状がどのように行われているかを踏まえ、上記の目的のどの項目が達成しうるか、あるいは達成すべきかについても考えてゆく必要がある。

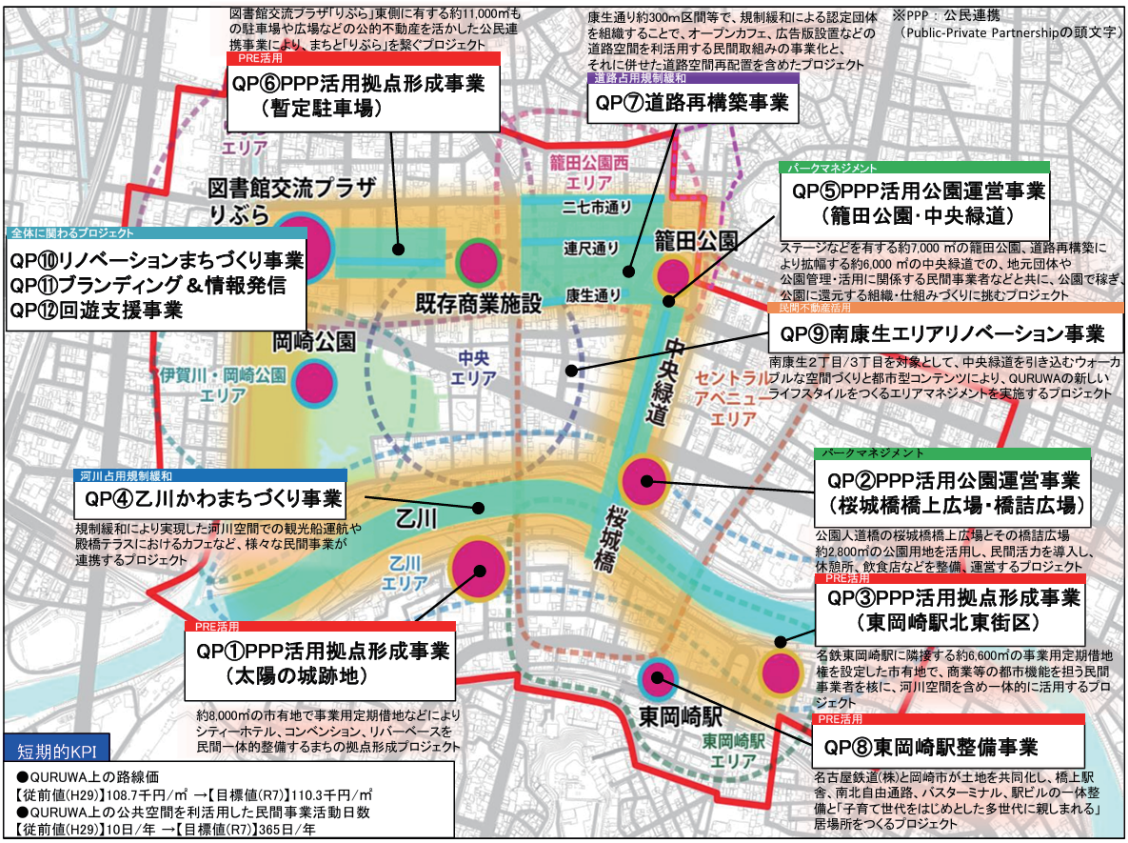
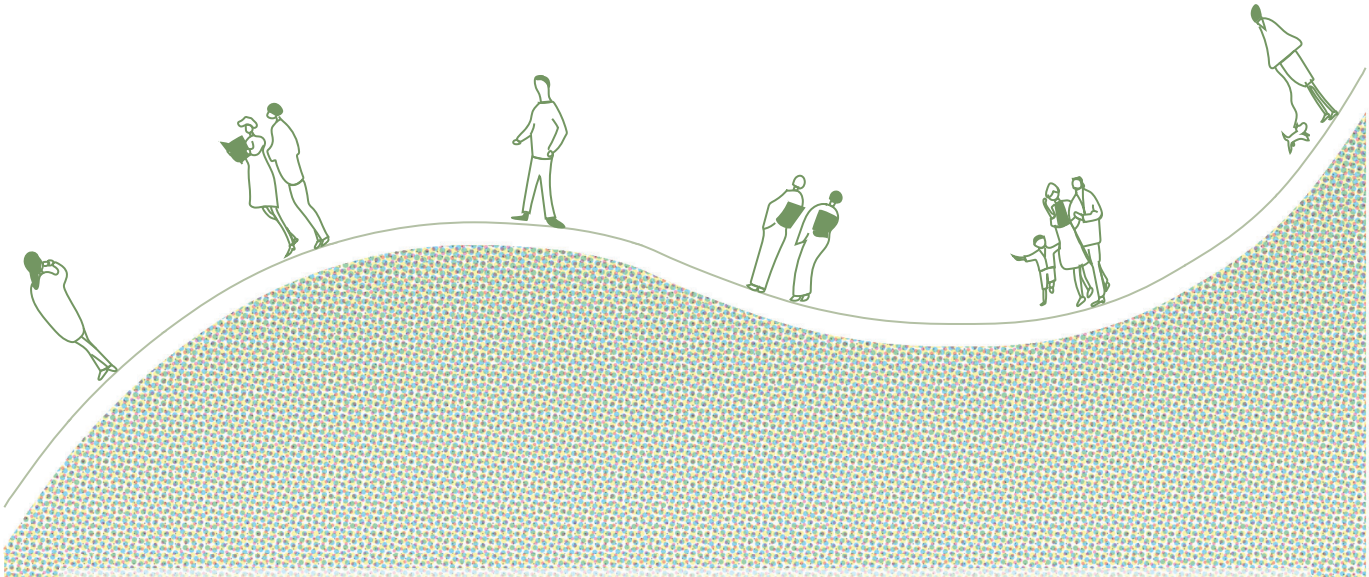


図　まちなかにおけるウォーカブルなまちづくりを進める上でのビジョンの事例（岡崎市の QURUWA 戦略）
出典：乙川リバーフロント地区公民連携まちづくり基本計画 - QURUWA 戦略 -



Chapter 03
伊豆の国市におけるウォーカブルなまちづくりの現状

3-1. ウォーカブル基礎調査分析

3-2. ウォーカブル現状インタビュー調査

3-3. バイカブルリサーチ

3-1　ウォーカブルなまちづくり基礎調査の概要

▶ ウォーカブルなまちづくり基礎調査

ウォーカブルを考える上で、目指す視点は、それぞれのまちで異なっている可能性があり、複数の視点（1. 交通安全性 / 2. ユニバーサルデザイン性 / 3. 公共交通利便性 /4. 目的性 /5. 回遊性・ネットワーク性 /6. 交流性・偶然性 / 7. 快適性・景観や風景の魅力 /8. 生活圏の構築 /9. 健康まちづくりの増進 /10. 多様性・包摂性 / 11. 都市活力の向上・賑わい創出 /12 地域性・シビックプライド /13. 環境・低炭素社会）のうち、どの視点に着目してウォーカブルを実践するのか、つまり、単に歩きやすい空間を用意するだけでなく、何のためのウォーカブルなのかについて、都市ごとに考えることが、特に地方都市では重要になると考えられる。

伊豆の国市伊豆長岡地域においても、同様に、何のためのウォーカブルかを考えていくために、上記複数の視点ごとに、調査項目を以下のように仮説的に設定して、現状調査及び分析を行った。

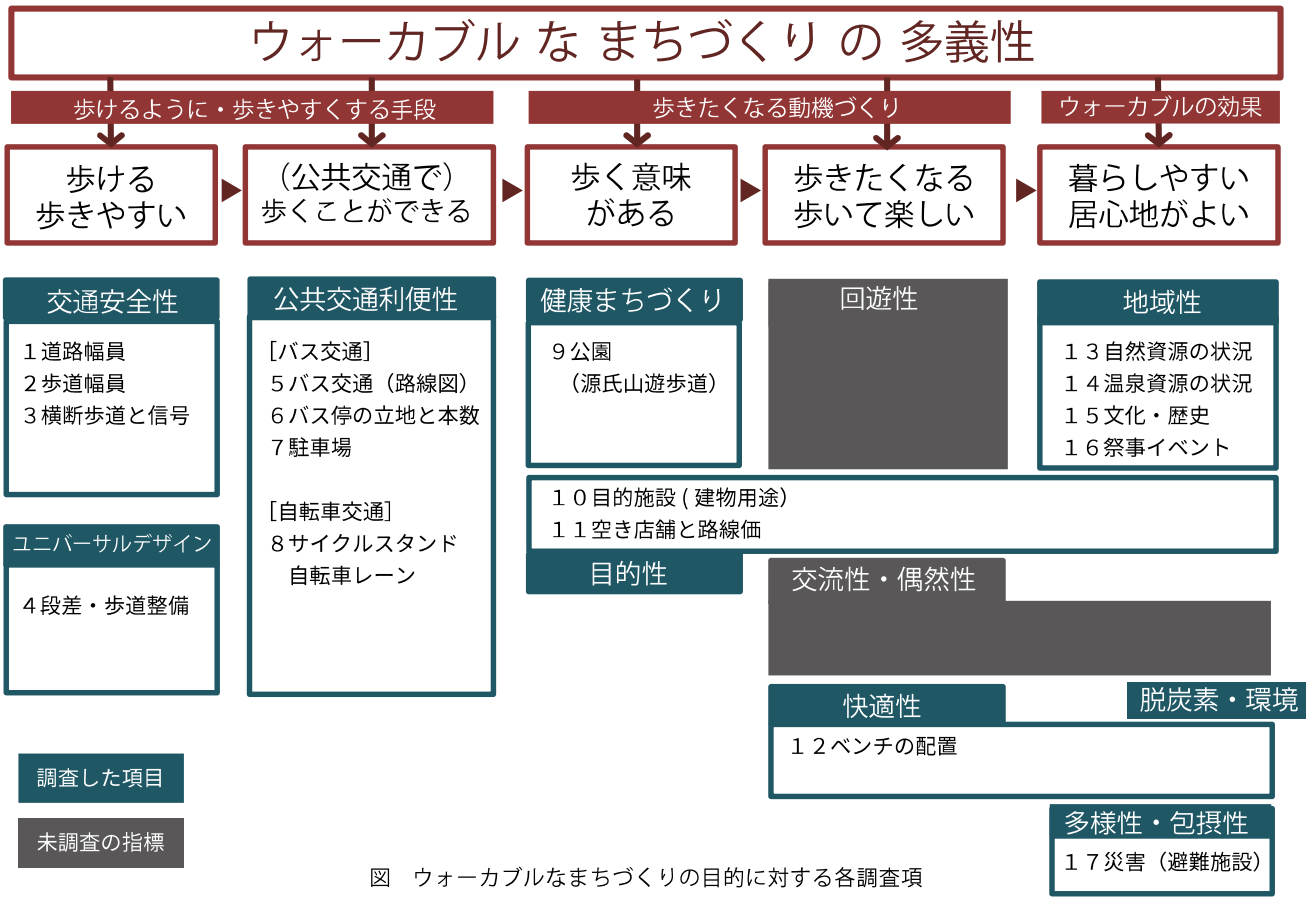


図　ウォーカブルなまちづくりの目的に対する各調査項

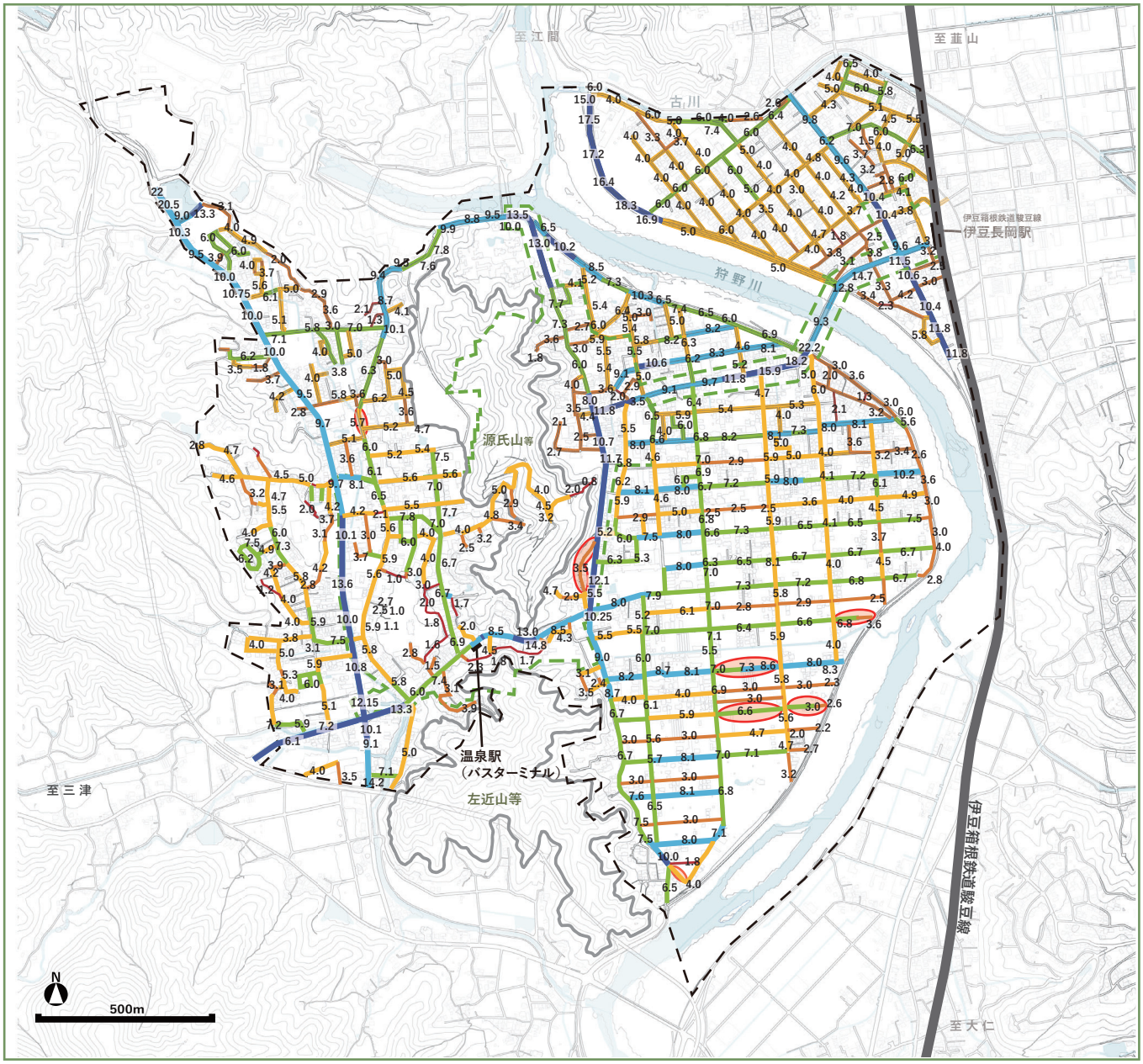
▶ ウォーカブルなまちづくりの現状インタビュー調査（3-2）

3-1 の現状調査に加え、地域住民視点の実情を知るため、地域の高校生や住民、旅館関係者等にインタビューを実施した。地域内の歩きやすい / 歩きたくなる・歩きにくい / 歩きたくない・自転車で走りやすい / 走りたくないという場所とその理由を調査した。

▶ バイカブルリサーチ（3-3）

3-3 では、ウォーカブルと合わせて目指していきたい方向性となるバイカブルに向けた調査を二つ実施した。バイカブルの主な要素である自転車走行環境の現状把握を目的に、狩野川沿いのサイクリングロードにおける狩野川自転車走行環境調査を実施した。さらに、お散歩市来訪者を対象にアンケート調査を実施し、①市民の自転車利用頻度や利用目的の把握、②自転車休憩施設に求められている施設・機能の把握、③ウォーカブル・バイカブルルートの策定に関連して、市民が市内で魅力に感じている箇所を把握した。

3-1-1　道路有効幅員　【交通安全性】



凡例

調査範囲

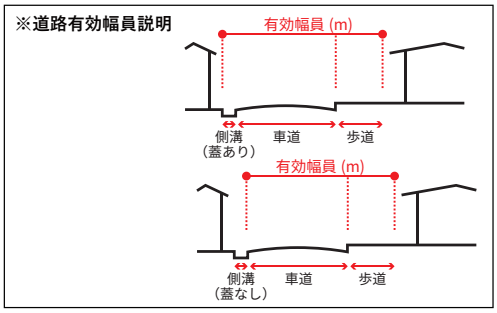
まちなか
ウォーカブル区域

・道路有効幅員

- -1.9m
- 2.0m-3.9m
- 4.0m-5.9m
- 6.0m-7.9m
- 8.0m-9.9m
- 10.0m-
- 側溝に蓋のない道

【道路有効幅員】

道路有効幅員のデータが伊豆の国市道路台帳で道路有効幅員のみオープンデータとして公表されていたため、そのデータを地図に反映させた。



〈出典〉

【道路有効幅員】伊豆の国市道路台帳、静岡県GIS（2022.09.08）

【側溝の蓋の確認】google map　ストリートビュー (2022.09.11)

▶ 調査概要・方法

住民が安全に歩くことができるという交通安全性の観点からウォーカブルなまちづくりを考えるため、地域内の道路幅員を調べ、道路幅員が狭くて人と車がすれ違う際に危険な箇所を明らかにした。

調査手法は、伊豆の国市道路台帳において道路有効幅員のみオープンデータとして公表されていたため、そのデータを地図に反映させ、長さで属性を分けて色を付けた。その際、側溝にふたがない（道路の幅員に含まれない）場所についてはgooglemapおよびストリートビューを用いて確認・地図にプロットした。

道路幅員：道路の幅の広さ。車道・歩道だけでなく、路肩、植樹帯、中央帯等を含めた道路構造物全体の幅を指す。

▶ リサーチ結果

【県道の道路有効幅員】

伊豆長岡地域を東西・南北に貫く比較的幅員の広い大通りでは、古奈北側、温泉駅ーパノラマパーク間の一部で他の区域と比べて幅員が狭く、8.0m以下の幅員となっている。その一方で、現在一部の区間において、道路整備が進行中である。

県道の道路幅員の様子（温泉駅ーパノラマパーク間）

【住宅地の道路有効幅員】

天野、富士見地区周辺の住宅地では、6.0m以上の道路有効幅員が確保されている通りが、南北に一本、東西には４本、存在していた。

古奈北側には、県道に東側に幅員が広い通りが一本通っている。

【伊豆長岡温泉周辺の道路有効幅員】

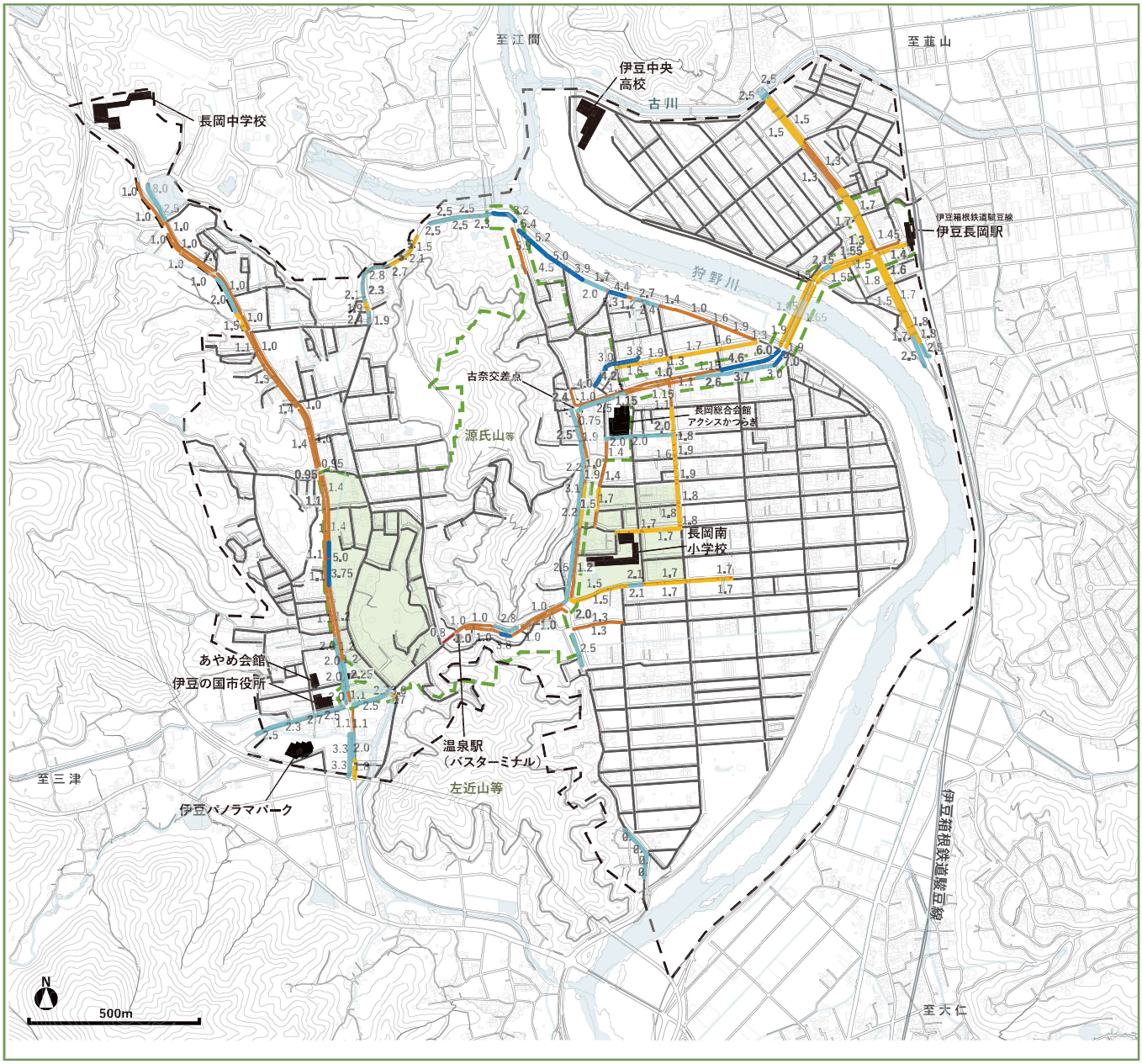
伊豆長岡温泉周辺に 2mほどの路地（裏道）が通っており、車通りの多い道を利用せずとも細い道を利用して歩行できる可能性がある。

住宅地の道路幅員の様子（富士見地区の住宅街）

● まとめ

県道の道路幅員は一部狭く（温泉駅ーパノラマパーク間）歩きにくい区間がある。それ以外の住宅街の道路は概ね 8m 以下の細い道路である。うらみちは歩行者のための道として活用できる可能性がある。

3-1-2　歩道幅員　【交通安全性】



凡例

調査範囲

まちなか
ウォーカブル区域

・歩道幅員

0m
0.1m-0.9m
0.9m-1.4m
1.5m-2.0m
2.0m-3.4m
3.5m-

ゾーン30

※ゾーン30　イメージ
出典：警察庁交通局「ゾーン30」の概要

〈出典〉
【道路有効幅員】伊豆の国市道路台帳、静岡県GIS（2022.09.08）
【側溝の蓋の確認】　google map　ストリートビュー (2022.09.12)

▶ 調査概要・方法

住民が安全に歩くことができるという交通安全性の観点からウォーカブルを考えるため、地域内の歩道幅員を調べ、歩行者が安全に通行できる道路がどのくらいあるかを調査した。

幅員：道路の幅の広さ。車道・歩道だけでなく、路肩、植樹帯、中央帯等を含めた道路構造物全体の幅を指す。

歩道：専ら歩行者の通行の用に供するために、縁石線又はさくその他これに類する工作物により区画して設けられる道路の部分を指す。そのため、歩道がない道路に、歩行者の通行のために設置される「路側帯」は歩道に含めない。

調査手法は、伊豆の国市道路台帳において道路有効幅員のみオープンデータとして公表されていたため、そのデータを地図に反映させ、長さで属性を分けて色を付けた。色は道路の移動円滑化整備ガイドラインより2mの幅員がないと車いすを含めた歩行者のすれ違いを円滑に行うことが難しいことから2mを基準として色分けを行った。

▶ リサーチ結果

【県道の歩道幅員について】

県道沿いの歩道の多くが 2.0m未満（1.0 ～ 1.5mが多い）で、狭くなっている。その中で、部分的に幅員が整備され広くなっている所が見られた。

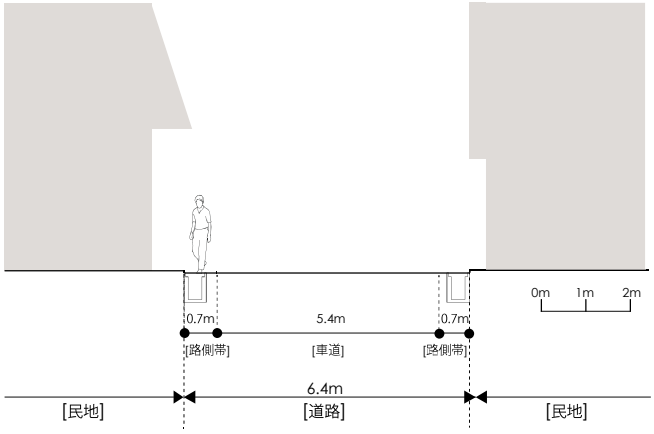
長岡駅から古奈交差点までの通りにかけて一律で幅員をとられている道が少なく、場所によって歩道幅員の変動があり狭くなったり広くなったりしており、歩きにくいと考えられる。

古奈交差点の以北、温泉駅ー市役所交差点（長岡 IC 東交差点）の一部は県道では歩道がとられておらず、歩いて通るには少し危険な状況にある。

県道の道路の様子

【市道の歩道幅員について】

- 市内の多くの道路で歩道は設置されていない。
- 温泉場出逢い通りには歩道がない。
- 長岡南小学校周辺は歩道が整備されているがほとんどが 2m以下であり、数人で歩く際には狭いと考えられる。
- 伊豆中央高校についても歩道が整備されておらず、安全に登下校できる通学路が用意されていない。
- 古奈地域には、県道の一方裏手と狩野川沿いには 2m以上歩道がとられている道路があり、比較的通行しやすい通りであると考えられる。

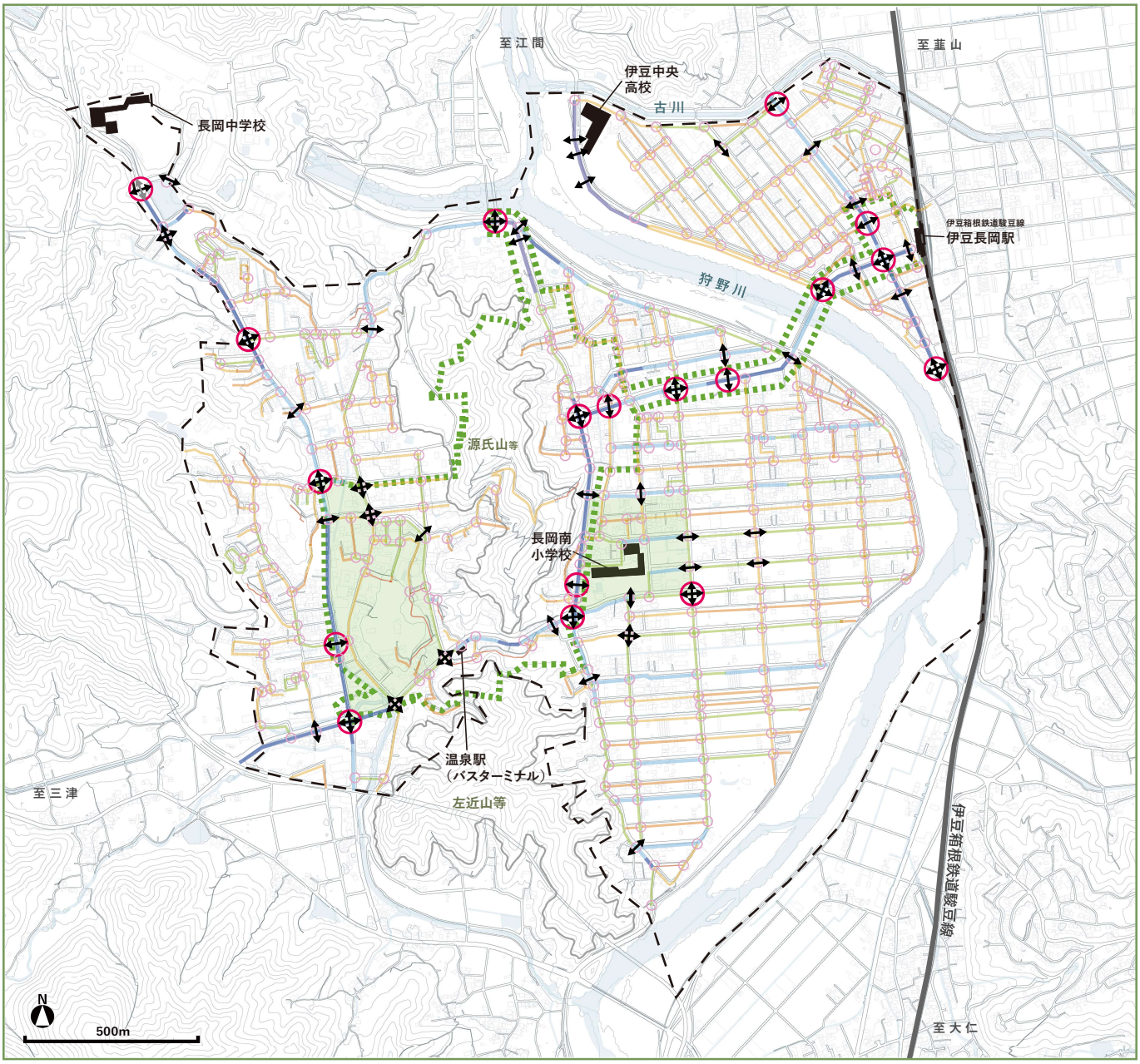


出会い通りの道路断面図

● まとめ

県道の歩道幅員の多くが 2.0m 未満であり、決して歩きやすい道とは言えない。また、市道も同様であり、この地区は歩行者が歩くには危険な箇所が多いと言える。

3-1-3　横断歩道と信号　【交通安全性】



凡例

調査範囲　まちなか ウォーカブル区域

・道路有効幅員

-1.9m　6.0m-7.9m
2.0m-3.9m　8.0m-9.9m
4.0m-5.9m　10.0m-

・交通安全施設

横断歩道　信号機あり　ゾーン30
歩道橋　信号機なし

※矢印の方向は道を横断可能な方向

※三叉路以上の交差点を対象に信号機の有無を調査した。

〈出典〉
【道路有効幅員】
伊豆の国市道路台帳、静岡GIS（2022.09.08）
【横断歩道】　【信号機】
Google Mapストリートビュー（2022.10.17）
【ゾーン30】
広報伊豆の国令和４年４月号p１４

▶ 調査概要・方法

住民の日常的な移動の安全性の観点からウォーカブルなまちづくりを考えるため、地域内の横断歩道とその信号の有無を調査した。

調査手法は、横断歩道についてはgoogle　mapを用いて確認し、横断歩道と歩道橋を矢印で、そしてその場所の信号の有無を色を分けて地図にプロットした。また、ゾーン30については、広報伊豆の国令和4年4月号を用いて明らかにし、地図に反映させた。

ゾーン30：区域（ゾーン）を定めて時速30キロの速度規制を実施するもの。生活道路における歩行者や自転車の安全な通行を確保することを目的とした交通安全対策の一つである。

▶ リサーチ結果

【国道・県道沿い】

国道・県道沿いの交差点部では、信号及び横断歩道が一定区間で設けられていた。ただし、温泉駅前の道や古奈交差点以北の道では横断歩道のみが整備されている状況にあった。

横断歩道のみが整備されている温泉駅前の横断舗装

【住宅街】

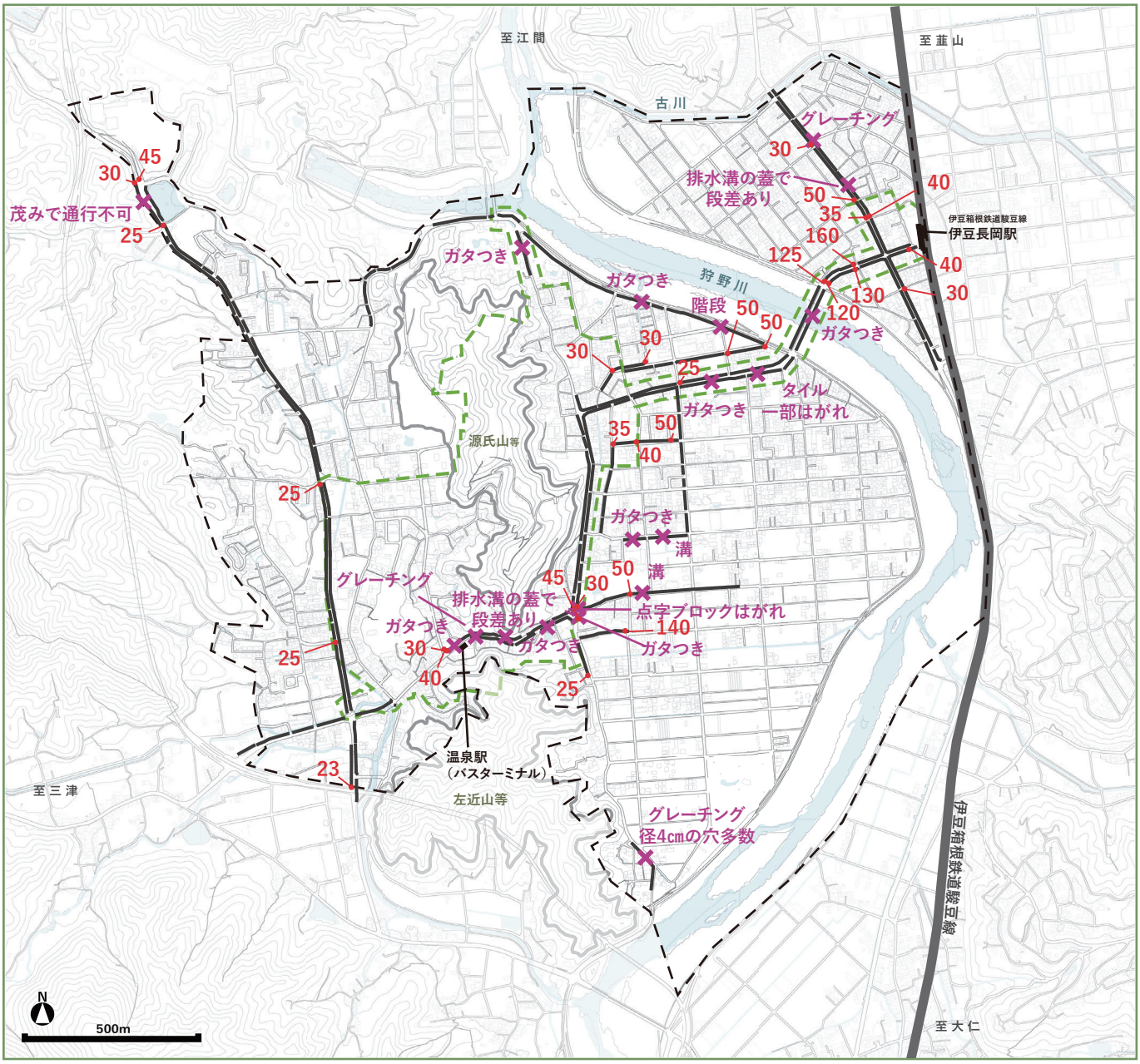
天野周辺の住宅街、伊豆長岡駅周辺の住宅街では横断歩道・信号が整備されていない箇所が多く見られた。その一方で、長岡南小学校周辺といったゾーン 30 に指定されている区域では、多くの交差点部に横断歩道が整備されていた。

ゾーン 30 の整備の様子

● まとめ

国道や県道の交差点部では信号・横断歩道が一定区間設置されている一方で、信号がない横断歩道の場所が 2 か所あった。また住宅街では横断歩道がない場所も多くあった。

3-1-4　段差・歩道整備　【ユニバーサルデザイン】



凡例

調査範囲

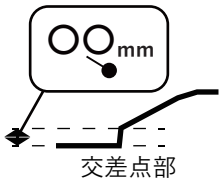
まちなか
ウォーカブル区域

調査箇所

・交差点部の段差

20～ mm

※図の見方



・歩道の整備状況

歩きにくいと思われる箇所（目視による調査）
※具体的な状況については、簡潔に記載

〈出典〉
基準について：（R4.06）国土交通省道路局『道路の移動等円滑化に関するガイドライン_第2部　道路の構造及び旅客特定車両停留施設を使用した役務の提供_1章　歩道等及び自転車歩行者専用道路等』p.41。
歩道については、1-2歩道幅員を参照。

▶ 調査概要・方法

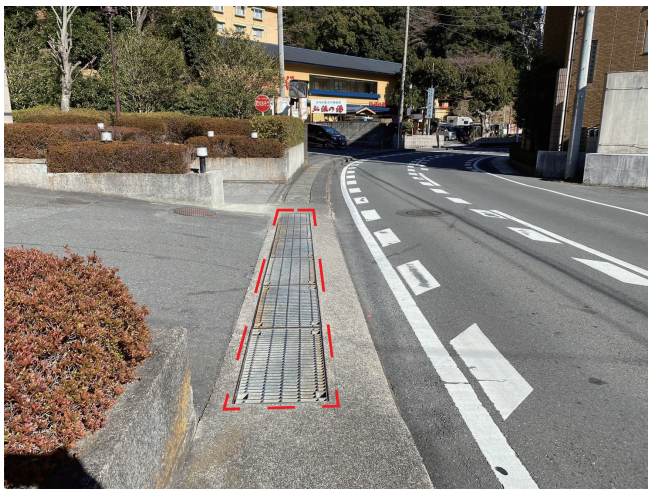
地域内が誰にとっても歩きやすく段差のない状態になっているか分析するため、交差点部の段差の高さと歩道の舗装等を調査した。なお、横断歩道接続部の歩道高さは20mmが標準とされているため、高さが20mm以上の段差を地図上にピックアップした。

3-1-2歩道幅員から、歩道幅員のある歩道を抽出し、現地踏査を行った。段差は左記部分を計測、整備状況については目視でチェックを行った。

▶ リサーチ結果

交差点部の段差は、所々、大きな段差があり、特に、伊豆長岡駅から千歳橋へと向かう歩道で大きな段差が多く確認された。

歩道の整備状況については、学生の目視での調査となるが、特に順大医学部付属病院から温泉駅までの歩道で、段差やグレーチングなどが確認された。



グレーチング

今回の調査では、歩道指定のある場所のみの調査であり、歩道のない場所では路側帯部分・側溝の蓋の上などを歩く必要があるため、高齢者や車いすの方々にとっては歩道以上に歩きづらい区間があると考えられる。

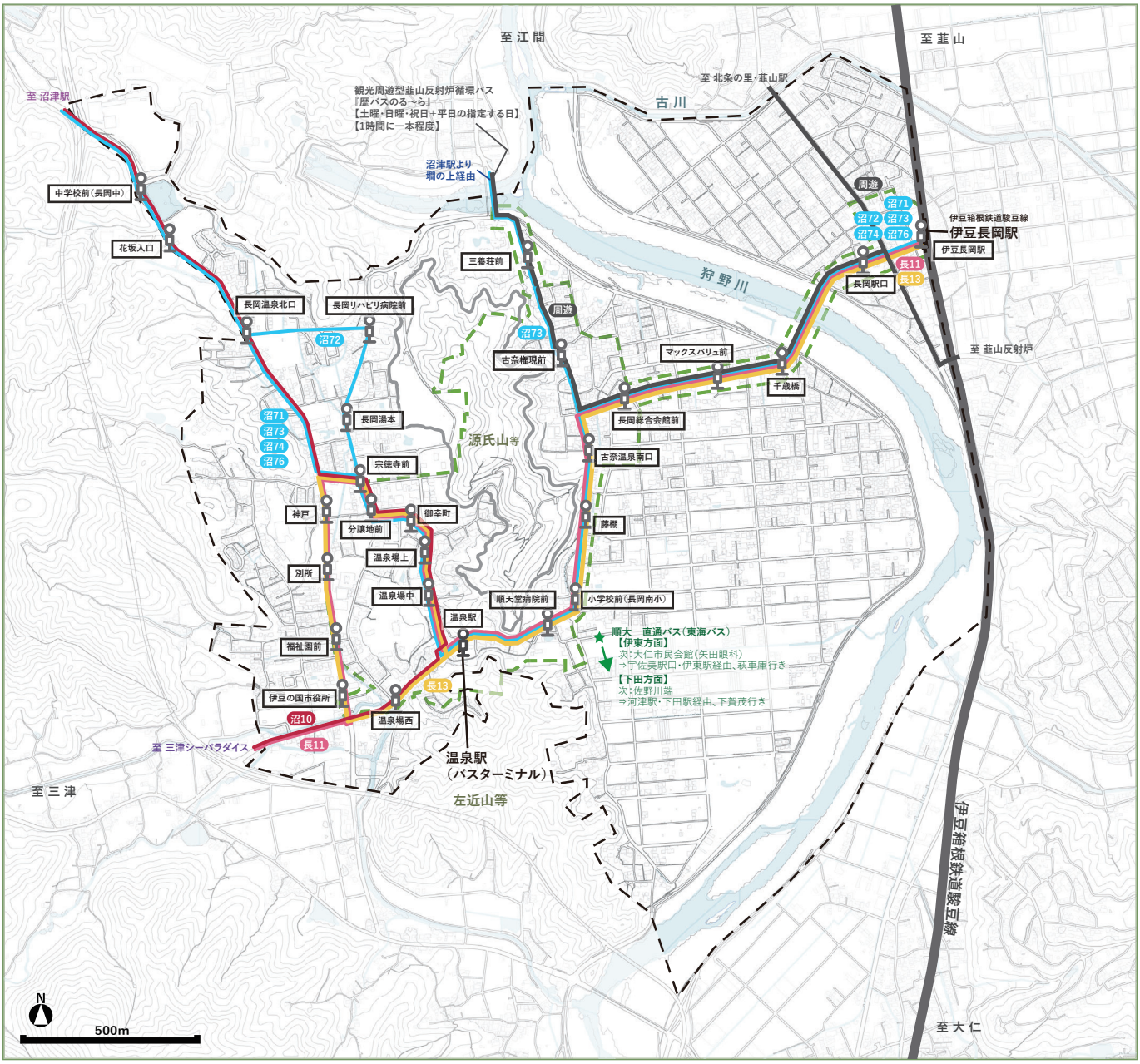
歩道のない区間

● まとめ

対象とした道路では、一部大きな段差やグレーチングにより歩きにくい場所が発見された。この地域には歩道のない区間も多く存在するため、より歩きにくい場所があると考えられる。

3-1-5　バス交通（路線図）

【公共交通利便性】



凡例

調査範囲

まちなか
ウォーカブル区域

・バスルート

沼71　沼72　沼73　沼74　沼76

観光周遊型韮山反射炉循環バス『歴バスのる～ら』

長11　長13

順天堂大学医学部付属静岡病院　直通バス
（⇔伊東方面（一日5便）、⇔下田方面（一日一往復））

・バス停

バス停の位置

沼10

〈出典〉
伊豆の国市HP（2023.02.27）より、「交通マップ地図面」を参照し作成
順天堂大学医学部付属静岡病院　交通アクセス（2023.02.27）

▶ 調査概要・方法

公共交通を使った移動の利便性を把握するために地域内のどのルートをバスが走っており、どこにバス停が立地しているかを調査した。

伊豆の国市のHPに掲載されている交通マップ地図面を参照し、左記の地図を作成した。

▶ リサーチ結果

地域全体を路線バスが通っており、沼津駅や三津シーパラダイスへ向かうバスがあること、また三島から修善寺までを通る伊豆箱根鉄道の長岡駅にも接続していることから、広域的なアクセスもできる現状にある。

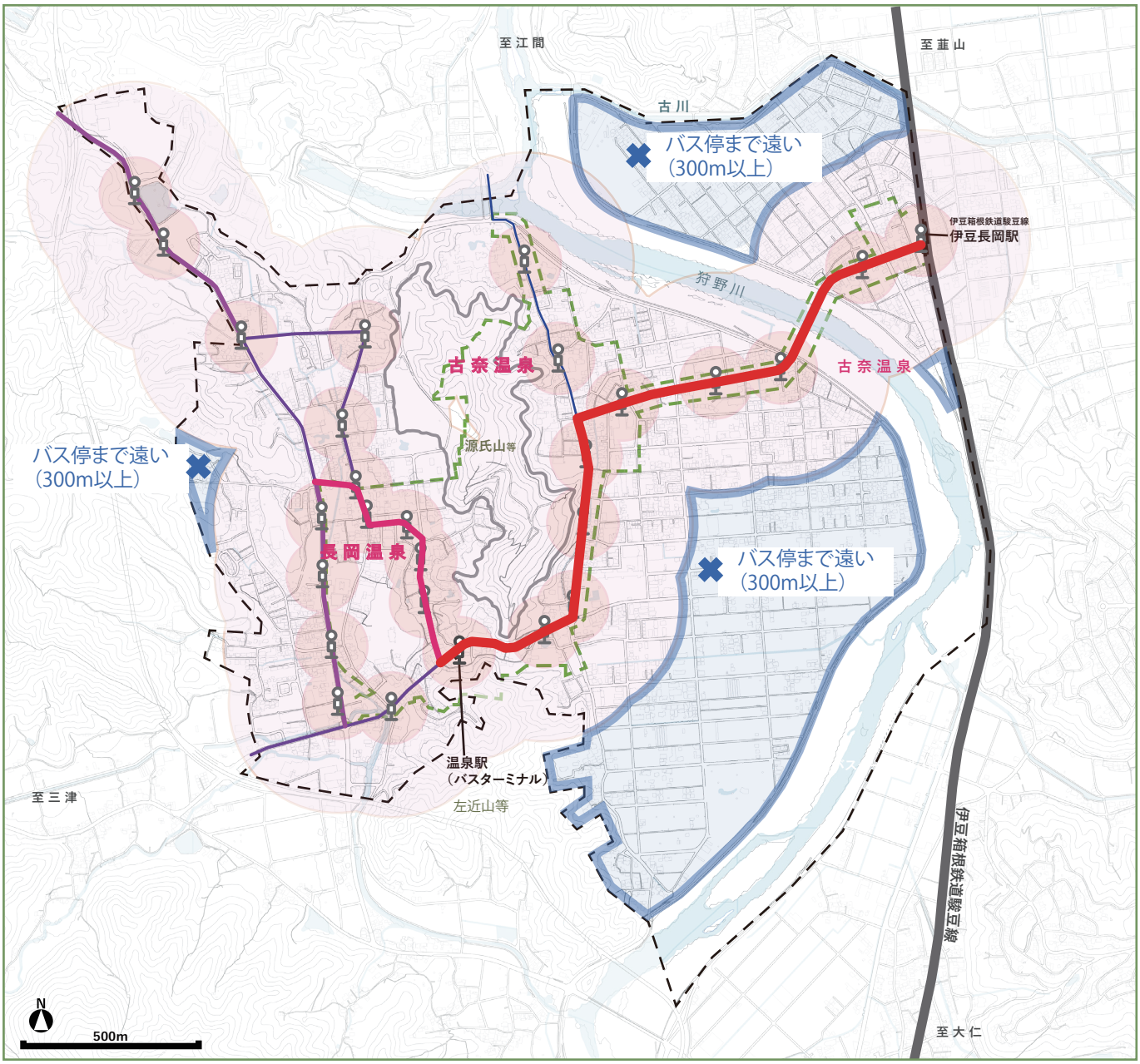
また、主に土日祝日限定の観光周遊型韮山反射炉循環バス『歴バスのる～ら』が走り、韮山反射炉や北条の里など史跡を巡ることができる。

伊豆箱根バスのバス停（温泉駅）の様子

● まとめ

県道を中心に路線バスが走っており、地域内だけでなく広域の移動が可能である。
土日限定で周辺の史跡を巡ることができる観光周遊バスが走っている。

3-1-6　バス停の立地と本数　【公共交通利便性】



凡例

調査範囲

まちなか
ウォーカブル区域

・バス停

バス停の立地

半径100m圏

半径300m圏

・平日1時間あたりの平均バス本数

約4本/時

約3本/時

約2本/時

約1本/時

約0本/時

〈出典〉
伊豆箱根鉄道グループ伊豆箱根バスHP（2022.10.30）
社団法人土木学会「バスサービスハンドブック」（2006年11月）

▶ 調査概要・方法

住民の日常的な移動の利便性や、観光客にとってのアクセス性の観点からウォーカブルなまちづくりを考えるため、地域内に設置されたバス停のプロットと1時間あたりの平均バス本数を調査した。

伊豆長岡駅を発着するバス路線に関して、各バス停の平日6：00～20：00 のバス本数を15 時間で割って算出。小数第一位を四捨五入。なお、伊豆長岡駅へ向かうバスを上りとしたとき、同じ路線の上下線に関しては、上下線のバス本数の平均値を用いた。「バスサービスハンドブック」において、健常者が抵抗なく歩ける距離は300m、高齢者の場合は100m とされているため、最寄りのバス停までの距離が100～300m の地域は「高齢者にとってはバス停まで遠い」エリア、300m 以上の地域は「バス停まで遠い」エリアで塗り分けた。

▶ リサーチ結果

【バス停のアクセス性について】

住宅地の大部分は最寄りのバス停までの距離が100m以上あり、高齢者が抵抗なく歩ける距離を超えているため、高齢者にとってはバス停へのアクセスが良いとは言えない。また、天野や中條の住宅地（青い範囲）はバス停までの300m以上距離があり、健常者でも移動手段にバスを選びにくい現状が予想される。

バス停（温泉駅）の様子

【バスの本数について】

県道沿い周辺や長岡温泉街は、300m先のバス停のバス本数が約３本/時（およそ20分に一本のペース）であった。一方で、古奈交差点北部の旅館街や長岡北部の住宅地、伊豆の国市役所やパノラマパーク周辺などは1～2本/時と、相対的に少ない結果となった。

行き先	長岡温泉場循環
経由	順天堂病院・伊豆の国市役所
路線名	伊豆長岡駅–長岡温泉場循環線

	平日	土曜	休日
5			
6			
7			
8	45	30	30
9	35	35	35
10	30 45	30 45	30 45
11	20	20	20
12	30	30	30
13	20	25	25
14	20 55	20 55	20 55
15	20 55	20 55	20 55
16			
17	15	15	15
18			
19		00	00
20			
21			
22			

行き先	沼津駅
経由	順天堂病院・温泉場・静浦
路線名	沼津駅–伊豆長岡駅線

	平日	土曜	休日
5			
6	25 45		
7	05 25 50	05 25 50	05 25 50
8	リ05 リ25 リ55	リ05 リ55	リ05 リ55
9	リ30 リ55	リ55	リ55
10	リ55	リ55	リ55
11	リ35 リ55	魚35 リ55	魚35 リ55
12	リ55	リ55	リ55
13	リ35		
14	リ00 リ30	リ00	リ00
15	リ00 リ30	リ00	リ00
16	リ00 30	リ00 30	リ00 30
17	00 30	00 30	00 30
18	00 30	30	30
19			
20			
21			
22			

リ:長岡リハビリ病院経由

魚:魚市場入口を経由（槇島 – 市場八幡間は通りません）
リ:長岡リハビリ病院経由

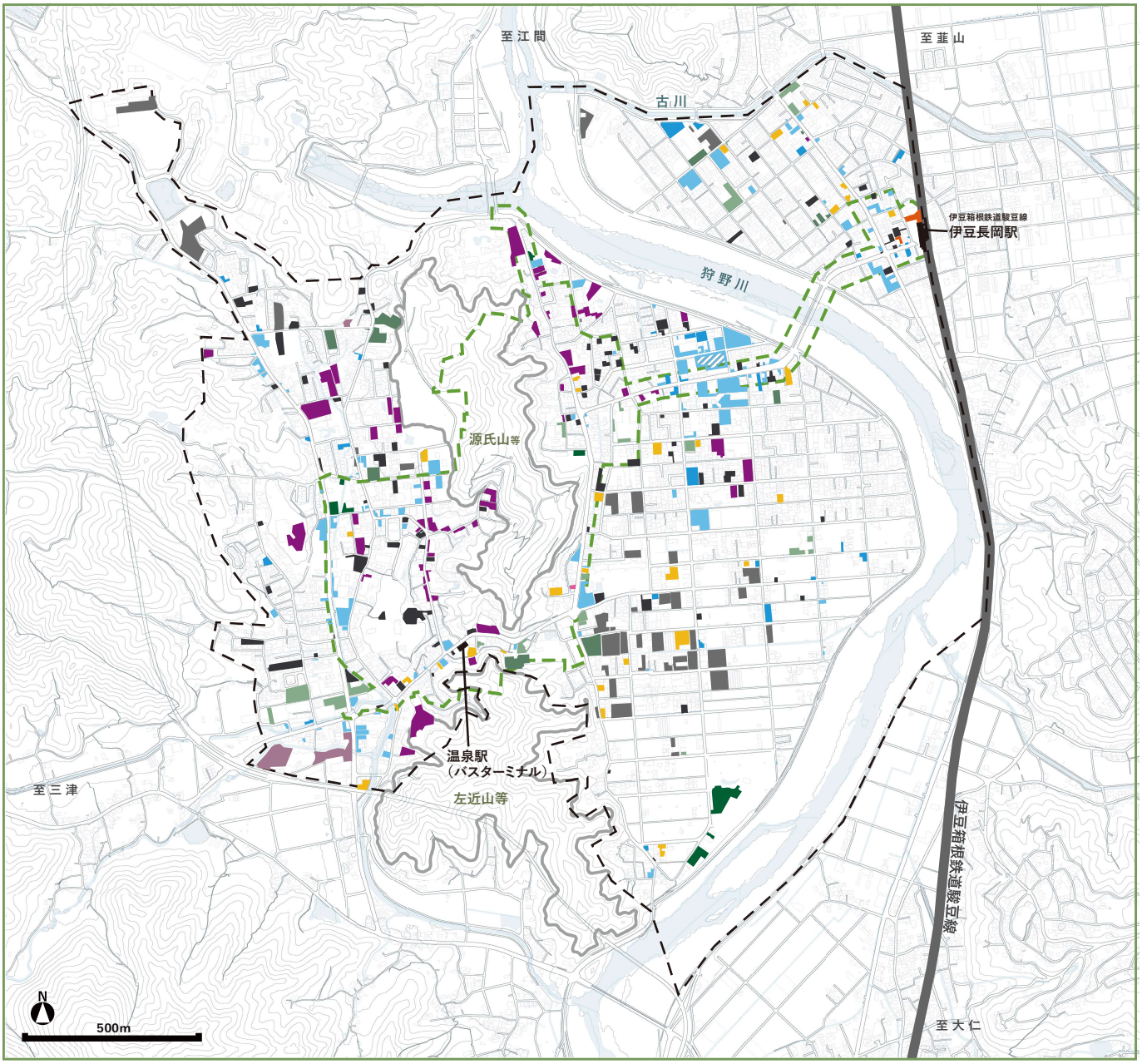
魚:魚市場入口を経由（槇島 – 市場八幡間は通りません）
リ:長岡リハビリ病院経由

バスの時刻表（伊豆長岡駅発）
出典：https://izuhakone.jorudan.biz

● まとめ

バス停の多くが県道沿いに立地しており、住宅地からのバス停へのアクセスは良いとは言えない。バス本数は県道沿いと長岡温泉街が相対的に多いことがわかる。

3-1-7　駐車場　【公共交通利便性】



凡例

- 調査範囲
- まちなかウォーカブル区域

・駐車場

- 旅館・ホテル・温泉駐車場
- 観光施設駐車場
- 公園・神社駐車場
- 病院駐車場
- 公共施設駐車場
- コインパーキング
- 店舗駐車場
- 事務所駐車場
- その他
- 不明
- 屋内駐車場(斜線で表記)
- 月極

〈出典〉
【駐車場】Google Mapの航空写真及びストリートビュー（2022.09.20）

▶ 調査概要・方法

車での移動や観光客にとってのアクセス性の観点からウォーカブルなまちづくりを考えるため、地域内に設置された駐車場の場所・種類を調査した。

調査方法は、主にGoogle　Mapを用いて、自動車が駐車している、駐車場の区画線があるなど、駐車場部分と判断できる場所のプロットを行った。さらに、航空写真のみで判断がつかない場合はストリートビューで確認を行い、地図に反映させた。

▶ リサーチ結果

【駐車場について】

旅館や店舗などの目的となる施設には、各々に駐車場が設置されている。そのため住民や観光客は目的の施設に自動車で移動することが多くなっていると考えられる。

コインパーキングは伊豆長岡駅前に2つあるのみのため、地域外から車で来て、車を置いて複数の店舗や場所を徒歩で回遊することが難しい地域となっているが、一部公共施設や公園にも駐車場が設置されている。

伊豆長岡駅前のコインパーキング

【出逢い通り周辺の駐車場について】

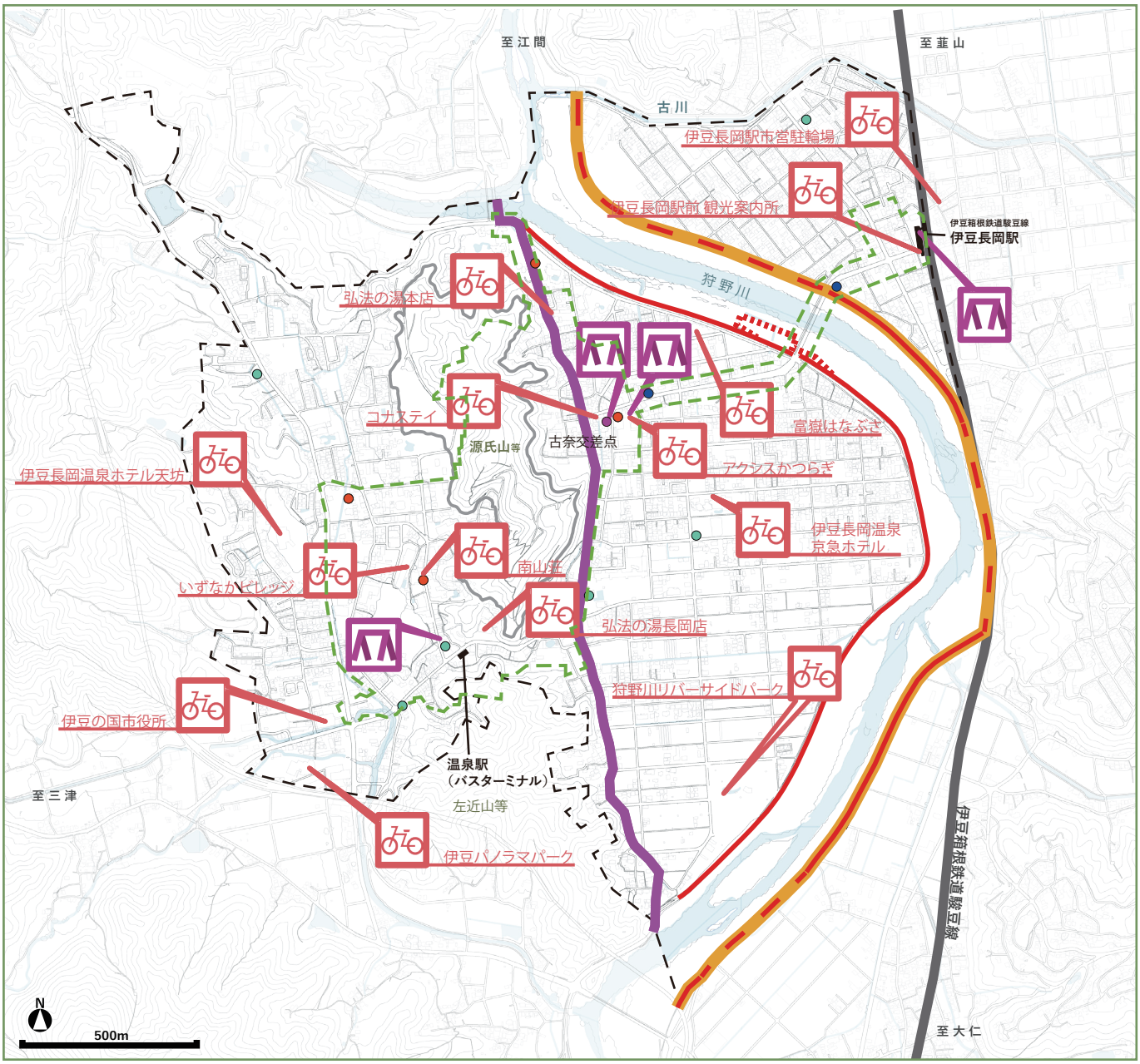
旅館は駐車場を建物の前に設けるタイプと、店舗敷地とは別に敷地を取り、そこに駐車場を設けるタイプがある。特に出逢い通りに面する旅館は建物前に設けるタイプが多い。この場合、出車の際車が歩道を横切るため、歩行者にとって危険である。

出逢い通りの駐車場

● まとめ

コインパーキングは地域内に２つのみで、目的施設の多くが施設自体の駐車場を設置していることから、店舗等に直接車で向かう人が多く、人の移動手段が自動車に大きく依存していると考えられる。

3-1-8　サイクルスタンド・自転車レーン　【公共交通利便性】



凡例

調査範囲

まちなか
ウォーカブル区域

・主な自転車ルート

モデルサイクリングコース
【伊豆の国市観光協会推奨】

路面に自転車レーン表示あり

狩野川沿い　車道無し

狩野川沿い　車道有り

交差点迂回ルート（未舗装）

・自転車利用時の必要施設

コンビニエンスストア

自転車屋

サイクリスト向けの宿

足湯

自転車スタンド

シェアサイクル
レンタルE-BIKE
スポット

〈出典〉
伊豆の国市観光協会HP（2023.02.27）
Google Mapのストリートビュー（2022.09.11）
HELLO CYCLING HP
伊豆の国市観光協会HP
R3都市計画基礎調査 建物用途別現況図

▶ 調査概要・方法

自転車移動の利便性を知るため、地域内のサイクリングコースと、一時的に自転車を停めておける自転車スタンド、時間ごとでレンタルすることができるシェアサイクルの設置場所を調査した。

モデルサイクリングコースに関しては伊豆の国市観光協会WEBサイトから引用し、サイクリング表示はGoogle　map（2022.09.11）、交差点迂回ルートは現地調査から作成した。

自転車スタンドについては現地での悉皆調査（2023.11.12）、シェアサイクル・レンタルE-BIKEスポットはHELLO CYCLINGのWEBサイト（2024.02.02）、伊豆の国市観光協会のWEBサイトより作成した。自転車利用時の必要施設は、建物用途別現況図とGoogle Map（2022.09.11）を参照しプロットした。

▶ リサーチ結果

HELLO　CYCLINGのシェアサイクリングスポットは地域全体に偏りなく設置されている。また、自転車スタンドも駅前や旅館付近に複数設置されている。

特に、古奈の交差点付近は、自転車屋、足湯、自転車スタンド、サイクリストのための宿（コナステイ）などが集積していることから、サイクリストにとって利便性が高いポイントである。

また、モデルコースに指定されているルートは狩野川沿いを走ることができる心地の良いコースだが、一部車道と並走する区間が存在する。

コナステイの自転車ラック（旅館内にあるもの）

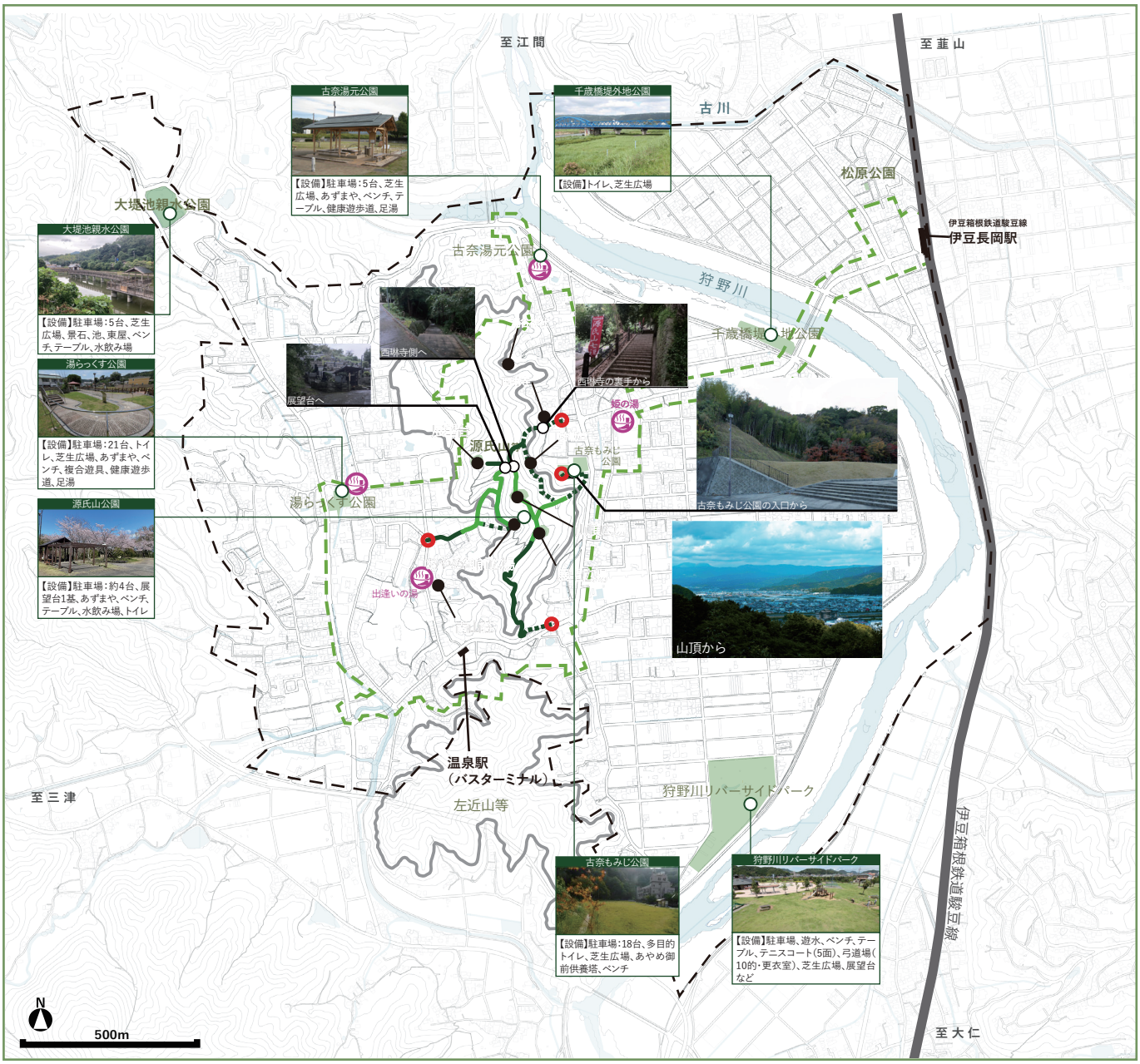
ハローサイクル（南山荘前）

狩野川沿いを自転車で走る様子

● まとめ

駅前や温泉街を中心にサイクリストのための環境整備が行われている。サイクリングコースなども各地点で設定されているが、一部自動車交通との錯綜に注意が必要な区間が存在する。

3-1-9　公園（源氏山遊歩道）　【健康まちづくり】



凡例

- 調査範囲
- まちなかウォーカブル区域
- 自動車通行可能な通路
  ※斜路・コンクリート舗装・幅員は対面通行程度
- 現在通行止めにつき不明
- 公園
- 足湯

・源氏山遊歩道

- 遊歩道への入口
- 通行止めなど
- 歩行者通路（路地）
- 歩行者通路（階段）

〈出典〉
源氏山遊歩道案内図掲示板、現地踏査（2022.10）
伊豆の国市HP 公園・スポーツ施設
伊豆の国市観光協会HP 見る・楽しむ

▶ 調査概要・方法

地域内のどこに公園が分布しているか調査した。本調査では、伊豆の国市WEBサイト（公園・スポーツ施設）に掲載されているものを「公園」と定義している。

源氏山遊歩道に関しては、源氏山遊歩道案内図掲示板、及び2022年10月お散歩市後の現地踏査でルートを調査して整理した。公園設備については、伊豆の国市HP及び伊豆の国市観光協会HPから調査して整理した。

▶ リサーチ結果

【源氏山公園・遊歩道について】

源氏山は、伊豆長岡地域の中央に位置し、古奈地区・長岡地区・順大医学部付属病院側、3方向から登ることのできる低山であり、散策コースや見晴らし台となるポテンシャルを有している

しかし現状、入口や遊歩道の順路がわかりづらく、また全体的に暗い印象である。周辺の小学生には怖いイメージを持たれているとの意見もあった。

また、アクセス面では、長岡地区側からは車でも登ることができるが、古奈地区側に乗りることはできず、行き来することができない（徒歩のみ可能）。

源氏山からの見晴らし

【地域内の公園について】

伊豆長岡地域の公園のうち、2つの公園には足湯と健康遊歩道が整備される特徴をもち、高齢者をはじめ多くの利用者がおり（車で来るほど）、ポテンシャルとなっていると考えられる。

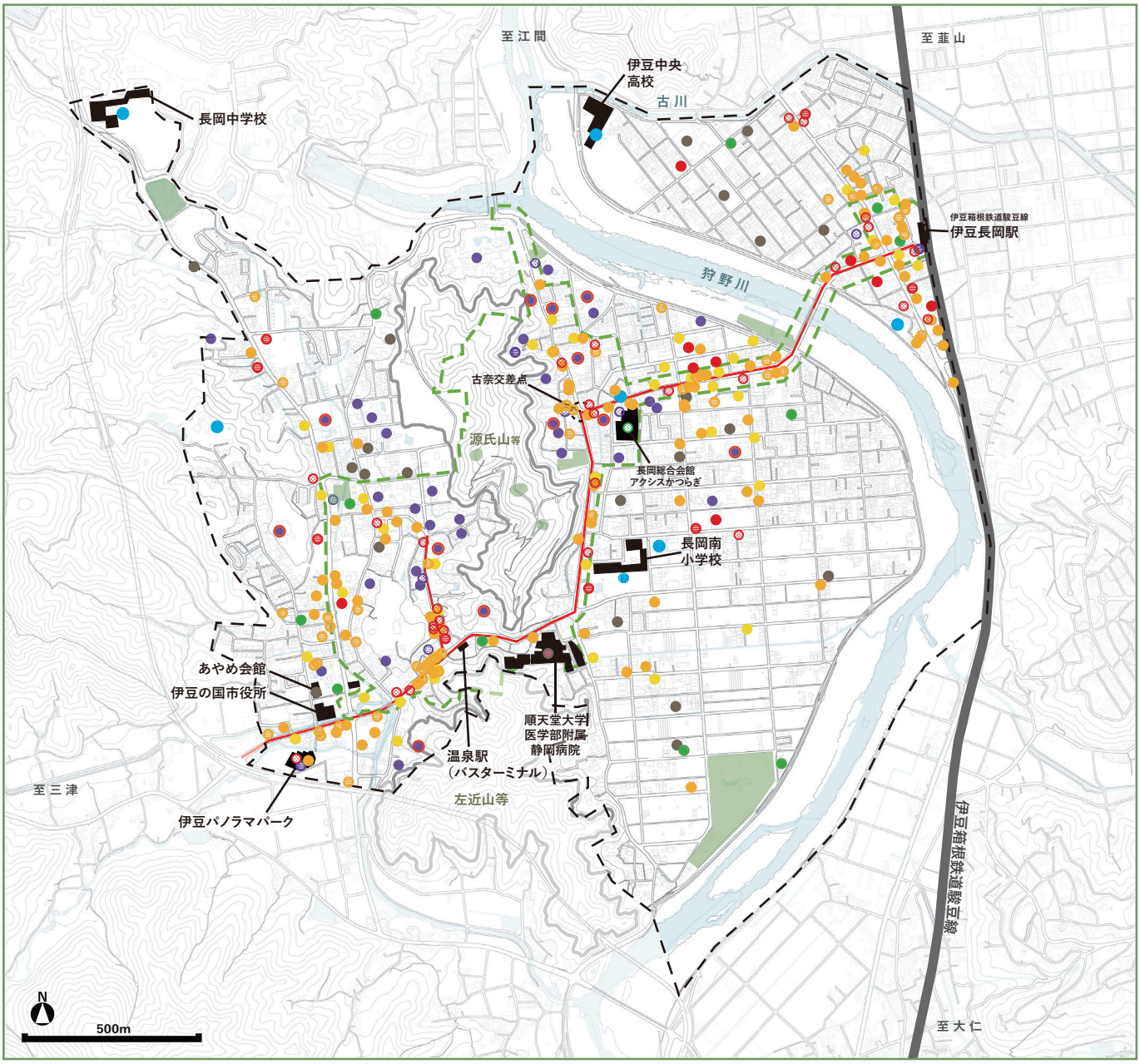
また、千歳橋堤外地公園や狩野川リバーサイドパークは狩野川周辺にあり、狩野川にアクセスしやすいというポテンシャルを有している。

足湯での交流（湯らっくす公園）

● まとめ

まちなかウォーカブル区域内には、中央に源氏山が位置し公園が点在している。源氏山遊歩道や公園に設置された足湯など、景色や交流を楽しみながらの健康増進が期待できる。

3-1-10　目的施設（建物用途）　【目的性】



凡例

調査範囲　まちなか ウォーカブル区域

・目的施設

-食料品店	スーパーマーケット
	コンビニ/日用品店
	小型食料品店　（八百屋・精肉店・酒屋等）
-飲食施設	飲食店（レストラン・カフェ・喫茶店・パン屋等）
	夜の飲食店　（居酒屋・バー・パブ等）
-その他の商業	衣料品店、美容施設、遊戯施設
-生活支援施設	行政施設、金融施設、文化・運動施設
-子供関連施設	幼稚園・保育園、小中高校
-高齢関連施設	介護福祉施設、医療施設
-公園	公園
-観光施設	温泉旅館
	（旅館のうち）　日帰り温泉
	公衆浴場・足湯
	観光交流施設

〈出典〉
2021年度都市計画基礎調査建物利用現況
Google Map ストリートビュー(2022.09.11)
伊豆の国市HP 施設案内
2021年住宅地図
伊豆の国市観光協会HP

▶ 調査概要・方法

人々の外出の目的となるような店舗、施設が地域内のどのような場所に立地しているか傾向を掴むため、建物用途を分類して地図上にプロットした。

2021年度都市計画基礎調査建物利用現況のそれぞれの項目について、Google　Mapの建物情報とストリートビューで建物用途を判断し分類した。

▶ リサーチ結果

スーパーマーケットは長岡地域に少なく、古奈地域と駅周辺に偏っているため、買い物の際、車移動がメインになっています。一方、生活支援施設は古奈地域には少なく長岡地域と駅周辺に比較的多く見られた。

伊豆長岡駅から古奈交差点に向かう県道沿いには多くの飲食店舗、その他商業店舗の集積が見られた。同様の集積が長岡地区の温泉駅周辺及び国道沿い（市役所周辺）に見られた。

源氏山を囲んで、高齢者関連施設・温泉旅館・観光交流施設が多く見られた。

日帰り温泉は長岡地区よりも古奈地区に多く集積していることがわかった。

その中で、長岡温泉の温泉駅周辺には多くの飲食店舗が集積しているが、その多くが居酒屋やバー、パブといったものであり、昼間に一息付けるような場所が少ない状況にある。これは地域全体としてもそのような傾向にあると考えられる。

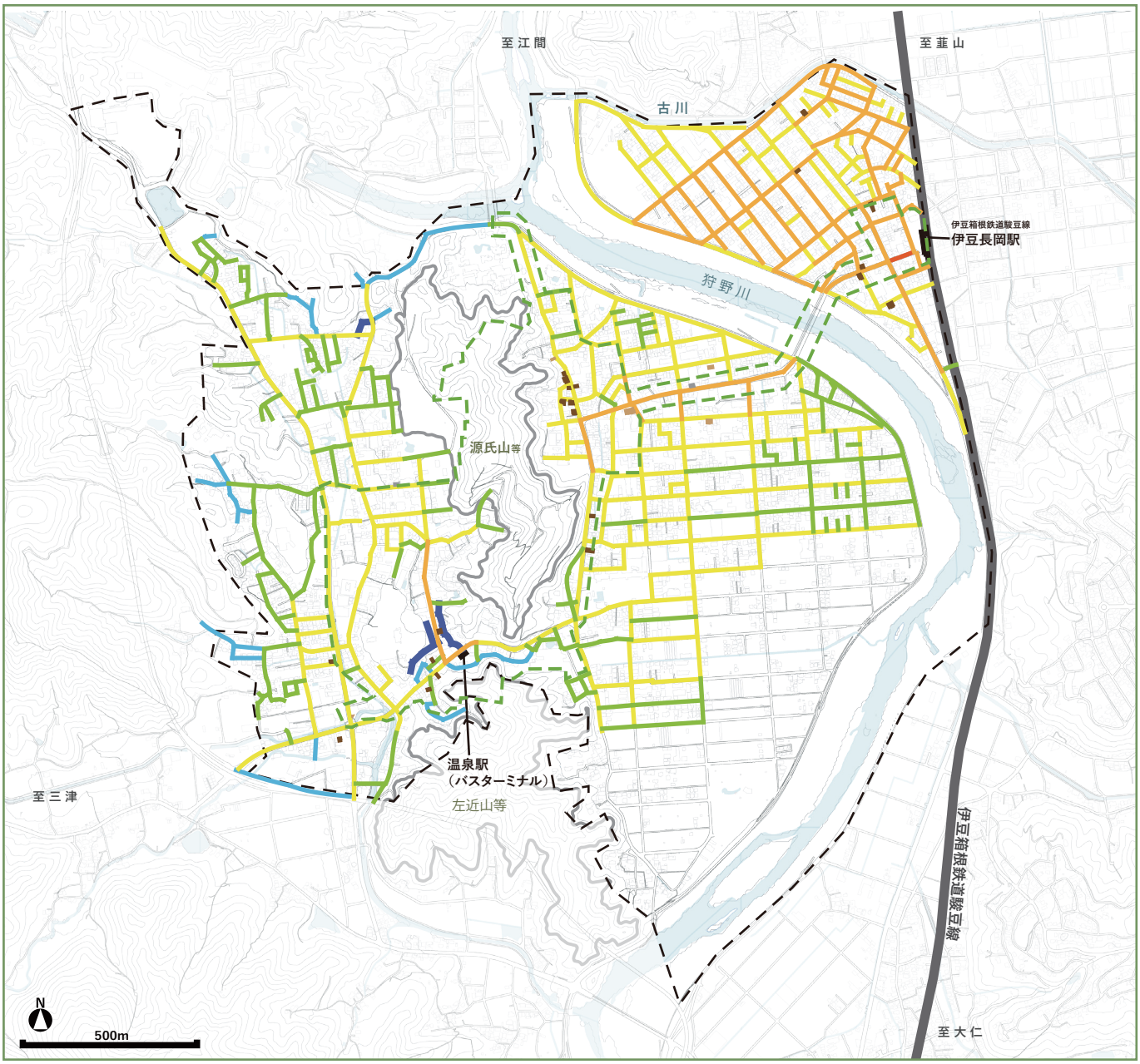
日用品店（100 円均一ショップ・薬局）の様子　（古奈地区）

居酒屋やバー・パブの様子

● まとめ

集積する施設の種類が地区により異なるため、歩いて移動することが難しいと考えられる。
地域全体として居酒屋やスナック、パブが多く、昼間にひと息つけるような場所が少ない。

3-1-11　空き店舗と路線価　【目的性】



凡例

調査範囲　まちなかウォーカブル区域

・路線価

- 31000-40000 (円/㎡)
- 41000-50000 (円/㎡)
- 51000-60000 (円/㎡)
- 61000-70000 (円/㎡)
- 71000-80000 (円/㎡)
- 81000-90000 (円/㎡)

・空き店舗の分布

- 空き店舗（店舗住宅併用型）
- 空き店舗（店舗型）

〈出典〉
財産評価基準書 路線価図・評価倍率表令和2年分
令和2年度　都市計画基礎調査　建物用途別現況図
（伊豆の国市都市計画課より受領）

▶ 調査概要・方法

地域内の遊休不動産の活用可能性を調査するため、現在利用されていない空き店舗の分布と路線価を調べた。

※店舗住宅併用型＝店舗部分と住宅部分が同じ建物内にあるような物件（1F店舗、2F住宅など）

※路線価＝路線（道路）に面する標準的な宅地の1平方メートルあたりの価額

空き店舗については、以下の3つのステップで調査を行った。

①建物令和2年度都市計画基礎調査建物用途別現況図から商業施設をプロット。

②各商業施設の営業状態をGoogle ストリートビュー（2022/8での最新版）、その中で営業有無が不明な物件を抽出。

③現地踏査にて確認。

路線価については、国税庁「財産評価基準書の路線価図・評価倍率表」を元に求め、色分けを行った。

▶ リサーチ結果

【空き店舗について】

空き店舗の分布としては伊豆長岡駅前周辺、古奈温泉の北側（県道沿い）、長岡温泉（県道沿い）に集積していることが分かった。

また、当地域の空き店舗の特徴として、多くが店舗と住居が併用しているものであった。上階の住居には、まだ住んでいる可能性も考えられるため、活用には交渉などに工夫が必要だと考えられる。

古奈地区の空き店舗の様子

【路線価について】

路線価については、伊豆長岡駅周辺から古奈交差点、出逢い通りが地域の中では高めであり、出逢い通り周辺の裏道は、周辺の中で低く推移している。

空き店舗の分布と路線価の重ね合わせを行った結果、路線価が地域内で比較的高い所（駅前・県道沿い）で空き店舗の集積が見られた。

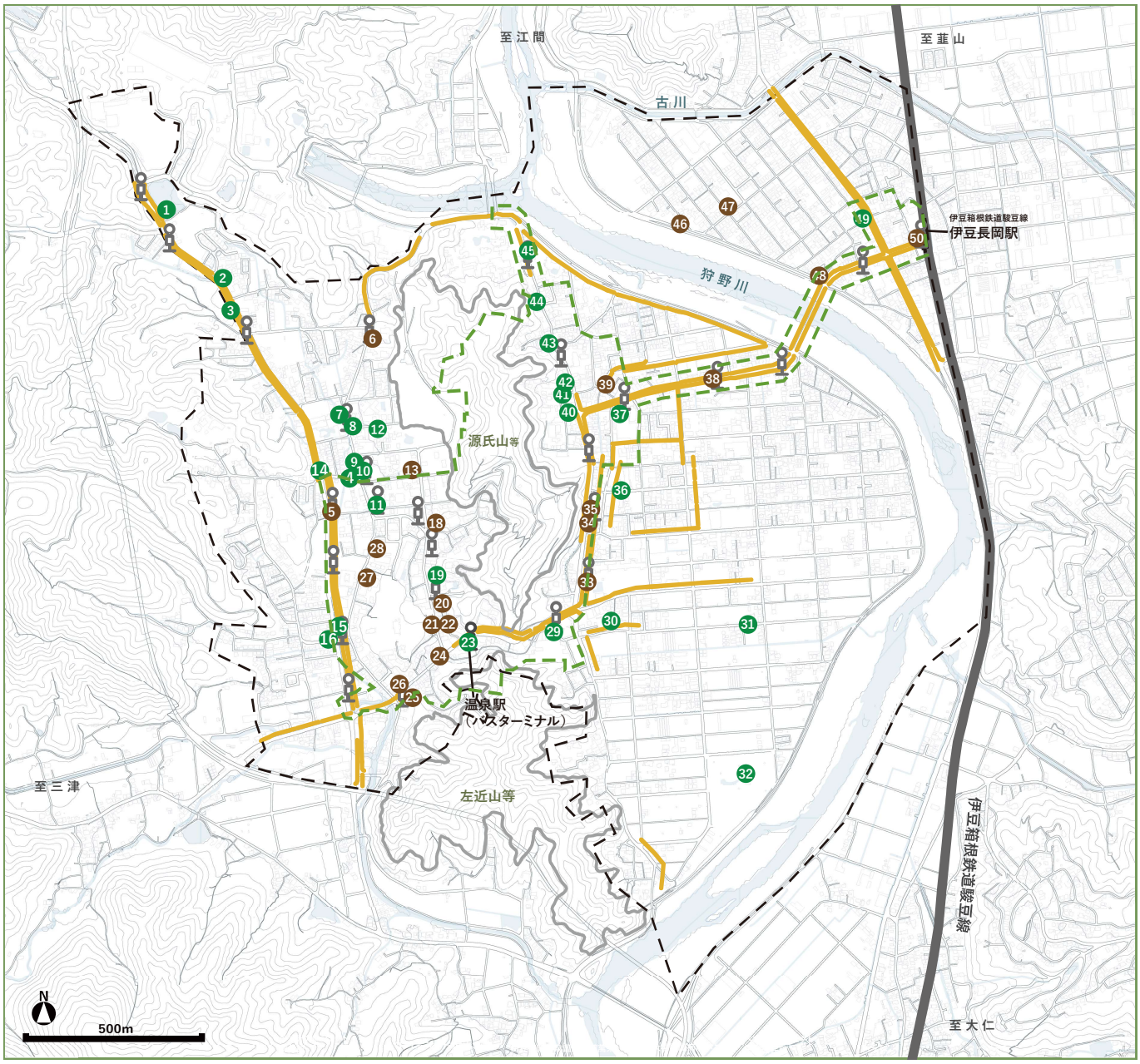
長岡地区の空き店舗の様子

● まとめ

地区内には駅前、古奈温泉街、長岡温泉街を中心に、空き店舗が存在している。

また、空き店舗の分布は特に路線価の高いエリアに多いという傾向にある。

3-1-12　ベンチの配置　【快適性】



凡例

調査範囲　まちなか ウォーカブル区域

・休憩施設

100m　ベンチ（敷地外）

ベンチ（敷地内）

バス停

※既往研究によれば、高齢者の望むベンチの適正間隔は 100~200mが最も多い

〈出典〉
伊豆の国市ベンチプロジェクト
Google Map（2022.02.27）
高齢者を考慮した歩行空間の休憩施設設置に関する研究
（三星昭宏、北側博巳他　土木計画学研究・論文集　1999.10）

▶ 調査概要・方法

誰でも休憩しながら快適に歩くことができるかを明らかにするため、ベンチの分布を調査した。

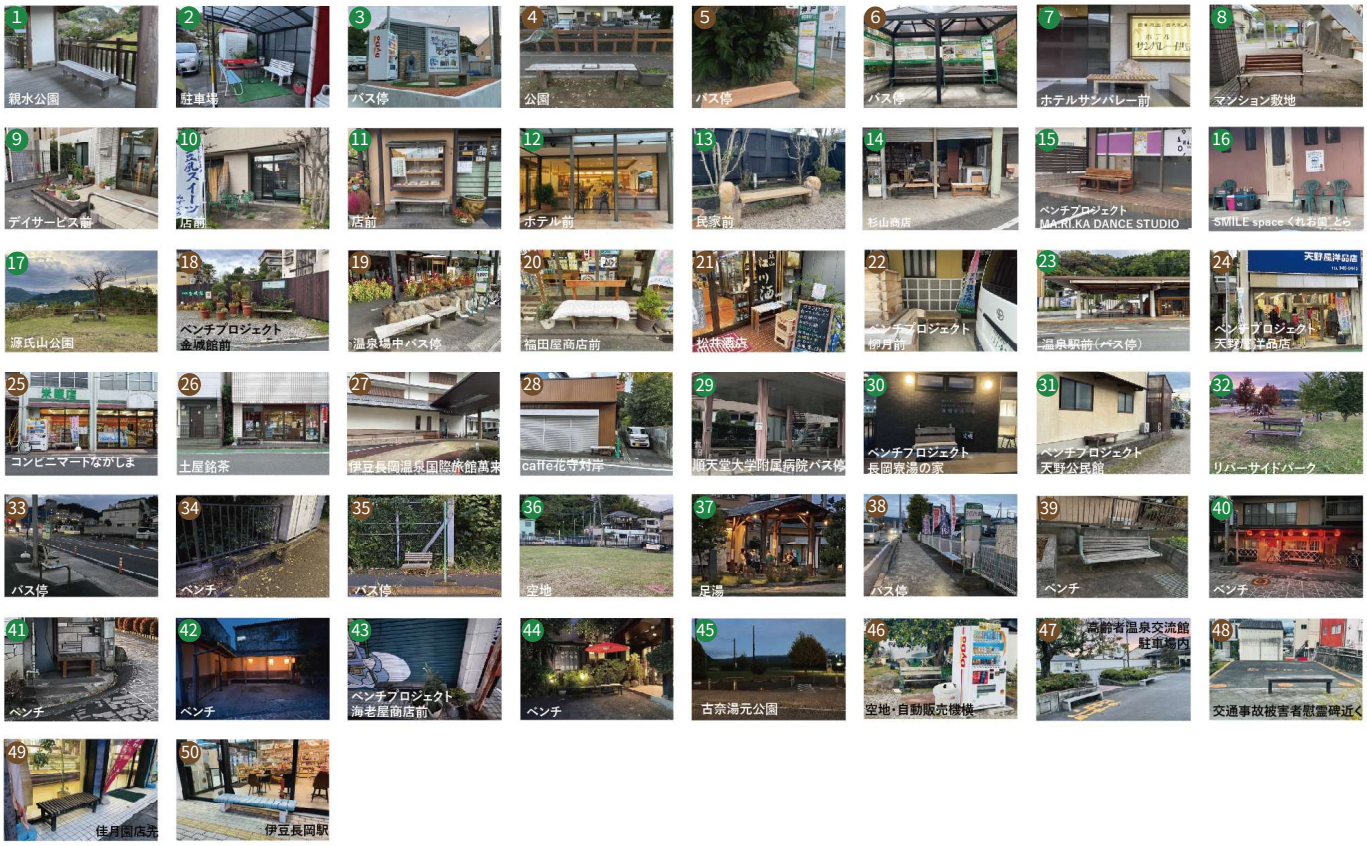
Google Mapでの検索と現地調査(2023.11.12)によりベンチの分布を明らかにした。利用のしやすさが異なるため、発見できたベンチを民間の敷地にあるものと道路上にあるもので分類した。

▶ リサーチ結果

伊豆の国市福祉こども相談センターが所管する形で、2016年6月から「ベンチ」から広がるコミュニティづくりとして「伊豆の国市ベンチプロジェクト」が企画されており、店舗前を中心に地元工務店や高校とコラボして作成されている。

ベンチの分布は、温泉場出逢い通りや県道沿いに多くあり、天野地区・富士見地区・狩野川沿いにはほとんど見られなかった。また、ベンチのデザインには一貫性がなかった。

区域内に多くのベンチが存在しているが、手入れが行き届いていない（特に敷地外のベンチ）、店舗利用者以外利用しづらい状況にあるなどで、すべてが利用されやすい状態ではないと考えられる。



調査範囲に置かれているベンチ一覧

● まとめ

伊豆の国市ベンチプロジェクトの成果もあり、地域内には多くのベンチが分布している。一方でベンチが分布していないエリアや手入れが行き届いていないものもある。

3-1-13　自然資源の状況　【地域性】

凡例

- 調査範囲
- まちなか ウォーカブル区域

源氏山・狩野川・葛城山へのアクセス・スポット

- ▲ 源氏山ウォーキングコースへの入口
- ● 狩野川沿岸にある広場・公園
- ● 源氏山にある広場・公園
- ▲ 葛城山への入り口

〈出典〉
【源氏山】　古奈温泉お散歩マップ
　　伊豆桜スポット総合案内　源氏山公園の桜(伊豆長岡)
【狩野川】伊豆長岡温泉ミライ会議　公式サイト
　豊かな伊豆の清流・狩野川と、かわまちづくりの紹介
　伊豆の国市　千歳橋堤外地公園
【葛城山】伊豆の国市観光協会　公式サイト
伊豆パノラマパーク
伊豆半島ジオパーク　葛城山　(2022.11.15)

▶ 調査概要・方法

歩きたくなるまちを目指し、この地域の資源を捉えるため、地域内の自然資源を調査した。

調査方法は、対象範囲内の山や河川で一般人がアクセスできるものを抽出し、それらの特色について伊豆の国市観光協会HPや伊豆長岡温泉ミライ会議HPなどを用いて調査した。また、伊豆の国市HPと古奈温泉お散歩マップから、それらへアクセスできるスポットや入口を調査し、プロットした。

▶ リサーチ結果

対象範囲には狩野川や源氏山、伊豆パラノマパーク山麓といった自然資源があり、季節によって異なるアクティビティを楽しむことができる。

【各自然資源の特色について】

源氏山では七福神巡りやお花見が名物で気軽な散歩コースとなっている。

葛城山ではハイキングのほか、ロープウェイにより山頂へ登ることができる。山頂には伊豆パノラマパークという滞在施設があり、カフェや足湯、史跡散策エリアが整備されているなど、２つの山はそれぞれ異なる性格を持っている。

狩野川では、鮎釣りや SUP(スタンドアップパドル) の体験ができるほか、堤防はサイクリングコースやランニングコースとして親しまれている。

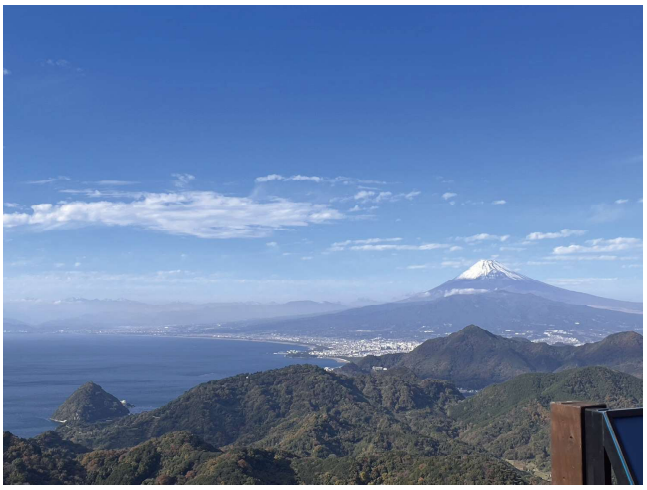
【自然資源へのアクセスについて】

狩野川の河川敷やその近くには公園が設置されており、狩野川をより身近に感じることができるというポテンシャルを有している。

しかし、河川敷の堤外公園は通行しやすい遊歩道や滞在できるスペースが整備されておらず、そのポテンシャルを十分に発揮できているとは言えない。

源氏山内の遊歩道では、草木が生い茂り通行しにくい部分が多数ある。（⇒詳しくは 3-1-9　公園　参照）

源氏山のお散歩コース

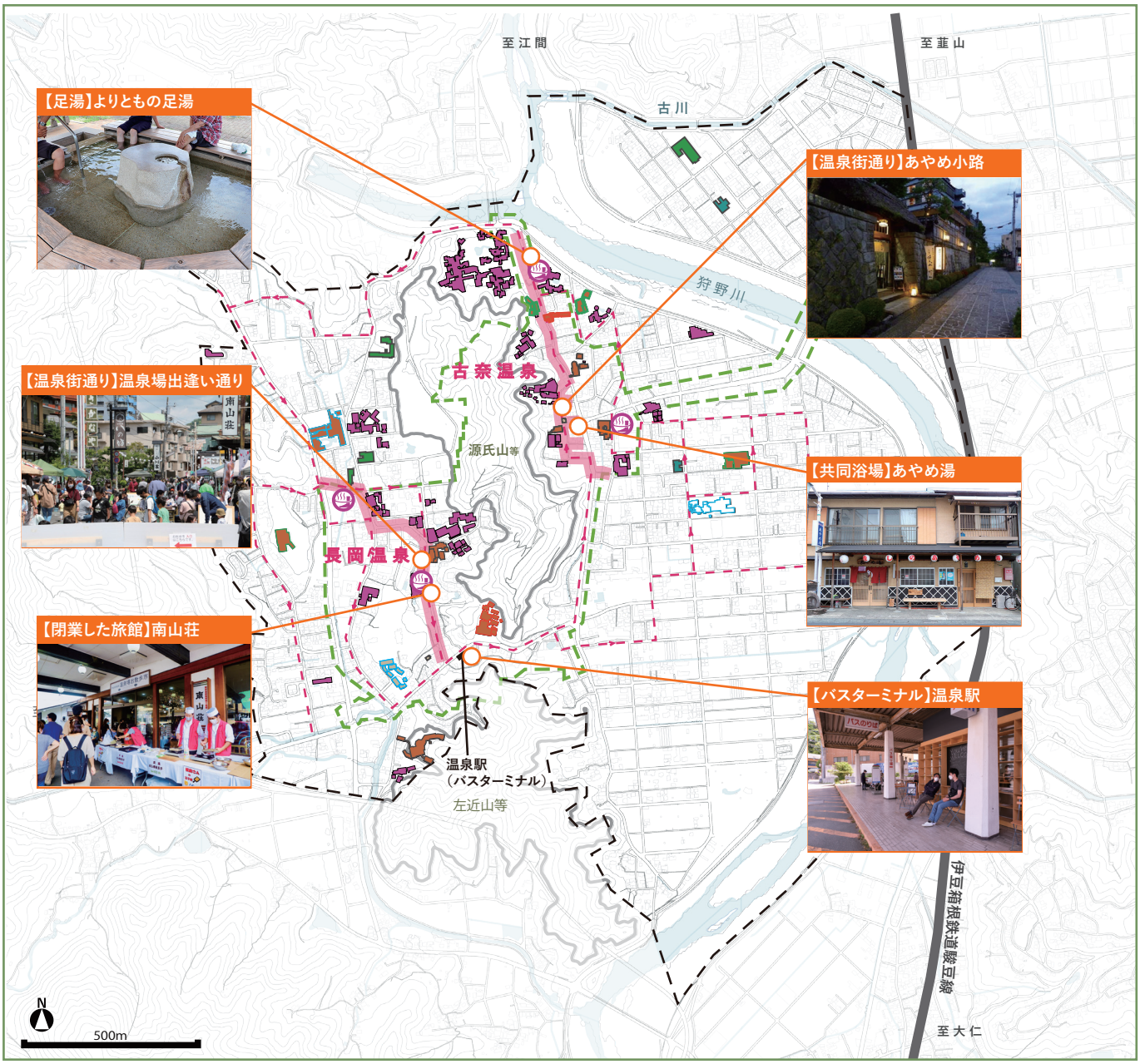


伊豆パノラマパークの山頂エリアからの景色

● まとめ

地域内には山（源氏山・パノラマパーク）と川（狩野川）の自然資源があり、季節によって異なるアクティビティを楽しむ事ができる。

3-1-14　温泉資源の状況　【地域性】



凡例

- 調査範囲
- まちなか ウォーカブル区域
- 高齢者・障がい者向け温泉施設
- 温泉を利用した病院・介護施設
- 温泉集中管理のための配管
- 温泉街

・温泉資源

- 足湯
- 共同浴場
- 旅館
- 日帰り入浴できる旅館
  - かかりつけ湯
  - 湯治向け旅館
  - 飲泉サービスあり

〈出典〉
伊豆の国市 R3都市計画基礎調査 建物用途別現況図
伊豆の国市 歴史的風致維持向上計画
伊豆の国市　温泉場お散歩市
伊豆の国市観光地エリア景観計画　温泉景観エリア（古奈温泉、長岡温泉、源氏山）
いで湯のまち　伊豆の国市観光情報　温泉・癒し
（2022.12.4）

▶ 調査概要・方法

伊豆長岡地域にとって重要な温泉資源や温泉関連施設について、その分布を調査した。

伊豆の国市令和3年度都市計画基礎調査建物用途別現況図とGoogleMap（2022.9.11）により、温泉に関連する施設を抽出し、プロットした。温泉街のエリア設定については、歴史的風致維持向上計画の図版を参照している。

▶ リサーチ結果

【温泉街について】

源氏山東側に古奈温泉街、西側に長岡温泉街と、二つの温泉街が形成されている。古奈温泉街のメイン通りであるあやめ小路は石畳や沿道の植栽、幅員の小さきにより温泉街らしい景観が形成されている。

長岡温泉街のメイン通りである温泉場出逢い通りは旅館と小型店舗が軒を連ねている。ここでは、月に一度、屋台や滞在スペースが置かれる地域イベントが行われており、２つの温泉街の景観は異なる。

また、２つの温泉街にはそれぞれ共同浴場があり、利用されている。

古奈温泉街の街並み

【足湯について】

足湯は、公園併設の2箇所、総合会館の屋上に1箇所、温泉旅館の屋外に1箇所あり、観光客、地域住民ともに楽しむ姿が見られる。これらは、温泉集中管理システムによって地区内に張り巡らされた配管から供給されている。そのほか、各旅館が設けている足湯もある。

足湯が併設されている湯らっくす公園

● まとめ

地区内には景観の異なる２つの温泉街が存在し、伊豆長岡の重要な観光資源となっている。
また、温泉集中管理システムにより各地で足湯の設置が設置され、多くの人に利用されている。

3-1-15　文化・歴史　【地域性】

凡例

調査範囲　まちなかウォーカブル区域

社寺	1	湯谷神社
	2	温泉神社
	3	宗徳寺
	4	西琳寺（菖蒲御前の宅跡、美女桜）
その他の歴史的資源	1	屋敷台古窯跡群
	2	あやめ会館内（石櫃若舎人の刻銘がある附須恵器一括）
	3	頼朝の湯本陣 石切場
	4	古奈別荘
	5	三養荘本館（岩崎久彌別邸）
	6	伊豆長岡見番
	7	旧長岡南小学校講堂（旧川西村尋常高等小学校講堂）

〈出典〉
伊豆の国市歴史的風致維持向上計画(2018年3月)
伊豆の国市観光協会　泊まる　三養荘
伊豆ログ　温泉神社｜伊豆長岡温泉街にひっそり佇むおすすめスポット
伊豆の国市観光協会　見る・楽しむ　湯谷神社

▶ 調査概要・方法

伊豆長岡の地域性を把握するために、社寺や長い歴史を持つ温泉宿など、地域の文化や歴史を反映した資源がどこに分布しているかを調査した。

伊豆の国市歴史的風致維持向上計画において、「伊豆の国市の維持及び向上すべき歴史的風致」とされている6つの風致のうち、伊豆長岡地区に関連する2つの歴史的風致（「狩野川をめぐる祭と信仰にみる歴史的風致」と「伊豆長岡温泉にみる歴史的風致」）を抽出した。また、これらに関連する歴史的資源を抽出し、プロットした。

▶ リサーチ結果

この地域は有史以前から昭和まで多様な時代に関連する歴史的資源が点在している。

古奈温泉には湯谷神社、長岡温泉には温泉神社という温泉に関連した神社が鎮座している。

大正時代から昭和にかけては多くの著名な文人が訪れ執筆活動をしている。また実業家にも好まれ、古奈別荘や三養荘のように彼らの別荘建築が旅館として開業した例もある。

昭和 30 年頃の出逢い通り
出典：伊豆長岡温泉ミライ会議 HP

宿泊客の増加による娯楽需要から、芸妓文化が生まれその象徴として伊豆長岡見番が現在でも残っている。

伊豆長岡の芸妓文化
出典：伊豆長岡温泉ミライ会議 HP

● まとめ

多様な時代に関連する歴史的資源が地域内に多く点在している。
古くから温泉は著名人にも好まれ、昭和期には宿泊客の増加により芸妓文化が生まれた。

3-1-16　祭事イベント　【地域性】

凡例

調査範囲　まちなか ウォーカブル区域

・祭事やイベント開催場所

（開催場所名）　開催場所

〈出典〉
伊豆の国市　温泉場お散歩市
伊豆の国市観光協会（2022.11.15）

▶ 調査概要・方法

伊豆長岡の地域性を反映する要素として、地域で開催されている祭りやイベントを調査した。祭事イベントの存在は住民の地域愛着やシビックプライドを高めるためにも重要である。

伊豆の国市観光協会HPの年間スケジュールより、調査範囲内で開催される6つの祭事を抽出した。また、毎月長岡温泉の出逢い通りで開催される一つのイベント（温泉場お散歩市）を抽出した。これらの祭事・イベントの概要について、伊豆の国市HPや伊豆の国市観光協会HPより調査し、整理した。

▶ リサーチ結果

1年を通して、歴史・文化にちなんだ祭事イベントが開催されている。その内容は、源氏の歴史に関する者から、狩野川流域を襲った水害に関連するもの、温泉文化として温泉まんじゅうを取り上げたものまで、多種多様である。また、自転車産業にも力を入れており、自転車関連のイベントも開催されている。

近年では、地域活性化を目指して長岡温泉場で屋台や滞在スペースを運営する「温泉場お散歩市」が毎月開催されており、人々の交流の場となっている。

こうした祭事イベントは、2つの温泉街やその周辺の公園、総合会館など、対象範囲の中央あたりで多くが開催されている。

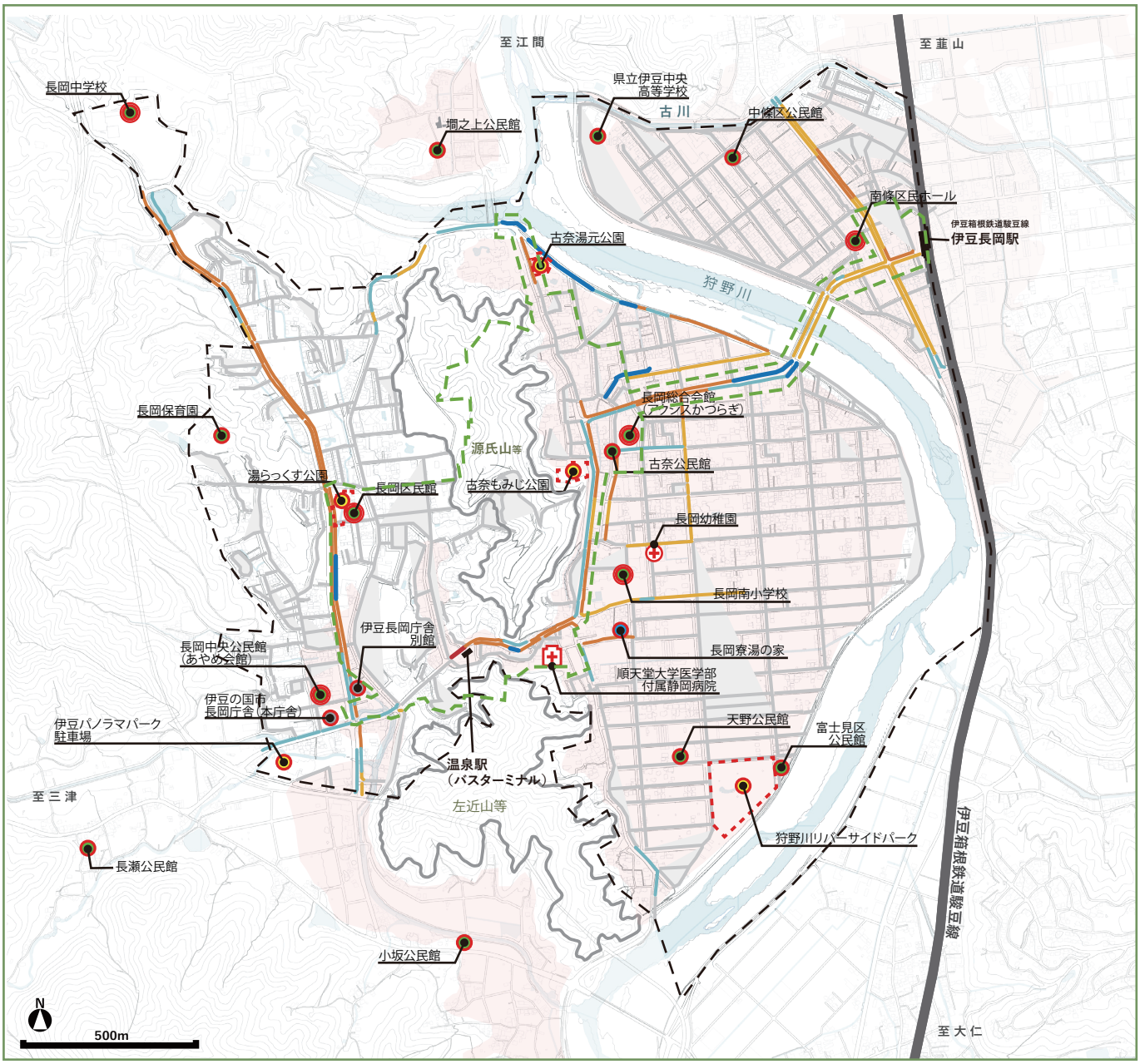
毎月開催されている温泉場お散歩市

● まとめ

一年を通して**地域の歴史や文化を反映した祭事イベント**が開催されている。

毎月開催されている**温泉場お散歩市**には住民だけでなく観光客も多く集まっている。

3-1-17　災害（避難施設）　【その他】



凡例

調査範囲

まちなか
ウォーカブル区域

・避難施設

- 避難所（地震時、洪水時、土砂災害時）
- 避難所（地震時、土砂災害時）
- 広域避難所
- 福祉避難所
- 救護所
- 救護病院、災害拠点病院
- 行政機能（市役所、市の施設）

・被害想定

浸水した場合に想定される水深
浸水深3.0m～の区域（早期立退き避難区域）

・歩道幅員

- 0m
- 0.1m-0.9m
- 0.9m-1.4m
- 1.5m-2.0m
- 2.0m-3.4m
- 3.5m-

〈出典〉
伊豆の国市HP
伊豆の国市防災マップ
※歩道幅員は1-1から

▶ 調査概要・方法

ウォーカブルの10の視点とは別の観点として、災害が発生した時に避難できる場所があるか、その避難場所までの道は安全か調査した。

避難施設の立地については、伊豆の国市防災マップを元にプロットを行った。

▶ リサーチ結果

【避難拠点について】

伊豆長岡地域、特に伊豆長岡駅周辺や古奈地区は狩野川沿いにあり、多くが浸水した場合に浸水深3.0m以上となるため、源氏山周辺に避難施設が集中している。

避難所としては、小・中学校や保育園、地区内に点在している公民館が指定されている。また、地区内の公園も災害発生時には広域避難所として機能する。

また、順天堂大学医学部付属静岡病院は地域の災害拠点施設となっており、災害時には病院周辺に多くの緊急車両が通ることも想定されるような重要な拠点である。

災害指定病院に指定されている順天堂病院

【避難経路について】

主要な避難経路として、県道が考えられるが、歩道幅員が広くなく緊急輸送路にもなっているため、避難の遅れや交通事故などの二次被害につながる可能性が考えられる。

県道の様子

● まとめ

災害発生時、狩野川沿いの地区は浸水の危険性が高い。多くの避難拠点は源氏山周辺に集中しているが、県道については歩道幅員が狭く、避難時の二次災害につながる恐れがある。

3-2　ウォーカブル現状インタビュー調査

図　高校生に対するウォーカブル現状インタビュー調査結果

凡例

○	歩きやすい / 歩きたくなる
×	歩きにくい / 歩きたくない
○	自転車で 走りやすい / 走りたくなる
×	自転車で 走りにくい / 走りたくない

▶ 調査概要

2022年6月13日お散歩市時にボランティアで参加していた伊豆中央高校生8名に協力していただき、歩きやすい/歩きたくなる・歩きにくい/歩きたくない・自転車等で走りやすい/走りたくなる・自転車等で走りにくい/走りたくない、場所とその理由を調査した。

▶ リサーチ結果

【「歩きやすい/歩きたくなる」について】
出逢い通りや狩野川沿いを中心に「歩きやすい/歩きたくなる」という意見が寄せられた。出逢い通りは、射的のレトロな店があることやお散歩市限定で車道に芝生が敷かれていることなど、通りならではの個性が歩きたくなる要素につながっていることがわかった。狩野川沿いは、春には桜が咲くこと、夏は涼しく気持ち良いことなど、季節の変化を感じられる場所として人気が高かった。

【「歩きにくい/歩きたくない」について】
伊豆長岡駅を中心に「歩きにくい/歩きたくない」という意見が多く寄せられた。歩きにくい要因としては、「歩道が狭い」「道がぼこぼこ」といった不十分な道路整備によるものが多かった。歩きたくない要因に関しては、「街灯が少ない」という意見が駅周辺や住宅街で見られ、ほかにも「車が怖い」「信号の時間が短い」などの声が挙がった。

【「自転車等で走りやすい/走りたくなる」について】
「歩きやすい/歩きたくなる」スポットとしても人気が高かった狩野川沿いは「自転車等で走りやすい/走りたくなる」スポットとしても声が挙がった。狩野川沿いは自転車等が走れる道幅が広いだけでなく、歩車道が分かれているため安心して通行できるのが人気の理由だと考えられる。

【「自転車等で走りにくい/走りたくない」について】
自転車等で走りにくい要因として、千歳橋付近では電柱等のトラップが多いこと、源氏山周辺では坂が急であることが挙げられた。自転車等で走りにくい要因としては、歩きたくない要因とも重複するが、街灯が少なく夜は暗いことや車が危ないという声が挙がった。

● まとめ

歩道が狭い、街灯が少ないなどの意見が多く寄せられた。また、意見の傾向から歩いているのは駅周辺や狩野川沿いに集中しており、それ以外のスポットは高校生にあまり利用されていない様子が見られた。

3-2　ウォーカブル現状インタビュー調査

図　地域関係者に対するウォーカブル現状インタビュー調査結果

凡例

○	歩きやすい / 歩きたくなる
×	歩きにくい / 歩きたくない
○	自転車で 走りやすい / 走りたくなる
×	自転車で 走りにくい / 走りたくない

セミプロ

（ま）…「まちづくり・都市計画」
PNO、地域おこし協力隊、都市計画課職員等

（か）…「観光業」
旅館関係者、環境協会職員、温泉場通り振興会、大河等

一般の方

（内）…市内在住の方

▶ 調査概要・方法

2022年7月10日お散歩市時に地域で働いている方、住んでいる方に協力していただき、歩きやすい/歩きたくなる・歩きにくい/歩きたくない・自転車等で走りやすい/走りたくなる・自転車等で走りにくい/走りたくない、場所とその理由を調査した。

▶ リサーチ結果

【「歩きやすい/歩きたくなる」について】
歩きたくなるスポットとしては高校生と同じく狩野川沿いで多くの意見が寄せられたが、他にも古奈温泉街や源氏山、リバーサイドパーク等で意見が挙がった。特に古奈温泉街は、あやめ小路が石畳で雰囲気がよく、歩いていて楽しいという声が多かった。また、喫茶店やパン屋、クレープ屋など飲食店が点在していることが歩きたくなるまちの一要素として考えられる。

【「歩きにくい/歩きたくない」について】
歩きにくい要因としては高校生と同じく歩道が狭いことや街灯が少ないことが挙げられた。歩きたくないスポットとしては伊豆長岡駅から古奈温泉街までの県道沿いやリバーサイドパーク周辺の住宅街に意見が集中した。県道沿いは立ち寄り場所が少ないことが歩きたくない要因となっていた。源氏山は登る雰囲気は良いが、入り口付近に看板やサインがないため、地元の人も良く知らないという声が寄せられた。

【「自転車等で走りやすい/走りたくなる」について】
自転車で走りたくなるスポットとしては、高校生と同じく狩野川沿いが人気であった。また、リバーサイドパークは景色がよくサイクリストもよく休憩していることや天野地区は何もないため気持ちよく走れることが分かった。

【「自転車等で走りにくい/走りたくない」について】
伊豆長岡駅から古奈交差点までの県道は、道幅が狭く道もぼこぼこであるため走りにくく、推奨ルートや走っている人が楽しめるようなサインの設置があると良いという声が寄せられた。県道以外も、道路整備や自動車交通の状況により走りにくいスポットがいくつか点在していることがわかった。

● まとめ

良い点も悪い点も、地域に根付いた人ならではの声が多く寄せられた。また、幅広い属性の方々に対するインタビューであったこともあり、様々なスポットでの意見が得られた。

3-3　バイカブルリサーチ

狩野川自転車走行環境調査

2022年10月8日～9日狩野川沿いのサイクリングロードにおける狩野川自転車走行環境調査を実施した。調査目的は伊豆の国市におけるバイカブルの主な要素である狩野川のサイクリングロードにおける自転車走行環境の把握である。

狩野川沿いのサイクリングロードでは、狩野川沿いは国が定めたナショナルサイクルルートをはじめ、流域の自治体連携、市の観光協会、民間企業など様々な主体がルートを設定している。

▶ サイクリングロードの自転車走行環境の評価

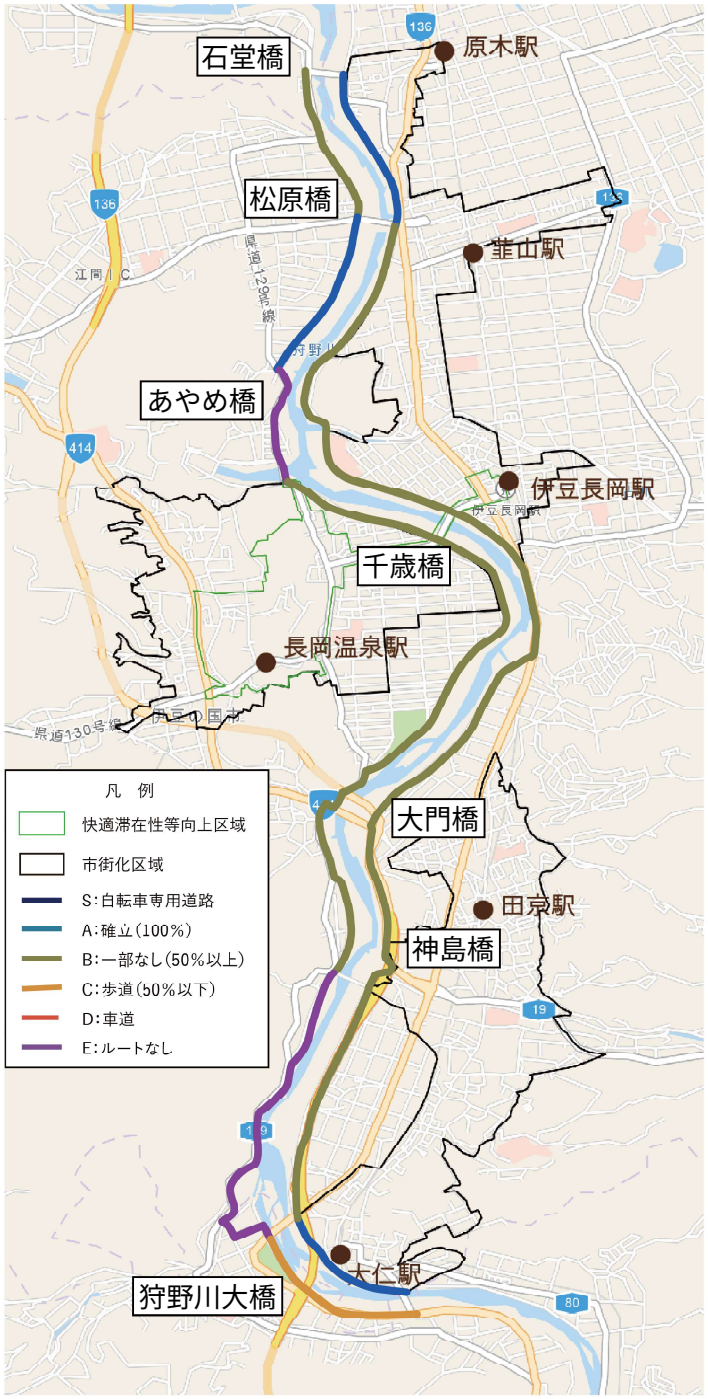
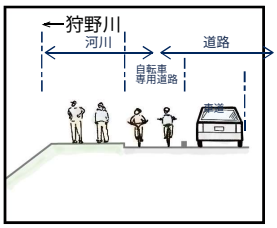


図　狩野川サイクリングコースの現状

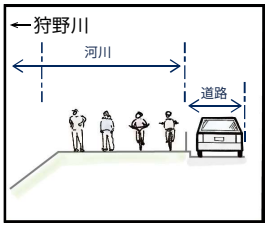
・自転車走行環境の評価

自転車走行時における安全性の視点で自転車の走行環境を６段階で評価した。

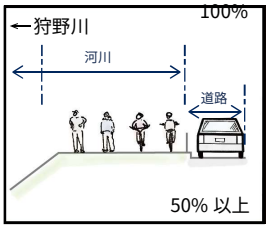
S：自転車専用道路
▶自転車交通のための独立した道路が整備されている区間。



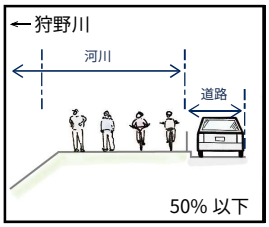
A：確立（100%）
▶自動車と分離された自転車走行環境のある区間。



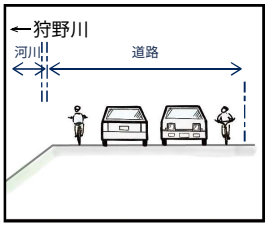
B：一部無し（50% 以上）
▶50%以上が自動車と分離された自転車走行環境のある区間。



C：歩道（50% 以下）
▶50%以下が自動車と分離された自転車走行環境のある区間。



D：車道
▶車道を自動車と並走して走行する必要のある区間。



E：ルート無し
▶川沿いに自転車交通のためのルートがない区間。

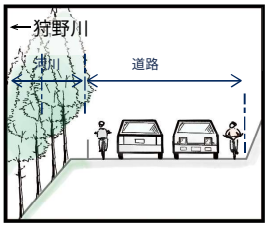


図　サイクルロードの断面図

サイクリングロードの自転車走行環境

サイクリングロードの自転車走行環境に関する調査結果は以下の通りである。

表　狩野川両岸における自転車の乗りやすさ

区間		左岸評価	右岸評価	備考
石堂橋	松原橋	B	A	函南町区間あり
松原橋	あやめ橋１	A	D	
あやめ橋１	あやめ橋２※	E	–	
あやめ橋２	千歳橋	B	–	
千歳橋	大門橋	B	B	
大門橋	神島橋	B	D	
神島橋	狩野川大橋	E	B	
狩野川大橋	大仁橋	C	A	伊豆市区間あり

※松原橋から千歳橋の区間については整備状況が異なるため、左岸側の区間を２つに分けた

狩野川の右岸と左岸の両岸における、「自転車の乗りやすさ」について把握した。

現状では、自動車と並走する区間があるなど、両岸とも自転車走行環境として、安全な通行ルートは確立されていない。左岸側、右岸側より、ルートを選択し走行することで、比較的安全な通行ルートを選択できるものの、各橋の橋詰を通行する必要があるため安全なルートとは言えない。

また、狩野川からサイクリングロードが離れる区間もあるため、狩野川沿いにおけるネットワーク形成の余地もあり、今後改善する必要がある。

橋詰の自転車走行環境

橋詰の自転車走行環境に関する調査結果は以下の通りである。

表　橋詰の現状

	左岸	右岸
石堂橋	△函南町	×
松原橋　歩道橋	×	△
狩野川放水路 あやめ橋　側道橋	○	××
千歳橋及び側道橋	×	○迂回
大門橋	○	××
神島橋	△	××
狩野川大橋	××伊豆市	××伊豆市
大仁橋	○伊豆市	××

凡例
○信号付横断歩道有、△横断歩道有（川に沿って、向かって）、× 横断歩道有、×× 横断箇所無

すべての橋詰が道路と平面交差となっており、横断歩道を渡る必要があるほか、横断が困難な橋詰も複数ある。

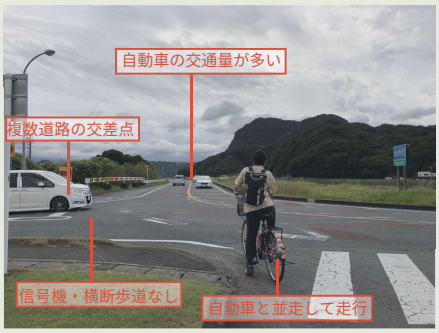
また、横断歩道や信号機等がない等、横断箇所のない箇所を合わせると９箇所あり、橋詰において自転車走行ルートが車道により一度分断されてしまっている現状である。

橋詰は周辺市街地と接続する場所でもあるため、橋詰の自転車走行環境を改善することでまちとの連携などの波及効果も期待できる。

COLUMN　危険な橋詰について

自転車利用者にとって特に危険な橋詰の例として「大門橋（右岸側）」の橋詰を紹介する。当該箇所は５本の道路が集まる５差路のため交通量が多い場所であるが、交差点に横断歩道や信号はない。更に、自動車と並走して走行する区間でもあることから、自転車利用者にとって危険な環境となっている。

大門橋（右岸側）周辺は、自転車利用者の拠点となる道の駅が位置し、かわまちづくりが進められている。今後の改善により、狩野川沿いの自転車走行環境の更なる向上に繋がることが予想される。



大門橋の橋詰の様子

3-3　バイカブルリサーチ

自転車まちづくりに関するアンケート

2023 年 11 月 12 日お散歩市にて、来訪者の方々にご協力いただき、自転車まちづくりに関するアンケートをシール投票と口頭質問にて実施した。調査目的は①市民の自転車利用頻度や利用目的の把握、②自転車休憩施設に求められている施設・機能の把握、③ウォーカブル・バイカブルルートの策定に関連して、市民が市内で魅力に感じている箇所の把握である。

▶ リサーチ結果

Q1　自転車に乗る目的は？

自転車に乗る目的について尋ねたところ、全体では「乗らない」（44.4%）が最多であり、「健康づくり・趣味・遊び」（37.0%）、「通勤・通学」（7.4%）、「買い物」（7.4%）と続いた。また、伊豆の国市内在住者に限ると「乗らない」が 92.3%であった。

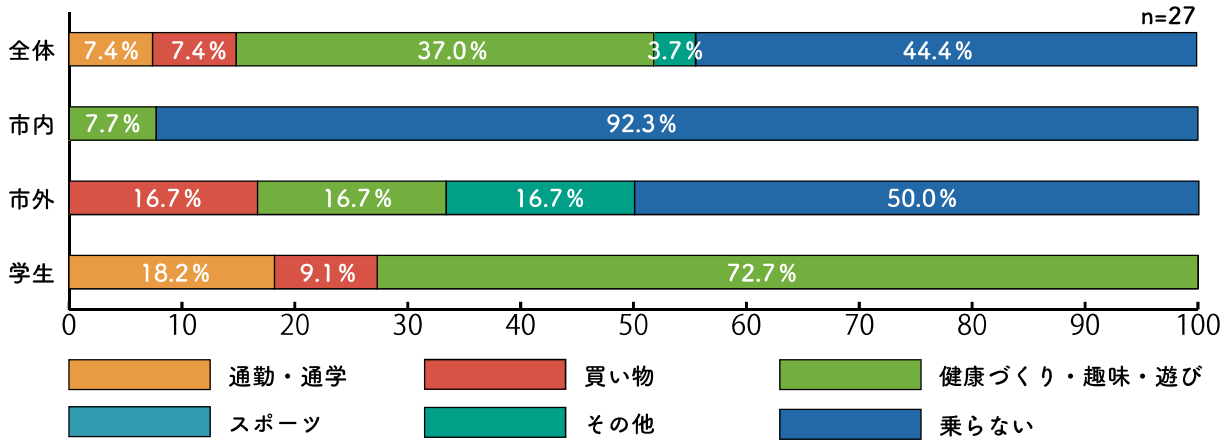


図　自転車に乗る目的のアンケート結果

Q2　自転車に乗るルートは？または乗ってみたいルートは？

普段から自転車に乗る人は自宅から目的地のルートを走ると回答した方が多かったが、市街地は安全な道が少なく、自転車で走るのが怖いという意見もあった。また、いつも狩野川沿いをサイクリングしていると回答した方は、古奈湯元公園の足湯に入り折り返すルートと、修禅寺まで行くルートの 2 ルートをよく走るとのことだった。（次ページ参照）

乗ってみたいルートとしては、狩野川沿いと回答する方が多かった。

Q3　狩野川沿いに自転車休憩施設を作るとしたら何が欲しい？（複数回答可）

自転車休憩施設に欲しい施設を尋ねたところ、「トイレ」（40.0%）が最多であり、「給水場・自動販売機」（32.0%）、「駐車場」（16.0%）、「更衣室」（8.0%）、「コインロッカー」（4.0%）と続いた。

Q4　Q3 に加えて、休憩施設にあったら嬉しいものは？（複数回答可）

自転車休憩施設にあったら嬉しいものを尋ねたところ、「ひとやすみスペース」（34.5%）が最多であり、「水遊びスペース」（24.1%）、「イベントスペース」（20.7%）、「レンタサイクル・サイクルラック」（17.2%）、「運動施設」（3.4%）と続いた。

また、自由回答としては、「バンプトラックコース」、「カフェ等の飲食施設や軽食の販売」、「ドッグラン」等が挙げられた。その他、「サイクリングの目標地点となる場所となってほしい」、「サイクリングを安全にできる道を整備してほしい」、「水遊びスペースには日陰を作ってほしい」等の意見があった。

Q4　あなたの好きな場所、お気に入りの場所はどこですか？（複数回答可）

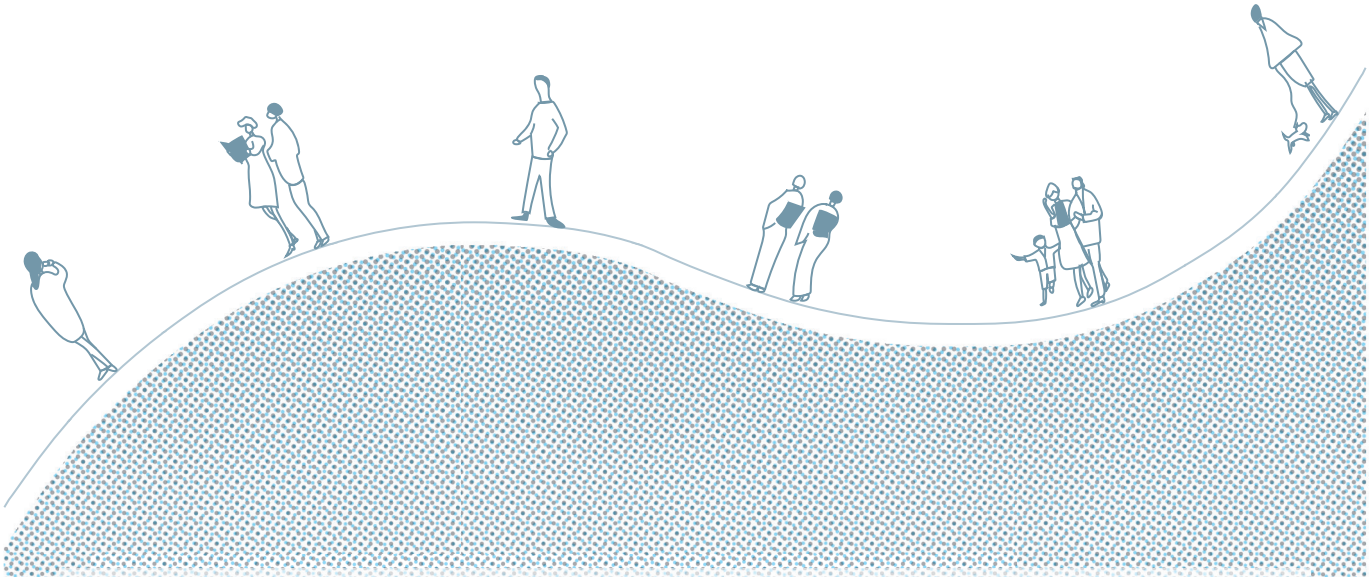
伊豆の国市内でのお気に入りの場所、お勧めしたいと思える場所を尋ねた。得られた回答は下図の通りであり、市内の広域に広がっていることが分かる。

図　訪れてみたい場所のアンケート結果

● まとめ

伊豆の国市在住者の 92.3% が普段自転車を利用しないが、狩野川沿いを走ってみたいという回答が多かった。また、市内の広域に魅力的な場所があることが分かった。

→狩野川沿いで自転車が走りやすい道の整備検討を行う。また、魅力的な場所をどのように繋ぐかを検討する。



Chapter 04
伊豆の国市ウォーカブルビジョンにおけるコンセプト

4-1. 伊豆の国市におけるまちづくり (上位計画) のコンセプト整理

4-2. 伊豆の国市におけるウォーカブルなまちづくりのコンセプト

4-1 伊豆の国市におけるまちづくり（上位計画）のコンセプト整理

伊豆の国市のウォーカブルビジョンを考えるうえで、伊豆の国市全体のまちづくりの考え方を改めて整理すると、伊豆の国市全体における「総合計画」、伊豆の国市の都市計画の考え方を示す「伊豆の国市都市計画マスタープラン」、そして、特に伊豆長岡地区における地域まちづくりに関して、様々な主体（エリアプラットフォーム）で策定している「未来ビジョン」（国土交通省 官民連携まちなか再生推進事業）などに目標が示されている。

行政計画に示されている目標

▶ 伊豆の国市総合計画および後期基本計画における将来像

将来像：「ほんわり湯の国、美（うま）し国、歴史文化薫る国、未来を拓く伊豆の国」

基本理念：共生と調査、継承と創造、自助・共助・公助

【まちづくりの基本方針】

1．豊かな自然に抱かれる伊豆の国市
2．伊豆の国市にしごとをつくる
3．伊豆の国市に新しい人の流れをつくる
4．歴史に学び、未来を拓（ひら）く 伊豆の国市
5．子育ても人生も楽しい 伊豆の国市
6．安全で安心な 伊豆の国市のまちづくり
7．みんなで創る 伊豆の国市

▶ 伊豆の国市都市計画マスタープラン（平成 23 年策定、令和 3 年改定）におけるまちづくりの理念

「安心で、ほんわりとした健やかな暮らしがいつまでも続くまちを目指して」

伊豆の国市の豊かな自然環境と先人から受け継ぐ資源・財産の継承を基に、生きがいや安らぎ、ゆとりとうるおいに満ちた生活を営む中で、世界遺産（韮山反射炉）やジオパークなどによる交流活性化、人口減少や少子高齢化、地球温暖化などを背景に自然的環境と共生した集約連携型都市構造（コンパクト＋ネットワークシティ）の実現を目指す理念が示されている。

また、これを実現するために、「（7 つの）まちづくりの目標」として（後期基本計画の「まちづくりの基本方針」に対応した）、①豊かな自然に抱（いだ）かれる 伊豆の国市（集約連携型都市構造の実現と緑の保全、美しい景観）、②伊豆の国市にしごとをつくる（農業、観光産業、医療・福祉産業の活性化と市民の就業機会充実）、③伊豆の国市に新しいひとの流れをつくる（定住人口と観光交流人口の拡大、公共交通ネットワークの充実）、④歴史に学び、未来を拓（ひら）く 伊豆の国市（歴史的風致の維持向上）、⑤子育ても人生も楽しい 伊豆の国市（新たな人口の受け皿、ユニバーサルデザインの実現）、⑥安全で安心な 伊豆の国市のまちづくり（災害対応と社会基盤の維持管理）、⑦みんなで創る 伊豆の国市（地域プラットフォームの推進）、が示されている。

「未来ビジョン」で示されているコンセプト

国土交通省官民連携まちなか再生推進事業に基づく、地域や自治体、民間事業者が連携してつくるエリアプラットフォーム（会議体）として伊豆の国市内で立ち上げられた「伊豆長岡温泉ミライ会議」により、温泉場出逢い通りをはじめとした伊豆長岡エリアの賑わいのある再生を目指して策定された「伊豆長岡温泉ミライビジョン」（2020年、初版）において、「4つのまちづくりコンセプト」が示されている。

1．そとに出て、活動したくなるまち
2．様々な出会いがあるまち
3．温泉資源や地域資源を活かしきるまち
4．広域連携を行うまち

また、このコンセプトを実現するために、①温泉場出逢い通り、②南山荘の活用、③源氏山の活用、④温泉駅の活用、⑤順天堂前の活用、⑥空き家活用、⑦E-bike 周遊、⑧伊豆長岡駅前、⑨千歳橋付近などでの取り組みが企図されている。

なお、このような未来ビジョンのコンセプトを実現するための視点として、今後、①さまざまな力を「重ね合わせる」戦略、②モバイル・シティ（仮設や可動な軽やかなまちづくり）、③パートナーを巻き込んで、内外の力を並走して実現する、などを通じた実装の取り組みが期待されている。

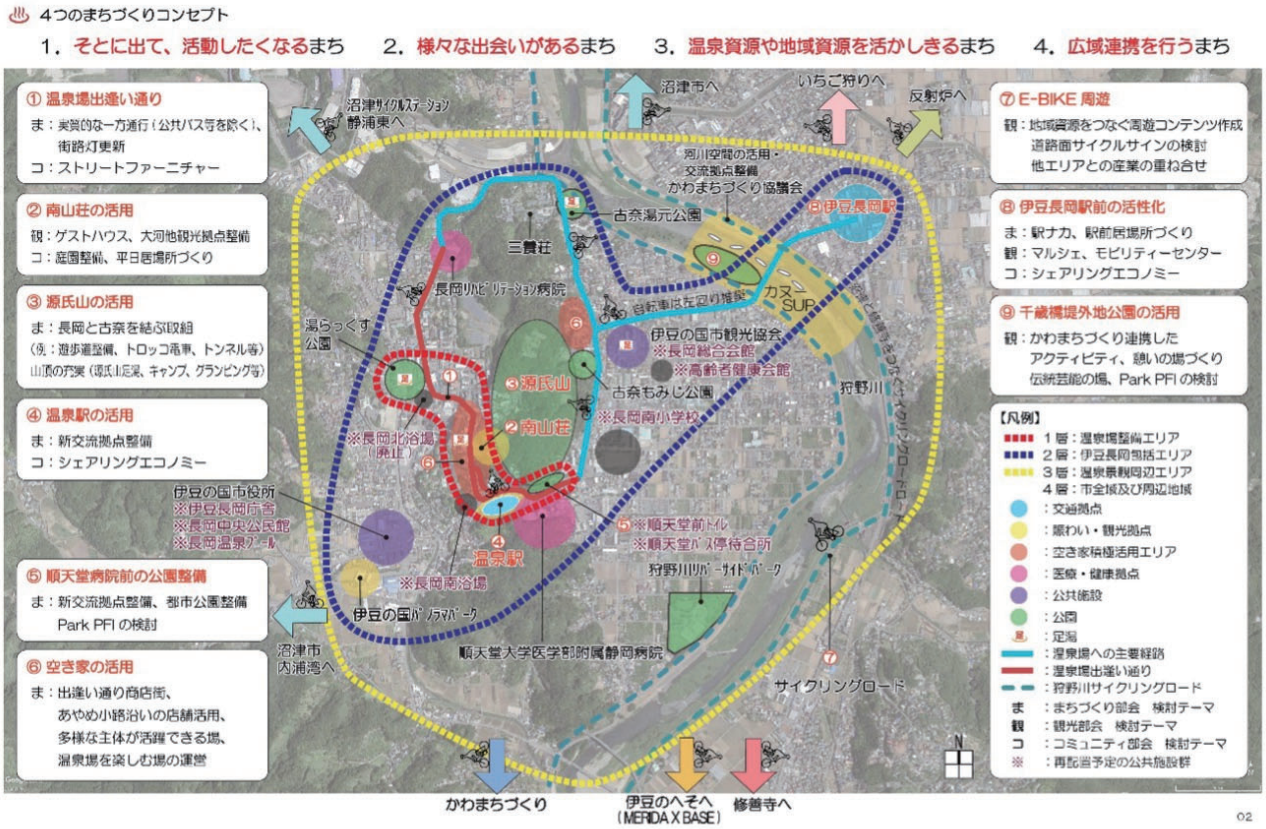


図 「伊豆長岡温泉ミライビジョン」における「4つのまちづくりコンセプト」と「9つの取り組み」

4-2 伊豆の国市におけるウォーカブルなまちづくりのコンセプト

これまでの各章で整理した内容（1 章の前提、2 章の「ウォーカブル」における考え方、3 章で抽出された課題）、そして、4-1 で示されているまちづくりのコンセプトなどを踏まえて、伊豆の国市で目指す「ウォーカブルなまちづくり」の大きな方向性を提示する。

「ほっと」なまち、伊豆の国

～まちの資源を活かして、そとにでて、豊かに自由に活動できるまちへ～

フラット（平坦）で落ち着きのある穏やかなまちの魅力があるものの、自動車中心で外出機会の少ない現状の伊豆の国市において、豊富な地域資源を活かしながら、生活者（市民）も来街者（観光客）も一緒に、自由で豊かにまちで活動できるようになるまちづくり。気軽に立ち寄り、集まり、活動のできる「ほっと」するまち、地域資源を活かして、活気のある「ほっと」なまちを目指す。

【コンセプト】
ウォーカブルビジョン『「ほっと」なまち、伊豆の国』を具体化する「4 つの視点」

(1) そとで楽しめるまち（資源を活かす）：目的地や結節点・機会を生み出す

［目的性、近距離性］

伊豆の国市は、資源豊かで気候も穏やかで魅力的な、コンパクトなまちなかを有しているものの、地方都市として自動車中心の生活が営まれている。そこで、この資源の集まるまちなかに来たくなる目的地や豊かな環境を用意しつつ、自由に移動したり、乗り換えたりしやすい環境を用意して、人々が活動したり交流したりする機会の増加を図ることが考えられる。また、そうした活動が見える化するように、積極的にそと（外部空間や沿道空間など）活用の活性化が考えられる。

(2) そぞろ歩きしたくなるまち：バリアをなくし、歩いてたのしいみちを増やす

［安全性、ユニバーサルデザイン、快適性］

現状の伊豆の国市の「道路」は、比較的自動車中心に作られており、道幅も広くないため、安全でかつ居心地よくあるけない箇所も多く存在する。一方で、温泉街をはじめとして、(1) のような豊かな資源によりアクセスしやすくなるようにするためにも、歩きやすくかつ歩きたくなる、特に、「そぞろ歩き」したくなるようなまちづくりが重要である。

(3) 多様な活動が重なり合うまち：多様な存在や活動を意識して一緒に使える場を用意する

［交流性、多様性］

まちには、地域住民だけでなく、そこで働く人、商店を営む人、旅館に勤める人、観光客や来訪者、ワーケーションに訪れる人、病院を利用する人など、様々な人たちがいるが、特に伊豆の国市はこうした様々な目的を持った人たちがバランスよく活動している。こうしたそれぞれの目的を持った人たちの存在を意識しながら、様々な人たちが一緒に利用・活動できるような、「重なり合い」のあるまちを目指すことで、相乗効果を上げることが考えられる。また、こうした多様な活動を行えるまちとするために、さわやかな朝の活動、温泉街などでの魅力ある夜のまち、休日だけでなく平日でも豊かな活動ができる場づくりなど、多様な時間帯での活動の場を用意したり、多様な選択肢を用いてまちを移動したりまちで活動したりできるまちづくりが期待される。

(4)（活動する）人を「はぐくむ」まち：パートナーを巻き込み、内外の力を結集する

［持続性］

また、こうしたいろんな人たちが、自由に過ごせる環境や、自らまちづくりに参加できる状況・場が用意されていることで、また、様々な人の活動を受け入れ、巻き込み、内外の力を結集するような、活動する人々をはぐくむまちとなることが望まれる。

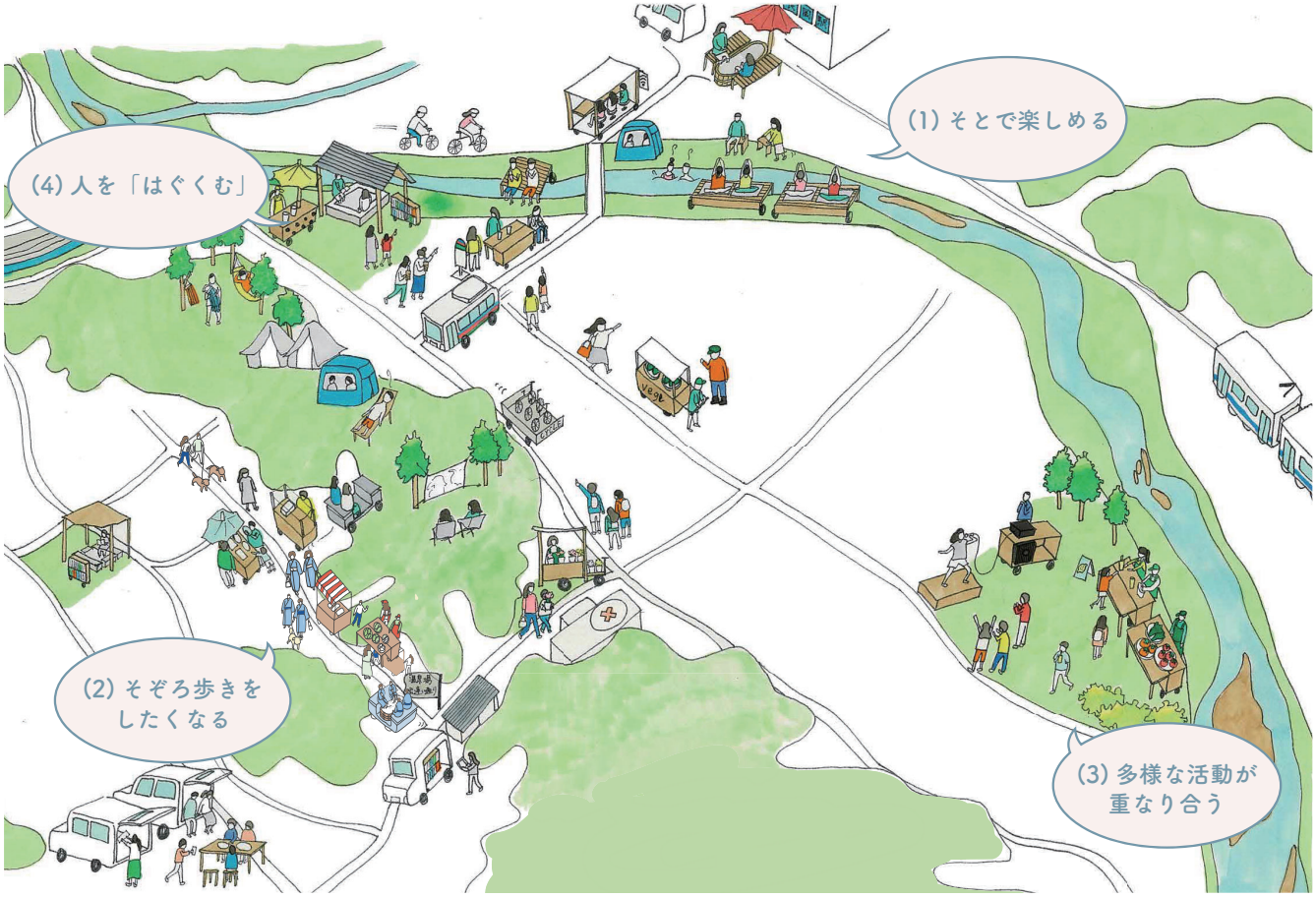
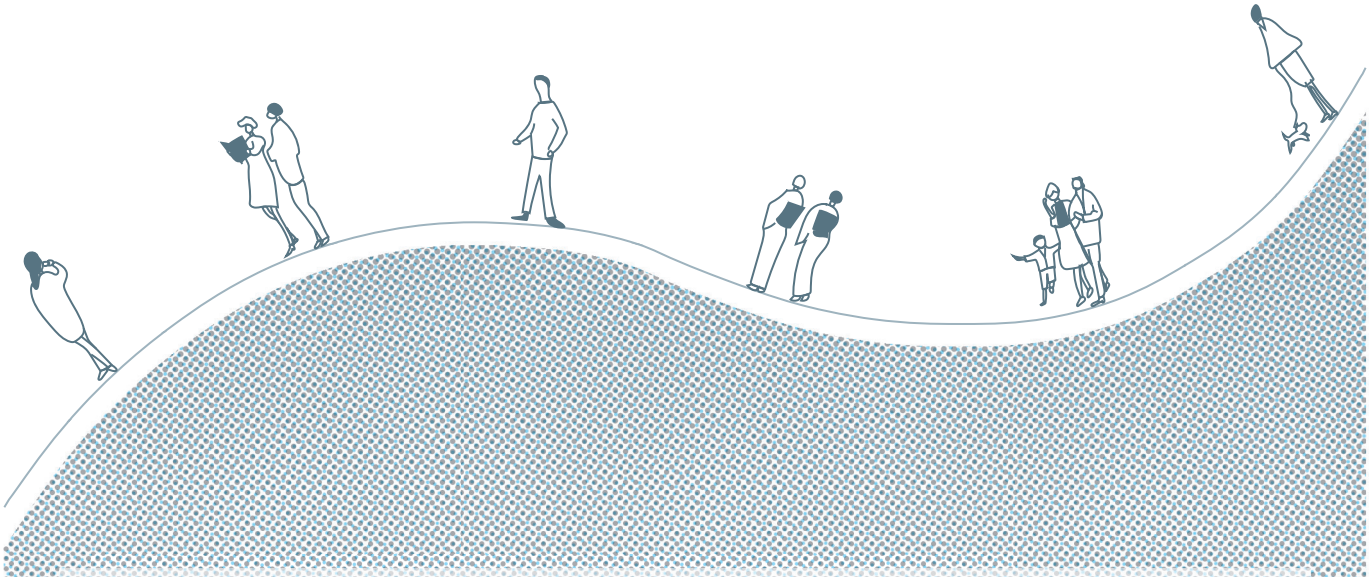


図　まちの将来イメージ



Chapter 05
伊豆の国市ウォーカブルビジョンを実現するためのプロジェクト

5-1. 伊豆の国市におけるウォーカブルなまちづくりの実現戦略

5-2. 重点エリアでの戦略実現のためのツボ押しプロジェクト

5-2-1. ウォーカブル（バイカブル）なまちの「骨格」をつくる

5-2-2. 立ち寄りできる「ほっとすぽっと」を配する

5-2-3. そぞろ歩きできるみちを生む

5-2-4. 狩野川を活かすバイカブルなまちづくり

5-2-5. モバイルツールを活かして「場」をつくる

5-2-6. 暮らしの中でウォーカブルなまちをはぐくむ

5-1 伊豆の国市におけるウォーカブルのあり方

伊豆の国市における「ウォーカブルなまちづくり」については、4 章で提示したコンセプト（『ほっと』なまち、伊豆の国））を基に、歩きやすい、歩きたくなるまちを実現するための戦略が必要となる。

また、単に歩きやすい空間をつくるだけではなく、まちなかでの豊かな活動や人々との交流、あるいは、健康まちづくりの実現など、様々な効果が期待されることも鑑みて、２章で掲げた「ウォーカブルなまちの多義性」の各目標項目の中から、伊豆の国市にあった目標を設定した上で、これを実現するために様々なプロジェクトを重ね合わせてゆくことが求められている。

まずは、まちなかでウォーカブルなまちづくりを実現するために、立地適正化計画における都市機能誘導区域を基にした伊豆長岡地区を重点エリアとして設定し、戦略実現のために、重点エリアでのツボ押しプロジェクトを検討する。

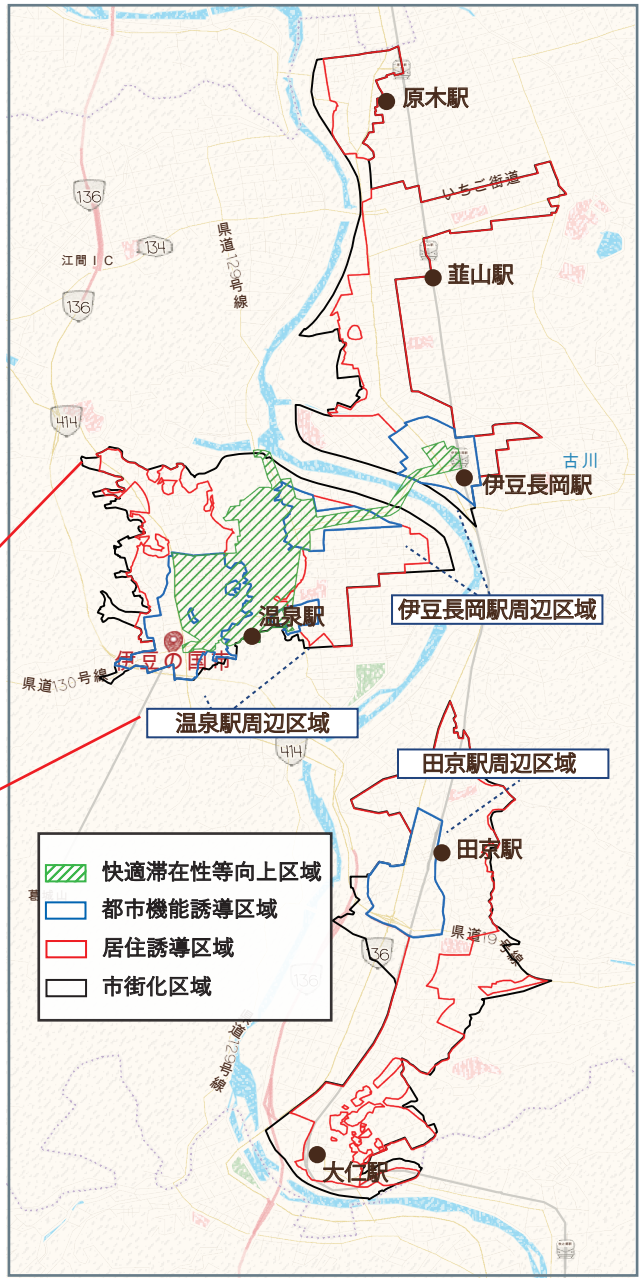
▶ 実現のための重点エリア（ケーススタディ）

伊豆の国市立地適正化計画では、伊豆長岡駅周辺区域、温泉駅周辺区域、田京駅周辺区域の３つの都市機能誘導区域が設定されている。

その中でも特に本ビジョンでは、伊豆の国市で策定されている都市再生整備計画で滞在快適性等向上区域としての位置づけがある「伊豆長岡地区（伊豆長岡駅周辺区域及び温泉駅周辺区域）」を重点エリア（ケーススタディ）として検討する。

● 伊豆長岡地区

2 つの温泉街を中心としてエリアマネジメント等による様々なまちづくり活動が展開されており、その他市役所や病院、公園なども多く存在するほか、沿道の民間事業者による歩道と一体となったまちづくりオープンスペースの創出等により、官民一体となって居心地の良いまちなかを創出することが図られている地区である。

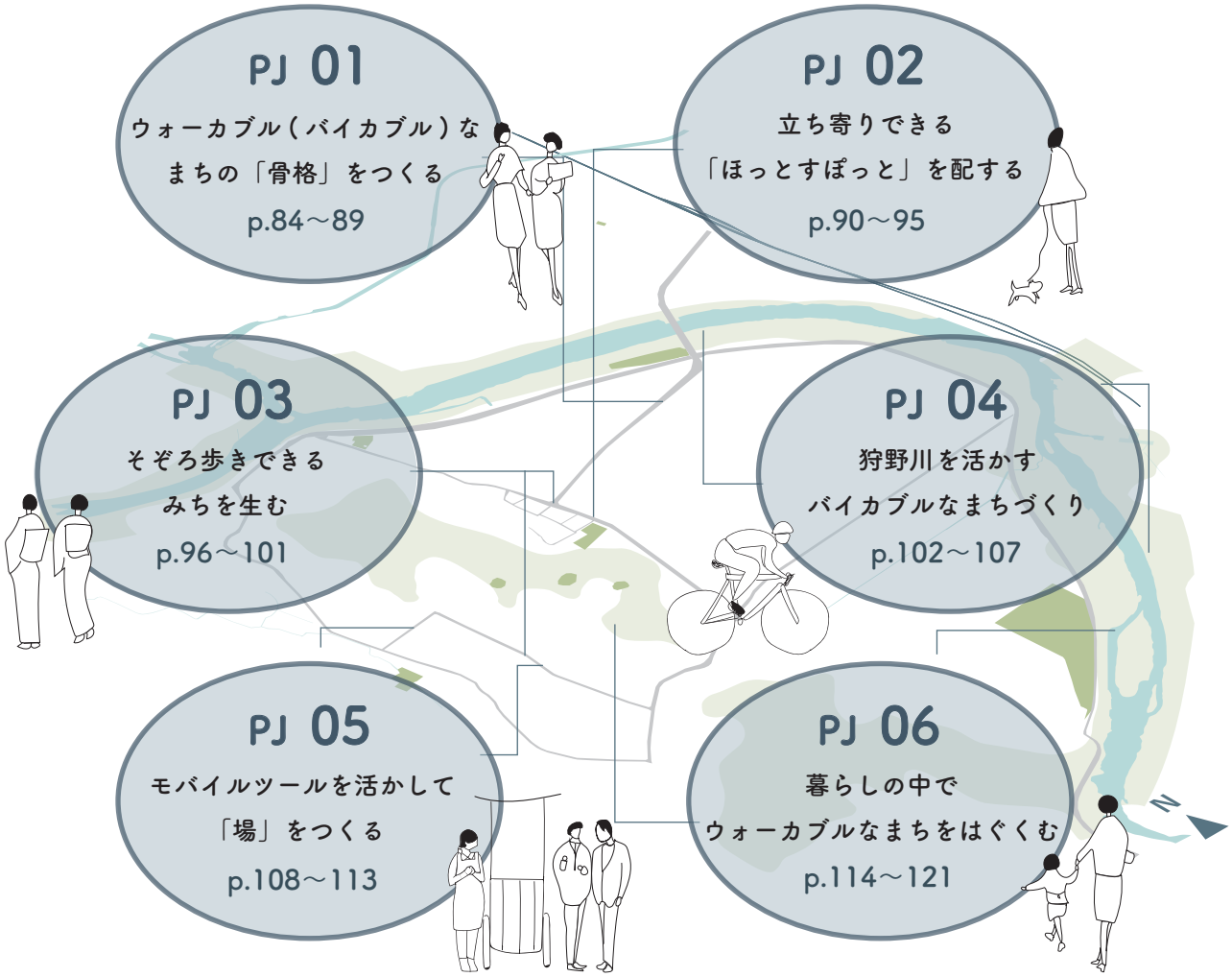


伊豆の国市のまちの構造

5-2 重点エリアでの戦略実現のためのツボ押しプロジェクト

伊豆長岡エリアでウォーカブルなまちづくりを実現するために、以下の６つのプロジェクトを検討する。これらのプロジェクトを通じて、伊豆長岡にある資源を生かしながらエリアのツボとなる場所での活動を促し、それぞれを連動させながら空間づくりを行う。

６つのプロジェクト



▶ ページ冒頭部分の見方

プロジェクト名

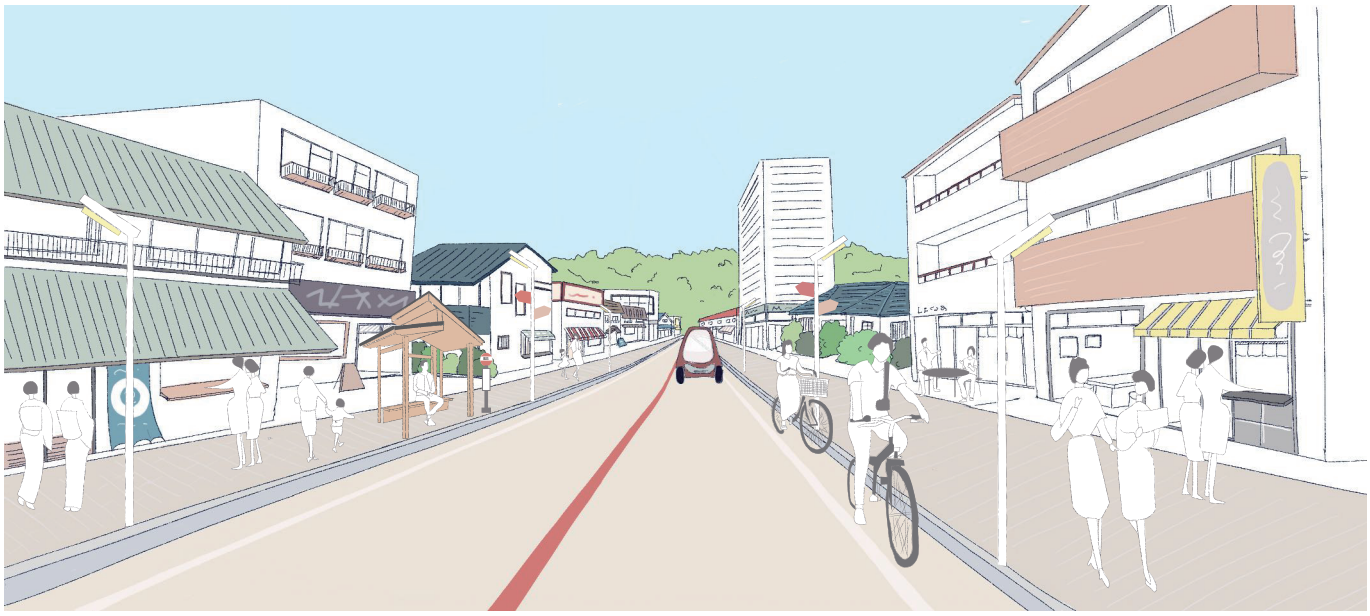
上記 PJ 01～PJ 06 のうち、どの提案か

目標項目

2-2「『ウォーカブル』における目的の整理」にてあげた 12 項目のうち、各プロジェクトがどれに該当するか

5-2-1 ウォーカブル（バイカブル）なまちの「骨格」をつくる

目標項目											
交通安全性	ユニバーサルデザイン	公共交通利便性	目的性	回遊性	交流性	快適性	生活圏の構築	健康まちづくり	多様性	都市活力の向上	地域性



ウォーカブルなまちを支える「骨格」の形成

伊豆長岡地区でウォーカブルなまちづくりを行うには、自由な移動ができる空間を用意することが重要である。現状の伊豆長岡地区では、人々は主に自動車移動を中心としていること、そしてそれぞれの街路の幅があまり広くないことが原因で、移動のしやすいまちであるとは言い難い。また、伊豆長岡駅から温泉駅を通るバスは比較的充実している一方で、観光などのことを考えると、バスを下車した先の移動手段や主要道路の歩道部分の歩きやすさには課題があり、自由に移動できる空間を用意する必要がある。これらを踏まえて、生活者・来訪者・観光客に対する移動を総合的に考えて、「移動の骨格」となる「３つ」の軸を設定し、これらについて、できるだけ移動が円滑となり、かつ、歩きやすい・歩きたくなる場の創出を考える。

道路整備状況をふまえた今後の「骨格」整備の可能性

現在、伊豆長岡地区では県道を中心に道路整備が実施されており、県道 130 号の順天堂大学医学部附属病院が面する区間をはじめとして歩道拡幅工事が行われている。このようなウォーカブルなまちづくりに向けた道路整備事業とともに、より良い道路空間の活用方法を検討することが求められる。場所によって可能な整備は異なるため、その道路の構成、状態に合わせた整備を考えることが重要である。

○区間によって異なる道路断面

（伊豆長岡駅～古奈温泉）
歩道の舗装は比較的進んでいるが、幅は狭く、活用はされていない。

（古奈温泉～順天病院前※）
歩道拡幅工事が行われており、歩行者空間の創出の可能性を有する。

（順天病院前※～伊豆の国市役所）
歩道がほとんどなく、通行に危険が伴う。安全性の確保が必要。

※「順天病院前」＝「順天堂大学医学部附属病院前」

伊豆長岡地区のウォーカブル（バイカブル）なまちの 3 つの「軸」

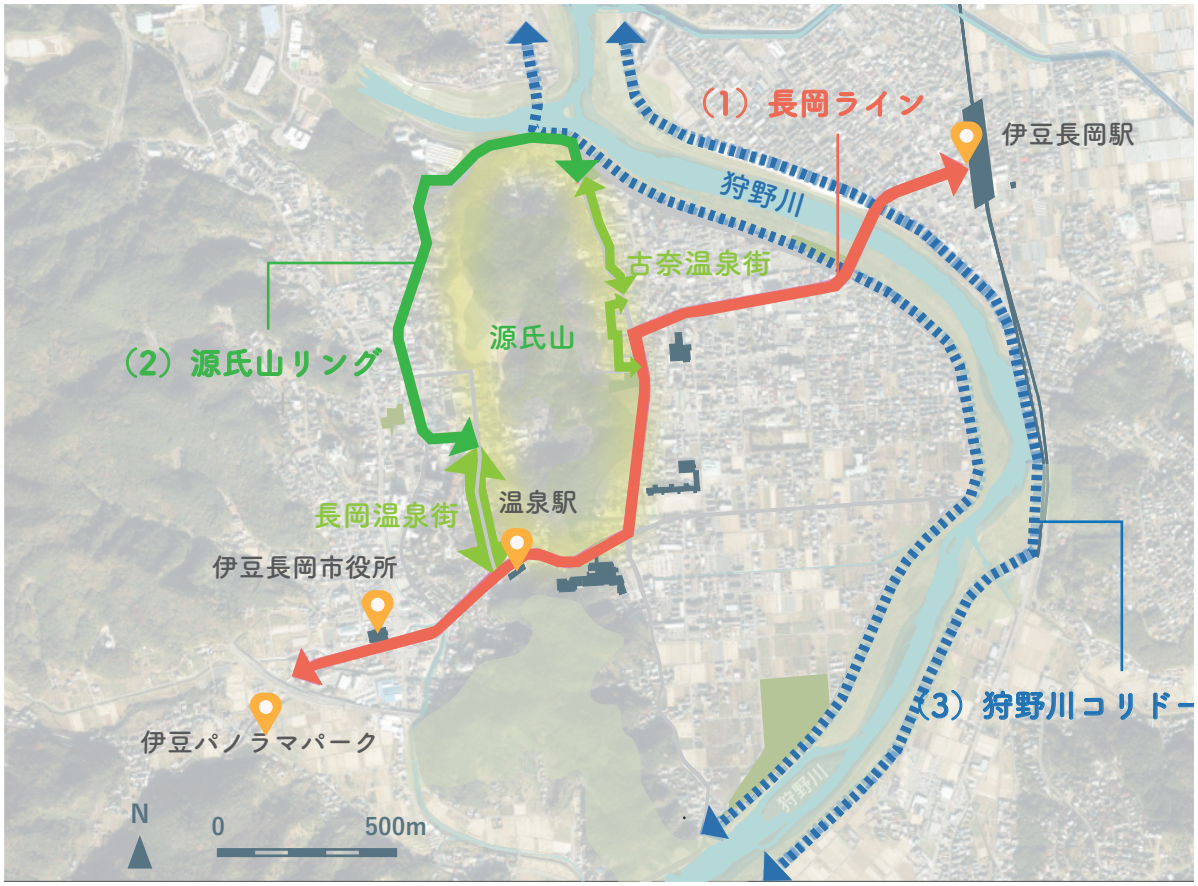


図　伊豆長岡地区のウォーカブルの骨格全体

伊豆長岡地区において、生活者・観光客・来訪者の移動の観点から重要となるウォーカブルなまちを目指した 3 つの「軸」を設定し、それぞれ異なる目標に向けての整備・マネジメントについて考える。

■軸（1）長岡ライン：【図の (1)】伊豆長岡駅西口駅前広場～伊豆長岡市役所・パノラマパークへの動線

【伊豆長岡駅西口】→（県道 131 号古奈伊豆長岡停車場線）→【古奈温泉】→（県道 129 号韮山伊豆長岡修善寺線）→【順天堂大学静岡病院】→（県道 130 号伊豆長岡三津線）→（国道 414 号線）→【伊豆の国市役所・伊豆の国パノラマパーク】

→地区のウォーカブルな移動の骨格に

■軸（2）源氏山リング：【図の (2)】源氏山を周回する動線（一部 (1) と重複）

【温泉駅バスターミナル】→（温泉場出逢い通り）→【あやめ橋前・三養荘】→県道 129 号韮山伊豆長岡修善寺線）→【順天堂大学静岡病院】→（県道 130 号伊豆長岡三津線）→【温泉駅バスターミナル】

→温泉街回遊の動線に

■軸（3）狩野川コリドー：【図の (3)】

狩野川沿い両岸の河川沿いの道路・管理用通路

→バイカブルなまちづくりの軸に

5-2-1 ウォーカブル（バイカブル）なまちの「骨格」をつくる

■軸（1）長岡ライン（伊豆長岡駅西口駅前広場～伊豆長岡市役所・パノラマパークへの動線）

伊豆長岡駅～古奈～順天堂大学静岡病院～温泉駅～市役所・パノラマパークまでの軸線をウォーカブルなまちづくりの軸線（骨格）として位置づける。この軸線は、地域住民にとって主要な施設が集積していて多くの住民が利用するエリアである。

長岡ラインの整備が伊豆長岡地区内の移動のしやすさの向上に大きく影響すると考え、ウォーカブルに整備していくことを提案する。

図 「長岡ライン」整備方針

参考イメージ：松山市の歩いて暮らせるまちづくり
（出典：https://www.city.matsuyama.ehime.jp）

○長岡ラインの方向性

長岡ラインにおいては、中長期的には、新たなモビリティツール（グリーンスローモビリティやサイクリングレーンなど）を検討し、地域住民から来街者、観光客まで幅広い人たちのまちなか移動を支援するとともに、快適にあるけるルートとして、歩道、あるいは沿道セットバックを含む歩行者空間の確保を目指す。また、オープンテラスやモバイルツール活用を通じて、立ち寄りたくなる沿道空間の創出を図る。また、舗装やストリートファニチュアなどの街路デザインも検討し、メインストリートとして魅力的な街路空間とする。

「長岡ライン」の現状

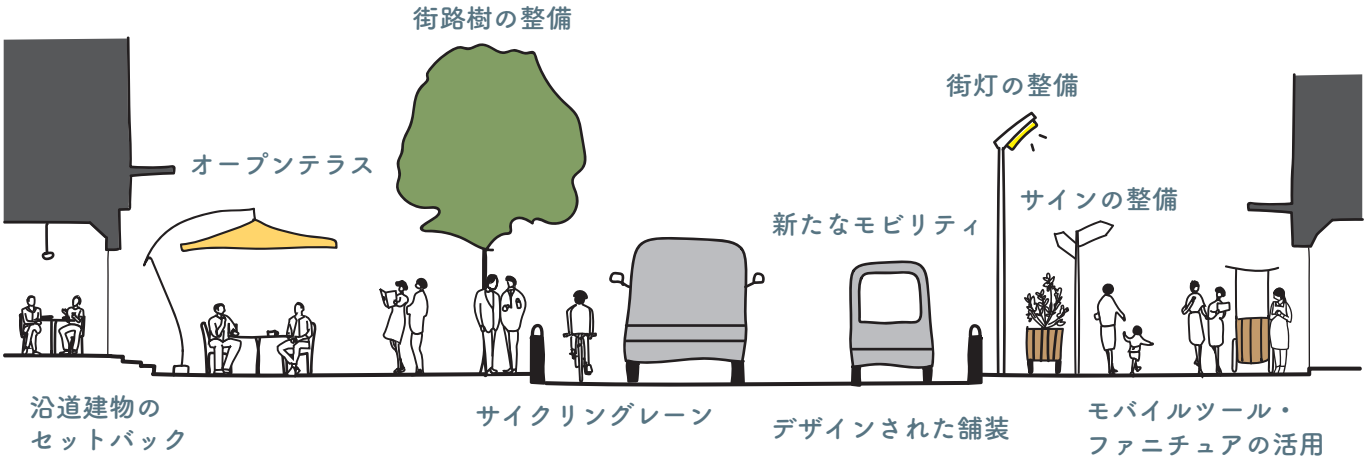


図 「長岡ライン」整備イメージ

■ 軸 (2) 源氏山リング（源氏山を周回する動線）

主に自転車を中心に、長岡温泉と古奈温泉の二つの温泉街を回遊できる道として位置づける。北西部はサイクリングロードを整備し、温泉街付近はそぞろ歩きが可能な場所としての整備を検討する。

道の整備に合わせ、源氏山や公園などの動線上の資源を活用し、目的地を創出することが考えられる。

参考イメージ：しまなみ街道サイクリングロード
（出典：https://cycling-ehime.com）

関連項目：5-2-3、5-2-6

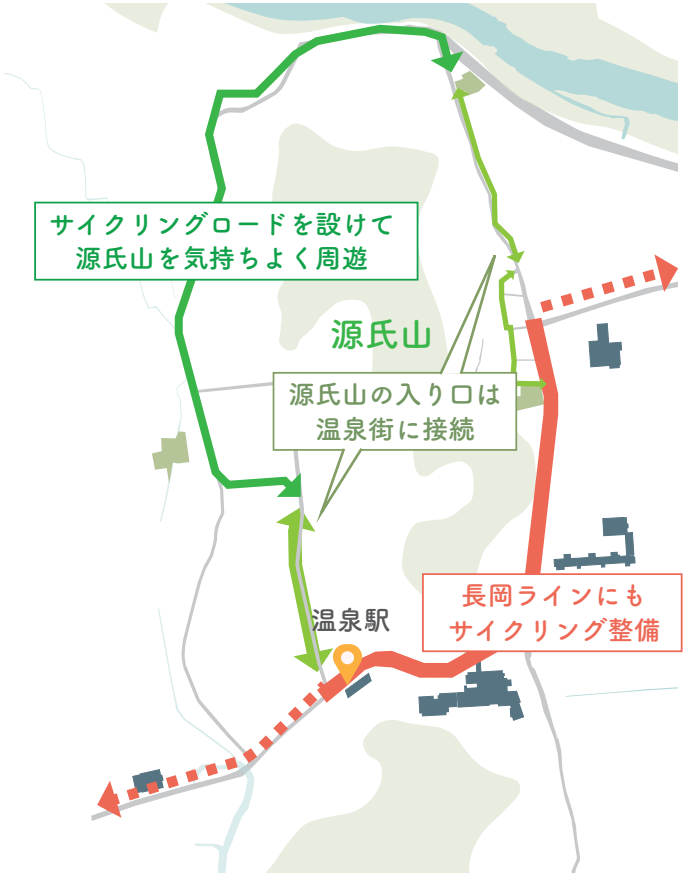


図 「源氏山リング」整備方針

○源氏山リングの方向性

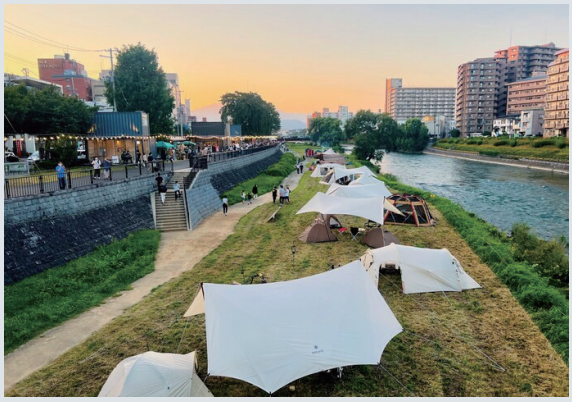
源氏山リングでは、歩行者の回遊とともに、サイクリングレーンの設置などを通じて、バイカブルな移動も可能なように整備する。街路樹等の整備による暑熱環境への対策や豊かな緑環境の確保、あるいは、街灯による夜間景観形成を図る。

「源氏山リング」の現状

図 「源氏山リング」整備イメージ

■ 軸（3）狩野川コリドー（狩野川沿い両岸の河川沿いの道路・管理用通路）

狩野川沿いのサイクリストニーズや自転車利用可能性を鑑みて、狩野川沿いを気持ちよく自転車で走行できる道をバイカブルレーンとして位置づける。そして、快適な自転車利用が行えるよう、サイクリングロードや休憩できる場所の整備、川沿いの環境を生かした河川敷の活用が考えられる。



参考イメージ：岩手県盛岡地区 かわまちづくり
（出典：https://www.city.morioka.iwate.jp）

関連項目：5-2-4

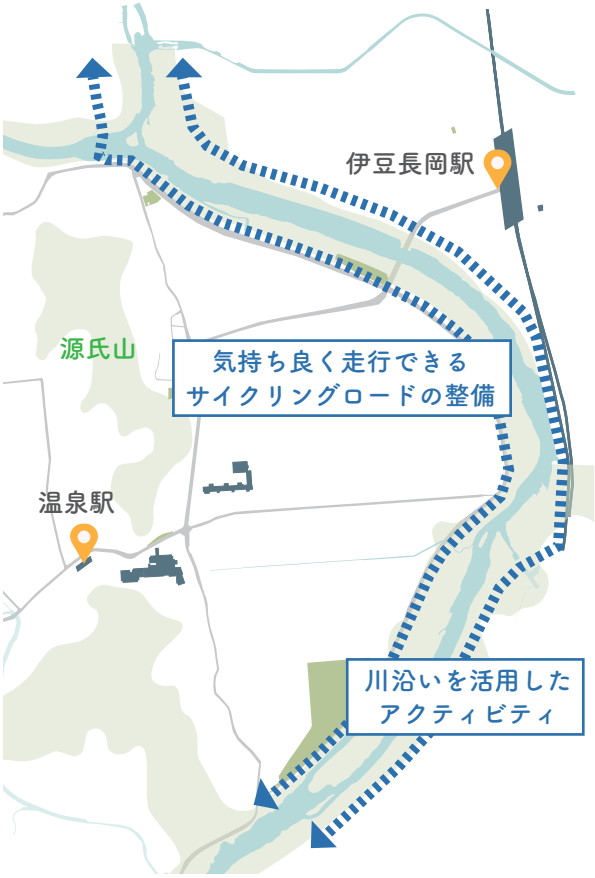


図 「狩野川コリドー」整備方針

○狩野川コリドーの方向性

狩野川沿いは、自転車での移動、サイクリング、ツーリングが可能なように、バイカブル環境を整備するとともに、ところどころでは、川沿いを利用したアクティビティの場を用意し、様々な活動誘発の場となるようにすることが求められる。

「狩野川コリドー」の現状

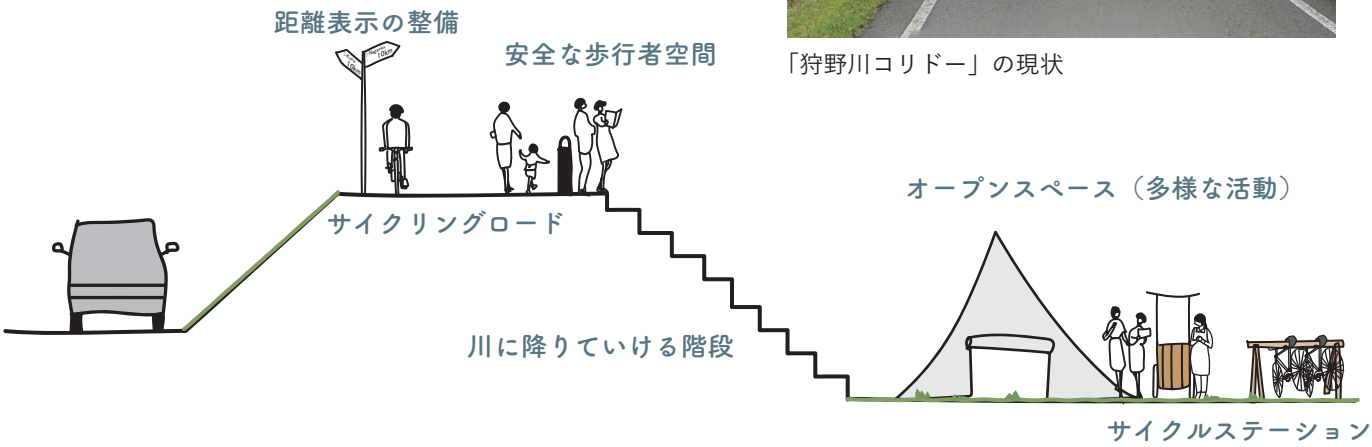


図 「狩野川コリドー」整備イメージ

3 つの軸形成に向けてのステップ

3 つの「軸」については、それぞれ移動の核となる街路・道路等であるため、できるだけ移動しやすい、安全でかつ快適な移動環境を整えることを優先的に考える。歩行環境や移動環境の改善を考えつつ、中長期的には道路幅員の拡幅やセットバック等、道路空間の再配分も検討の余地がある。特に、道路拡幅の事業などがある際には、移動環境のあり方やウォーカブルな街路のあり方、移動ネットワークなどの観点から、道路断面（特に歩道空間や自転車空間など）をよく検討する必要がある。

下図では、骨格の具体的な整備内容に関して、短期的な整備から長期的なものまで段階別に整理した。すぐにできる整備を進めながら、道路の構成を変えていくような大規模な整備を検討していく必要がある。

［STEP1］ 短期的な整備

(ex) モバイルツールの活用

道沿いのお土産屋や飲食店等の店舗前に移動させて使えるツールを設置し、仮設的に滞留空間を創出する。

イメージ：EMMAS HOFTOUR（出典：raumlabor.net）

沿道店舗のオープン化

荷物配送サービス

［STEP2］ 基礎的な整備

(ex) 歩行環境の整備

現在、源氏山や狩野川、足湯などの地域資源へのアクセスが分かりにくい。道標や街灯などを設置し、人々の活動を促す。可能な場所では歩道整備も行う。

イメージ：相川地区の道標（出典：https://www.city.sado.niigata.jp）

道の舗装

街灯の設置（夜間景観）

［STEP3］ 長期的な整備

(ex) 道路の拡幅と新モビリティの整備

沿道建物のセットバックと道路の拡幅を行う。

イメージ：尾道市のグリーンスローモビリティ（出典：https://www.asahi.com）

沿道建物のセットバック

道路断面の再構成

ほこみち制度の活用

図 「骨格」の段階ごとの整備

「移動の骨格」の整備方針

◎安全で移動しやすい道路環境（安全性）

- 道路幅員や歩道、サイクリングレーンの見直し、道の舗装によって歩きやすい道に整備する。
- 街灯や提灯の整備によって夜間歩行環境の安全性の向上を図る。

○楽しく 移動できる道（目的性・快適性）

- モバイルツールを用いて、店前に日除や腰掛けるファニチャーを設置し、移動の快適性向上を図る。
- 移動手段の選択肢を増やし、気軽に乗車 / 下車しながら立ち寄りながら移動を楽しむ。

5-2-2 立ち寄りできる「ほっとすぽっと」を配する

目標項目											
交通安全性	ユニバーサルデザイン	公共交通利便性	目的性	回遊性	交流性	快適性	生活圏の構築	健康まちづくり	多様性	都市活力の向上	地域性

現状のまちなかに不足している「豊かな活動が集まる場」が多く育まれるように、人々の様々な活動が「ほっと」に集まり、居心地もよくて「ほっと」するような（主に）屋外の場所「ほっとすぽっと」を、まちじゅうにたくさん用意して、そとで活動がしたくなる、歩いて活動がしたくなるようなまちを目指す。

これまで、伊豆の国では、自動車移動が中心の生活のため、あまり外に出ることが多くなかったかもしれない。しかし、そとで活動することは、活発な活動の様子がみんなで共有でき、交流の活発化にもつながる。伊豆の国は比較的温暖な気候であるため、そとで気持ちよく活動でき、中には、足湯のある場所も見られる。

こうした特徴を生かし、気軽に立ち寄ったり、活動したりできる場所が目に見える形でまちじゅうに現れ、人々が外に出てウォーカブルなまちを育んでゆくことにつながっていく。

「ほっとすぽっと」という目的地を配する理由

現状

伊豆長岡の人は車中心の生活を送るため、徒歩で街を回ることが少ない。

「ほっとすぽっと」の設置

将来

外に出て人がまちなかで活動することで、歩きたくなる「ウォーカブル」なまちづくりにつながっていく。

ほっとすぽっととは「豊かな活動ができる快適な場」のこと。
このエリアに魅力的で目的地となる場所を創出する。

「ほっとすぽっと」の基本構造

「ほっとすぽっと」とは、「熱い活動の集まる（ホットな）結節点であり、居心地の良い（ホッとする）オープンな場」のことである。こうした「ほっと」な場所を創り出すための仕組みを用意する。

(1) 活動ができる場（プレイス）を用意する

様々な活動（あそぶ、マルシェを開く、イベントをする、佇む、交流するなど）が自由に気軽にできるような「場」（プレイス）を設ける。

【具体例】芝生の広場や、舗装のされた活動場所などの小広場

(2) 活動のキッカケや活動の中心となる核を設ける

その場所に応じた活動がしやすいように、そのキッカケとなるものを用意し、その場所に応じて設ける。

【具体例】交流や活動のための施設、コンテナのような簡易的な場、ちょっとしたカフェ、モバイルツールによる簡易屋台、ほっとするベンチや足湯など

(3) 訪れやすいように移動のハブとする（「モビリティ・ハブ」の設置）

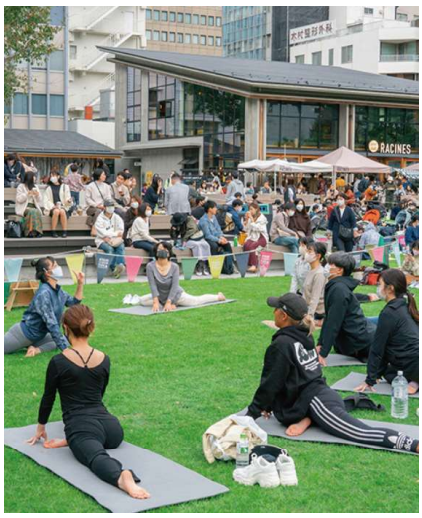
せっかく活動したくなる場があっても、そこにアクセスしにくければ、なかなか使われない。訪れやすいほっとすぽっととなるように、様々な移動手段を利用できる、「モビリティハブ」としての機能も有する。

【具体例】小規模な駐車スペースや駐輪スペース、乗換空間（例えばバスの停留所などとも連動）、シェアサイクルやシェアカー、新しいモビリティツールなど

こうしたほっとすぽっとが、大小やレベルは様々であっても、生活圏に多数（おもに 300m圏内に１つくらい）用意されることで、まちに活動がにじみだしてくることが期待される。

▶ ほっとすぽっとの創出例

・芝生広場



南池袋公園の様子
出典：https://00m.in/HRiCW

活動できる場として芝生広場を用意すると、ヨガのレッスン等のイベントや遊びに利用することが出来る。

・足湯

活動のキッカケや活動の中心となる足湯を置くことで、会話やコミュニケーションが生まれるキッカケとなる。

・サイクルポート

豊洲ぐるり公園の事例
出典：https://00m.in/jCfMw

訪れやすいように公園にサイクルポートを設置することで、アクセスしやすく、人が集まりやすい場所となる。

5-2-2 立ち寄りできる「ほっとすぽっと」を配する

▶ まちじゅうに「ほっとすぽっと」を用意する

伊豆長岡エリアが「歩きたくなる、歩いて楽しい」まちとして感じられるには、気軽に立ち寄ったり活動したりできる場所が、目に見える形でまちじゅうにあることが大切である。そのうえで、活動の結節点となるような「ほっとすぽっと」を設けることで、住民や観光客がそとへ出るきっかけを作り出すことを図る。

▌具体的な「ほっとすぽっと」の場所イメージ

（1）駅・バス停

①伊豆長岡駅前
電車やバスを待つ間の滞在空間としてのニーズあり

②温泉駅
温泉駅をより快適な空間にして集う場所に

③順天堂病院前公園
診察や面会まで待つ時間や医療関係者の休憩場所に

（2）公共施設前

④伊豆の国市役所前
人が多く集まる場所に付加価値を付ける

⑤JA 跡地
空き地を有効活用する

⑥観光協会前広場
今ある足湯に加えて、快適な空間にしたい

（3）公園

⑦リバーサイドパーク
遊具がたくさんあり、子供の遊び場として人気

⑧千歳橋堤外公園
伊豆長岡ならではの狩野川の景色を楽しめる公園

⑨もみじ公園
大きな広場はあるが活用されることは少ない

（4）足湯スポット

⑩湯らっくす公園
多くの地元民が訪れる

⑪古奈湯元公園
公園内には足湯のほかに健康器具や芝生がある

場所と使い方をリンクさせて利用者のモチベーション向上につなげたい！

（5）その他

⑫ミライ広場
温泉街に訪れた人が一息つく場所として最適

⑬伊豆パノラマパーク前
県外からも多くの人が訪れる観光スポット

ほっとすぽっと配置計画

伊豆長岡地区にほっとすぽっとを配置することを検討する。ここでは、「ほっとすぽっと」設置場所として、13スポットを抽出して検討する。これらスポットには足湯、宿泊施設、市役所、駅などがあり、すでに人が集まるポテンシャルがある場所であるといえる。これらの場所を「ほっとすぽっと」として考えてみる。

▶ 各すぽっとを「ほっとすぽっと」にすると

図 「ほっとすぽっと」による誘致範囲のイメージ

ほっとすぽっとを創出した際の誘致距離を300m（3-1-6 参照）と仮定してそれぞれのスポットに色をつけると、左図のように長岡ラインを中心として地域の大部分がカバーされており、スポットに訪れる人の増加、また、スポット同士の徒歩での周遊が可能になる。

長岡ラインは伊豆長岡駅や温泉場などを結ぶ移動の骨格であるのに加え、スーパーなどの日常生活機能が揃っているため、地域住民や観光客の多くが日常的に利用している。そのため、ほっとすぽっとが長岡ラインから立ち寄りやすい場所にあることで、日常的な家と目的地の往復に＋αで人々の移動や活動が生まれることが期待できる。

▶「ほっとすぽっと」を配することによるまちの将来イメージ

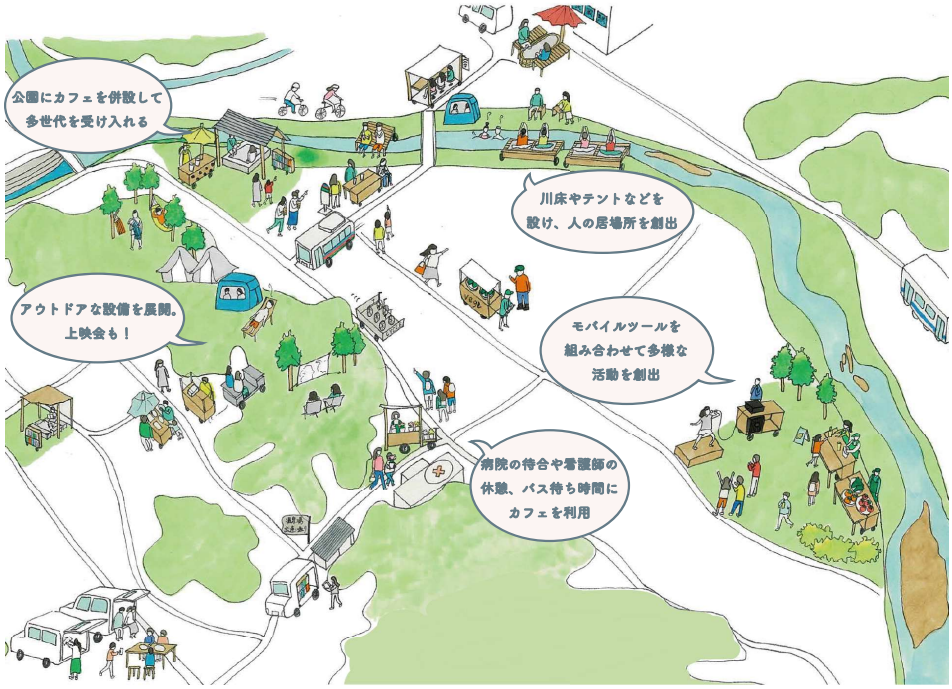


図 「ほっとすぽっと」を配することによるまちの将来イメージ

まちの各地にほっとすぽっとを創出した際のイメージが左図である。

「ほっとすぽっと」を配することで、各地で人々が外出する目的が生まれ、活動がまち全体で同時多発的に発生し、歩きたくなる・活動したくなるまちを目指す。また、活動を人々が共有することで交流も生まれやすくなり、人々が外に出てウォーカブルなまちを育んでいくことにつながる。

5-2-2 立ち寄りできる「ほっとすぽっと」を配する

伊豆長岡地区でのほっとすぽっと候補地例

▶（例）順天堂大学静岡病院前の公園を「ほっとすぽっと」に

今後ほっとすぽっと整備を行う場所の候補として、順天堂大学医学部附属静岡病院（以下「順天堂病院」とする）の公園を取り上げる。ここは道路の拡幅工事によって生じた公園で、2024 年 3 月現在も工事が行われている最中である。順天堂病院前のバス停があり、そのバス待ち空間としての役割も担っている。

順天堂病院は、医師・看護師等の医療従事者、通院患者、お見舞いに来る人など常に多くの人が利用する場所であり、ほっとすぽっとを設けることで賑わいが生まれるポテンシャルがあると言える。

順天堂病院前公園の様子

▶ 整備イメージ

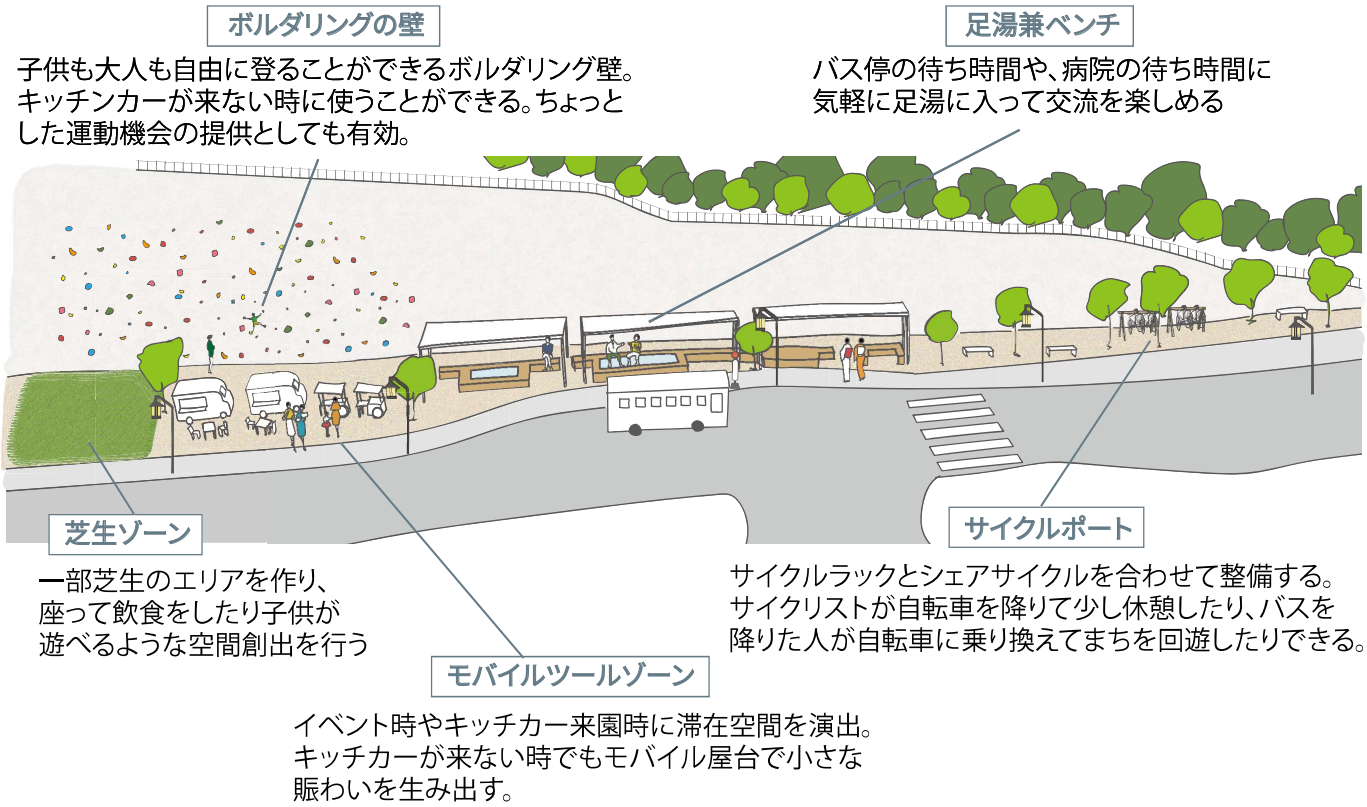


図　順天堂病院前公園の整備イメージ

ほっとすぽっとの整備が目指す将来像

◎人々が外に出て活動する

ほっとすぽっとが小さな目的地となり、外へ出るきっかけとなったり、用事のついでに立ち寄って楽しくまちを歩いたりする。

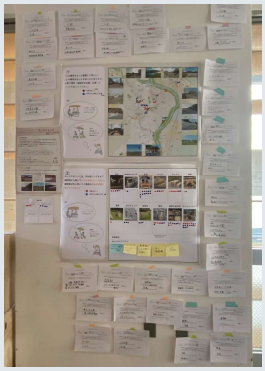
◎モビリティを用いてまちを回遊する

バスや自転車等のモビリティを自由に乗り換え、回遊しやすいまちに繋げていく。

COLUMN ほっとすぽっとに対する地域住民・観光客へのアンケート調査

伊豆長岡地区の住民や観光客など、この地域を実際に利用する人を対象とし、「どこに」「どんな」ほっとすぽっとがあると立ち寄って利用したくなるのか、2023 年 11 月 23 日～ 12 月 10 日にワークショップを実施して聞いてみた。

計 35 名の方に参加して頂いた結果の一部を以下に示す。



ワークショップ実施概要
期間：11 月 23 日～12 月 10 日
時間：温泉駅 営業時間に準ずる
場所：伊豆箱根バス・温泉駅
実施：横浜国立大学都市計画研究室、株式会社オオバ
協力：伊豆長岡温泉エリアマネジメント

ワークショップ時の様子

〈ほっとすぽっとにしたい場所〉

湯らっくす公園（市民 2 票、静岡県民 4 票、市外の方 3 票）
『足湯があり、よく利用する場所であるこの公園に +αがあると嬉しい！』

狩野川リバーサイドパーク（市民 3 票、市外の方 3 票）
『遊具が豊富で子供の遊び場として利用する。子供を見守りながら一息つけたらいいな。』

もみじ公園（市民 3 票、市外の方 2 票）
『公園としての認知度は低いものの、小学校や日用品店が近く、よく利用するエリア。ついでに立ち寄れる場所が欲しい！』

ミライ広場（市民 1 票、静岡県民 2 票、市外の方 2 票）
『温泉街らしい街並みや足湯があると、歩いて楽しい！目的地になりそう！』

〈ほっとすぽっとに欲しいもの〉

コーヒーショップ
（市民 8 票、市外の方 5 票）
『コーヒーは短時間の滞在にぴったり。』
『道端や公園にあったらつい立ち寄りたくなる！』

野菜の直売所
（市民 4 票、静岡県民 3 票、市外の方 2 票）

出典：横浜市保土ケ谷区 HP

『 何かのついでに地域の野菜や果物を買えたら便利 !』
『見つけやすく、気軽に立ち寄れる直売所が欲しい。』

足湯
（静岡県民 4 票、市外の方 4 票）
特に観光客に人気
『あったら立ち寄りたい。』
『コーヒーショップとの組み合わせでほしい！』

屋台
（市民 4 票、静岡県民 1 票、市外の方 3 票）

『昼食を買える屋台や子供向けの駄菓子屋ほしい。』
『使いやすく、日毎に内容が変わると楽しめる！』

5-2-3 そぞろ歩きできるみちを生む

目標項目											
交通安全性	ユニバーサルデザイン	公共交通利便性	目的性	回遊性	交流性	快適性	生活圏の構築	健康まちづくり	多様性	都市活力の向上	地域性

「そぞろ歩き」のできるみち

ウォーカブルなまちを目指すには、「みち」自体が、安全で歩きやすく、かつ、歩きたくなるようなものであることが大事である。残念ながら、現状の伊豆長岡地区のみち（街路）は、必ずしも歩きやすい、歩きたくなるものだとは言えない。そこで、伊豆長岡地区のみち（街路）を、できるだけ歩きたくなる、特に、時折佇んだりもしながら、あるいは、沿道から逆の沿道まで自由にわたり歩いたりしながら、「楽しんで」あるくことのできる、「そぞろ歩き」できるみちになることを目指す。

例えば、盛況だった頃の伊豆長岡温泉街や古奈温泉街では、カランコロンと下駄の音が鳴り響き、車を気にすることなく、時折お店に立ち寄りながら練り歩く、「そぞろ歩き」のできるまちだったのではないかと思う。このような「そぞろ歩き」のできる場所を改めて考える。

ここでは、伊豆長岡地区の中でも、かつてはそぞろ歩きを実現しており、今後もその姿を受け継いでいきたい温泉街である「伊豆長岡温泉街」（温泉場出逢い通り）と、「古奈温泉街」、そして、周辺の「うらみち」を中心に、そぞろ歩きのできる道を考えてみる。それぞれの道によって、そぞろあるきのできるみちの育み方は異なるが、安心してあるきたくなるみちを目指すという目標の下、人々が各所を巡り歩くことも目指す。

そぞろ歩きを考える道の位置図

出会い通り

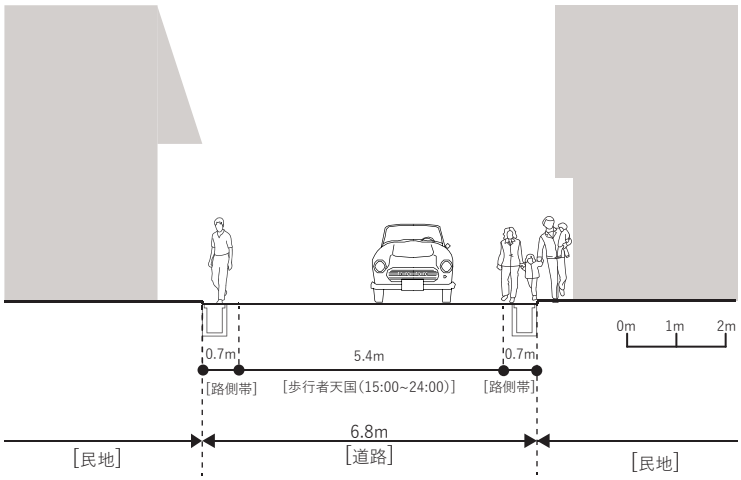
古奈温泉

うらみち

温泉場出逢い通りのそぞろ歩き

かつては下駄の音が鳴りやまなかったともいわれる、温泉旅館やお店が建ち並ぶ伊豆長岡温泉街のメインストリートであり、路線バスの経路でもありながら、幅員が狭く、自動車がスピードを出して通行することも多く、そぞろ歩きするには危険も伴う通りである。一方で、毎月第二日曜日の午前中に開催される「温泉場お散歩市」は、一時的に出逢い通りの一部を歩行者専用化して開催されており、市民や観光客でにぎわっている。この通りを「そぞろ歩き」できる道にすることは、観光客にとっても、生活者にとっても重要である。

2023 年 11 月お散歩市の様子



出逢い通りの断面図(現状)

温泉場出逢い通りにおけるそぞろ歩きできるみちのイメージ

出逢い通りでそぞろ歩きしている様子を下図に例として表した。ゆとりをもって安心して歩くことのできる街路となるだけでなく沿道で佇んだり、立ち寄ったりしたくなる場が集まることで、魅力あるみちとなり、そぞろ歩きを実現することができる。

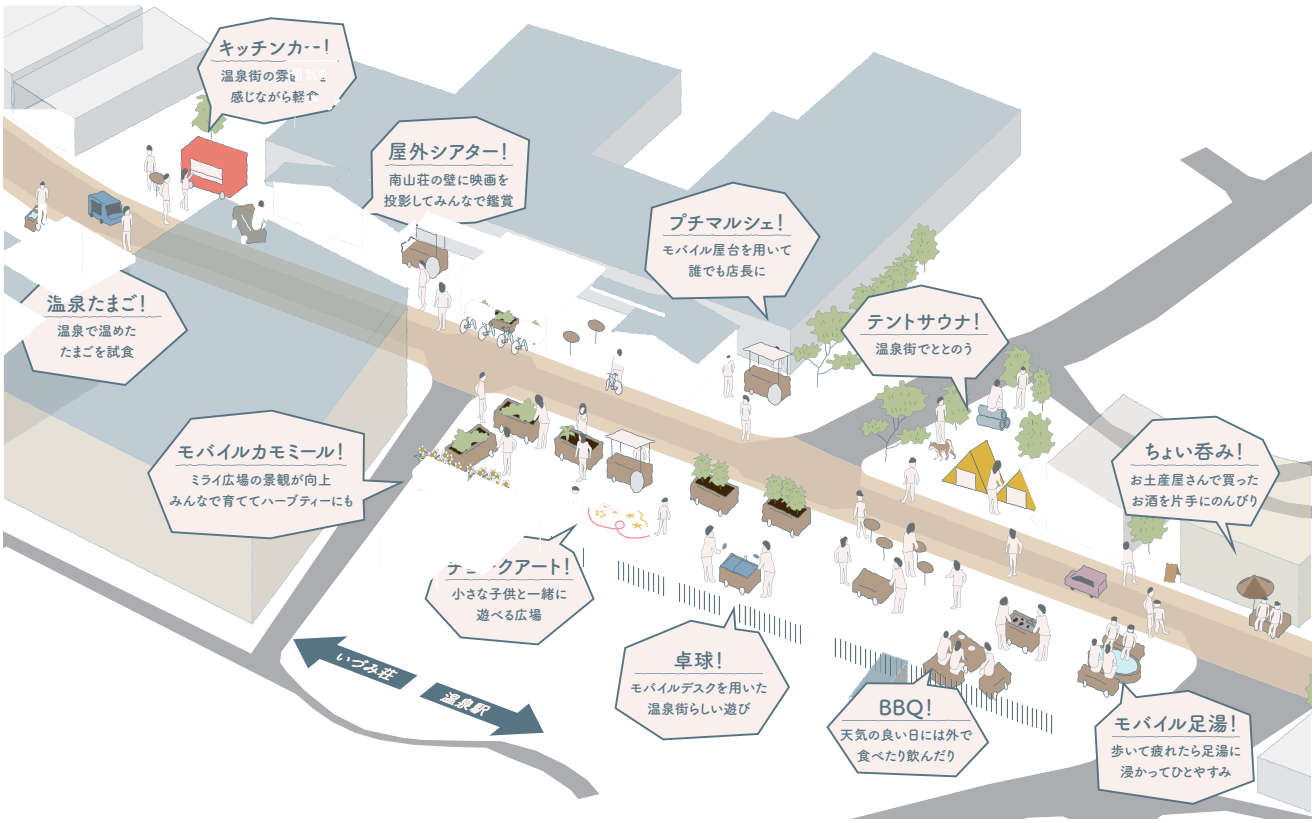


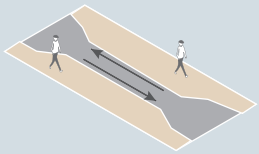
図　そぞろ歩きしたくなる出逢い通りのイメージ

5-2-3 そぞろ歩きできるみちを生む

▶安全性を高め、歩きやすい道路にするための道路再配分

快適なそぞろ歩き空間を確保するには、最もよいのは、歩行者専用化だが、通過する自動車、旅館へのアクセス、路線バスの経路であることを考えると、自動車との共存を考える必要がある。そこで、ここでは、以下のいくつかの方法で、両者の共存や歩行者専用化の道筋を考えてみる。各案はそれぞれ一長一短あるため、地域で状況と将来像を共有して慎重に検討する必要がある。

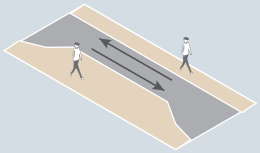
出逢い通りの道路空間再配分のパターン検討



1. 狭さく（中央寄せ）

歩道幅員：0.7~1.7m

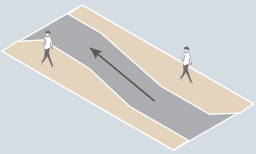
両側の歩道を数か所拡幅し、車の速度を落とす



2. 狭さく（片寄せ）

歩道幅員：0.7~2.7m

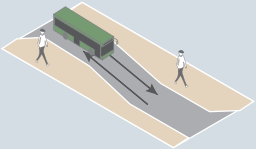
片方の歩道を数か所拡幅し、車の速度を落とす



3. 一方通行

歩道幅員：1.0~2.9m

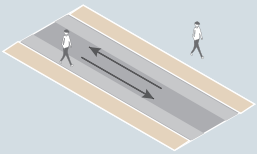
車の走る方向を限定し、歩行空間を確保する



4. トランジットモール

歩道幅員：1.0~2.9m

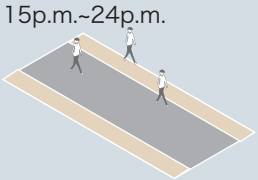
公共交通以外の車両の通行を規制し、歩行空間を確保する



5. 思いやりゾーン

歩道幅員：0.7(+1.0)m

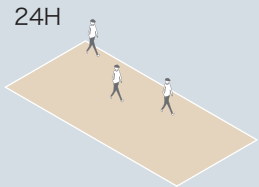
歩道と車道の間にバッファを設け、車の速度を落とす



6. 歩行者天国

歩道幅員：6.8m

歩行者が多くなる時間帯限定で車の通行を規制



7. 歩行者専用路

歩道幅員：6.8m

車の通行を完全に規制し、歩行者のみの空間とする

● 参考事例：長門湯本温泉（上図 2, 狭さくの事例）

山口県長門市の温泉街で行われた本事業は「温泉地再生」という高い目標実現のための公民連携による取組であり、整備範囲は温泉街全域である。河川沿いの道路に狭さく部が 4 か所設けられ、歩きやすい温泉街が実現された。

土木学会デザイン賞より引用

● 参考事例：中尊寺通り（上図 5, 思いやりゾーンの事例）

本事業は、平泉駅から中尊寺に至る補助幹線道路を地域の生活道路、及び駅から観光拠点に至る徒歩ルートを兼ねた歩車共存道路として、整備が行われたものである。縁石を取り除きフラットな路面とするほか、車道を狭く見せる視覚効果を持たせることで（思いやりゾーン）、速度抑制や進入抑制が目指された。

景観・デザイン研究講演集 No.12「中尊寺通りの道路デザイン」より引用

▶ 出逢い通りの沿道空間

出逢い通りを豊かなそぞろあるきの場にするには、道路だけではなく、沿道も豊かにしてゆく、あるいは、協力してゆく必要がある。沿道には旅館や店舗が立地している。これらを実現するために、(1) 可能な範囲で沿道建物を再生する際は、セットバックして、歩行者が利用できる空間を確保すること、(2) 軒先空間や駐車場の一部などを利用したポケットパーク等を設置して、歩行者の居場所を創出すること（モバイルツールも設置できる）、(3) 沿道の建物も、接地階については、できるだけオープンにして、歩行者空間と一体となるように工夫することなどが考えられる。

図　出逢い通り沿道空間の活用イメージ

▶ 夜間景観の創出

歩きたくなるみちを演出するために、夜間景観（街路灯や照明、明るさなど）の検討を行い、あるきやすい夜間の場の創出も考えられる。また、出遭い通りと同様、古奈温泉も夜間景観の演出に取り組むことで、そぞろ歩きができる時間を地域全体で伸ばすことができると考えられる。参考事例は次ページで紹介する。

▶ そぞろ歩きができる出逢い通りを目指す

そぞろ歩きができる出逢い通り

- 歩きやすい道（安全性）：歩道を広げて自動車の速度を抑制し、観光客や住民が安心して歩くことができる道路
- 歩きたくなる道（目的・地域性）：軒先や駐車場の一部においてモバイルツールなどを活用し、立ち寄りたくなる沿道空間を創出

5-2-3 そぞろ歩きできるみちを生む

古奈温泉周辺

古奈温泉には旅館が集積しており、さらにみちには石畳が敷かれていて、温泉街らしい雰囲気がある。その一方で、県道沿いから古奈温泉があることが一見わからなかったり、古奈温泉の周囲が歩道がなくて歩いて危険といった課題がある。そこで、それらの課題を解決しながら、古奈温泉にとどまらず人がそぞろ歩きするみちとするために、入り口の誘導、石畳風舗装の拡張、照明景観の形成などが考えられる。

そぞろ歩きができるあやめ小路

- ヒューマンスケールな路地を生かし、滞在性を高める
- 県道からあやめ小路の存在を認識させ、誘導する
- 古奈温泉の長い歴史を発信　源氏山や七福神巡りへ誘導
- 県道沿いの空き家をセットバック、歩行者の安全性を向上

図　古奈温泉周辺の活用イメージ

● 参考事例：長門湯本温泉（足元灯篭の事例）

長門湯本温泉の再生事業では、照明計画がまちの全エリアにわたって検討された。新しく創るランドスケープのそれぞれの特徴を活かした照明計画と、既存の河川の魅力を活かす橋梁や河川内へのあかり、イベント時には賑わいに寄与し、日常でも温泉街らしさを感じさせるあかりなど総合的な計画が立てられた。オリジナルデザインの大型鋳物行灯をはじめ、竹林をライトアップする LED 投光器などすべての照明は調光制御されている。

竹林の階段
出典：長門湯本温泉公式 HP

うらみち

表の道路の幅員が広くないこともあり、裏側を通っている「うらみち」を歩行者のそぞろあるきのみちとすることも考えられる。特に、県道 130 号線（順天堂病院から温泉駅）の裏側の道は、病院と結節点をつなぐみちとして重要な動線になりえるため、歩行者があるきやすくする高質化や、「グリーンスローモビリティ」の利用などのあり方が考えられる。

そぞろ歩きができるうらみち

みち整備
→歩きやすい、歩きたくなるみちに変える
・照明　・植栽　・モバイルツール
・サイン　・舗装

モビリティ
→徒歩以外の選択肢でつなぐ
・グリーンスローモビリティ
・シェアサイクル

図　うらみちの活用イメージ

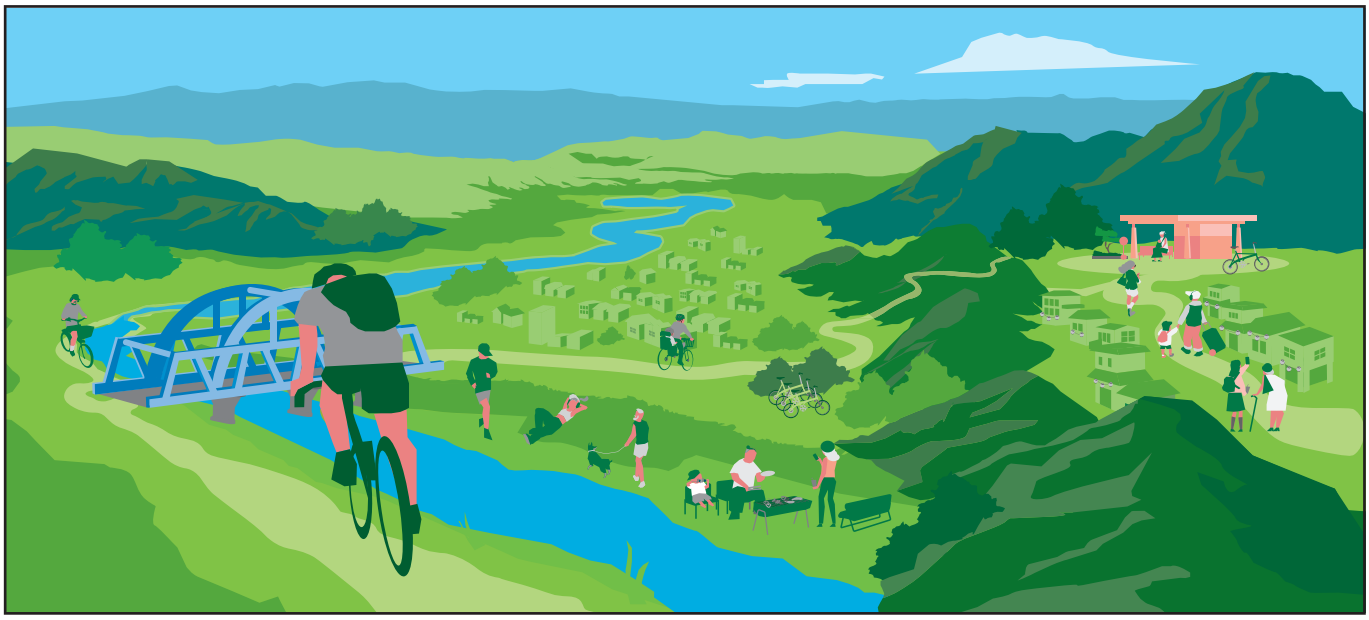
● 参考事例：グリーンスローモビリティ（モビリティ）

グリーンスローモビリティ（通称：グリスロ）とは時速 20km 未満で公道を走ることができる電動車を活用した小さな移動サービスのことである。目的地となる各施設（駅、市役所、温泉街、順天堂大病院）の距離が離れている伊豆長岡地区において、グリスロによって各地点をつなぐことによって、車の運転や長距離を歩くことが困難な高齢者や子供、観光客をサポートし、よりこのエリアの回遊性を高める。

出典：備前市公式 facebook

5-2-4 狩野川を活かすバイカブルなまちづくり

目標項目											
交通安全性	ユニバーサルデザイン	公共交通利便性	目的性	回遊性	交流性	快適性	生活圏の構築	健康まちづくり	多様性	都市活力の向上	地域性



伊豆の国市におけるバイカブル

狩野川沿いはサイクリングロードとして一般認知されているものの、「3-3 バイカブルリサーチ」で行った狩野川沿いにおける自転車走行環境調査では「自転車に乗りやすい」とは言えない結果であった。一方で、自転車には、環境負荷の低減や災害時の交通機能維持等の課題に対する機能、小回りが利くことや移動距離の調整がしやすいという自動車と徒歩との中間的な移動手段としての機能を持っている。

それら機能を活かして、狩野川沿いを骨格とした「自転車に乗りやすい」環境づくりと、「自転車に乗って楽しい」環境づくりというバイカブルなまちを目指し、自転車利用促進施策を提案する。

バイカブルの実現に向けた取り組み

取り組み①

狩野川沿いの自転車走行環境整備

・狩野川沿いを安全でスムーズに走れるようなサイクルルートとなる自転車走行環境整備

取り組み②

サイクルステーションの整備

・サイクルルート上に駐輪・休憩できる場所を整備

取り組み③

サイクルステーションを核としたまちとの連携

・ウォーカブル・バイカブルのハブとなる場所を整備

ステップ④

まちなかの自転車走行環境づくり

・狩野川沿いのサイクルルートに接続する自転車ネットワークを検討

ステップ⑤

自転車利用のきっかけづくり

・自転車に乗るための目的となるソフト施策の立案
・沿道事業者等との連携　等

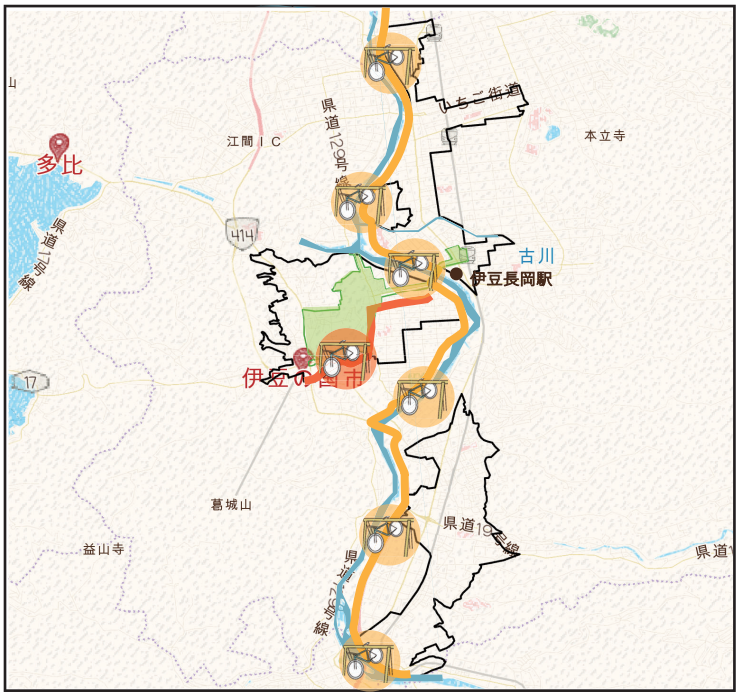


図　検討での対象地

伊豆の国の日常に寄り添う、自転車まちづくり

「3-3 バイカブルリサーチ」の通り、狩野川沿いにおける自転車走行環境調査において、橋詰における自動車との平面交差や一部車道を通行する必要がある等、現状では「自転車に乗りやすい」とはいえない結果であった。また、アンケート調査では日常的に自転車に乗っていない人が多い一方で、狩野川沿いで自転車に乗ってみたいという意見が多い結果であった。以上を踏まえ、ここではこのような伊豆の国市の自転車走行環境を改善し、狩野川沿いを安全で居心地が良く、日常的に走りたくなる自転車走行環境にするための整備を提案する。

狩野川沿いを骨格とした自転車走行環境整備

前述の通り、狩野川沿いはサイクリングロードとして一般に認知されているものの、日常的に市民に使われていない状況である。ここでは、狩野川沿いを骨格とした自転車走行環境整備について提案する。

ステップ１（短期）では狩野川沿いを右岸、左岸側のいずれかで安全に走行可能な状態を目指す。自転車走行環境調査の結果に基づき、自転車走行環境が比較的に良い区間（B 評価以上）を通行するルートを選択し、車両と並走する区間等といった一部走行が困難な区間を車両通行規制等のソフト整備により対処する。

ステップ２（中期）では回遊性をより高め「まち」と連携した状態を目指す。拠点施設を走行できる新たなルートとして人道橋整備や狩野川沿いの拠点や「かわ」と「まち」のハブ空間として、サイクルステーションの整備やかわまちづくりの展開等といった小～中規模のハード整備を行う。

ステップ３（長期）では更なる自転車走行環境の向上と「まち」との連携が深まる状態を目指す。橋の老朽化に伴う架替時等の大規模整備に合わせた平面交差の解消等の整備を行う。

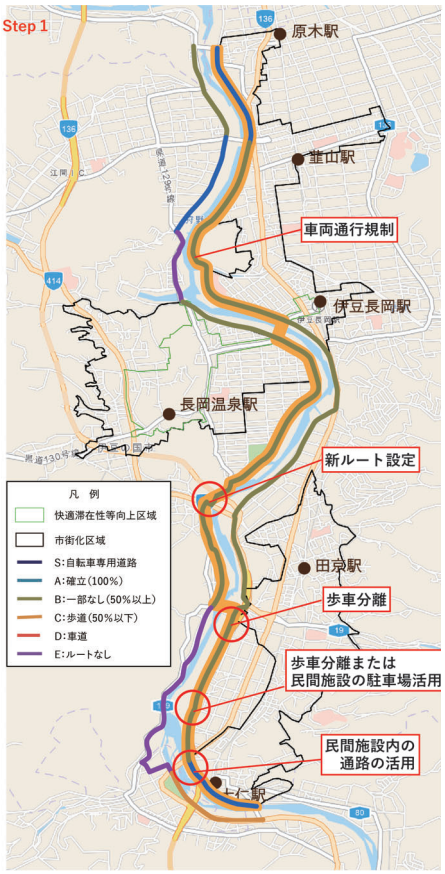


図　ステップ１（短期）のルート

図　ステップ２（中期）のルート

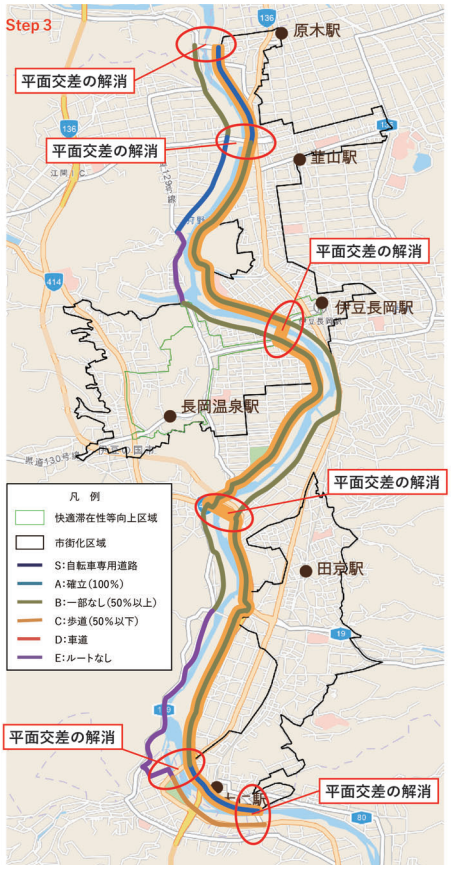


図　ステップ３（長期）のルート

5-2-4 狩野川を活かすバイカブルなまちづくり

サイクルステーションの整備

狩野川沿いの自転車道整備に合わせて、狩野川沿いの主要な場所に駐輪や休憩等ができるサイクルステーション * を整備することによって、狩野川沿いでの駐輪や休憩ができ、市内の広い範囲に点在している魅力的な場所への立ち寄りや自転車利用者が休める場所による自転車走行環境及び回遊性の向上に寄与することが考えられる。

* サイクリングで楽しむ方や移動手段として自転車を使う方が、自転車に乗っている途中で休憩やトイレ等のために気軽に立ち寄ることができるスポットで最低限の機能（自転車置場（シェアサイクル含む）、ベンチ、トイレ）を有するもの

▶ サイクルステーションの「設置箇所」と「ターゲット」を設定

サイクルステーションを設置する場所については、「既に自転車置場やベンチ、トイレ等の最低限の機能がある」、「公園（市民利用が多い箇所）」、「観光施設（観光客が多い箇所）」等の基準の基、設置箇所の選定を行った。

また、実際にサイクルステーションを利用するターゲットを設定するにあたっては、自転車利用者の分類を行い、自転車利用のイメージを表１の通り具体化を行った。各ターゲットがどのような自転車利用及びサイクルステーションを求めるかを整理した上で、導入機能を検討する。

表１　ターゲットの自転車利用イメージ

	ターゲット	移動範囲	利用イメージ
A	市民	日常生活圏	通学、通勤、買い物（日常的な利用）
B	観光客、市民	市内広域	健康づくり、散策、観光施設間の移動
C	サイクルツーリスト	市内外広域	長距離サイクリング、スポーツ

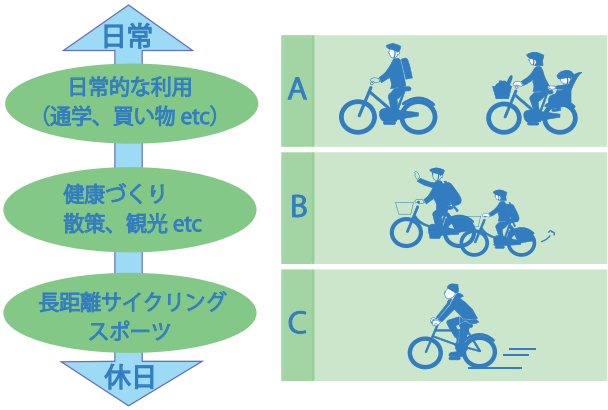


図　自転車利用者の分類

サイクルステーションに導入する機能については、既存の設備（トイレ等）がある場所や周囲の施設（公園や観光施設、駐車場等）を考慮して検討する。

また、各サイクルステーションの設置箇所とターゲットとの関係性を表２の通り整理した。ターゲットが多いほど、求められる機能（活動）も多様になるが、最小限の機能から整備し、段階的に多様な活動を受け入れる場所を目指す。

表２　ターゲットと各サイクルステーション設置箇所の関係

サイクルステーション設置箇所		主なターゲット	機能性
千歳橋周辺	伊豆長岡駅と伊豆長岡温泉の結節点	A、B、C	大
狩野川神島公園周辺	道の駅「伊豆のへそ」の近く		
北条氏邸周辺	歴史遺産や自然豊かな環境がある	A、B	中
大仁駅周辺	伊豆の国市の南端に近い場所	A、C	
リバーサイドパーク周辺	地元住民の利用が多い公園の近く	A	小
松原橋周辺	自転車道整備の北側の端点	C	

図　サイクルステーション設置

サイクルステーションを核としたまちとの連携

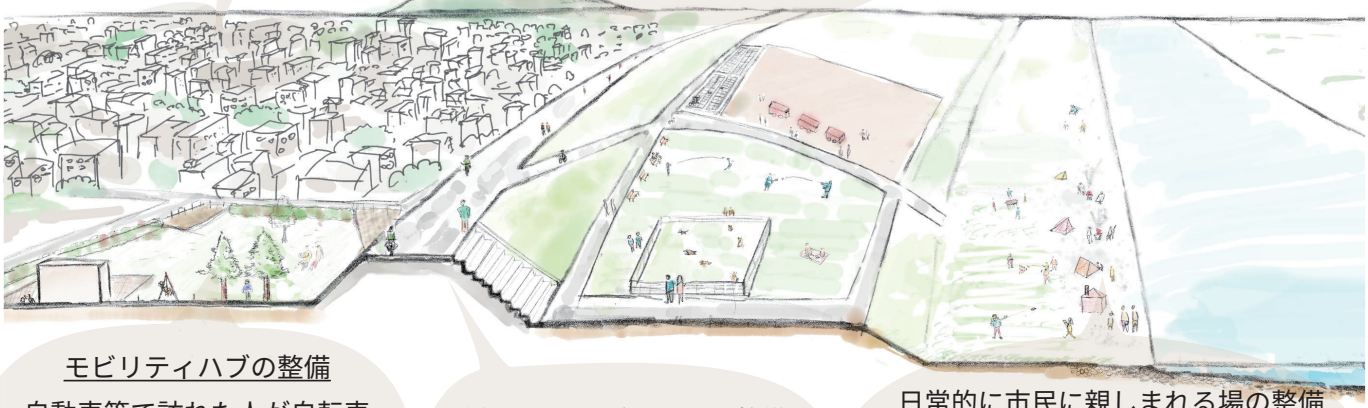
狩野川沿いにおけるサイクリング環境整備やサイクルステーションの整備が進んだ段階で、次のステップとして人々の回遊性をより高め「まち」と連携するために、ウォーカブル・バイカブルの「ハブ」となるサイクルステーションの整備を提案する。このサイクルステーションはサイクリングの目的地、もしくは起終点となるよう人々が訪れたくなる魅力的な場所作りを目指すため、かわまちづくりと連携した整備を行う。

具体的には、伊豆の国市かわまちづくりの基本方針を踏まえつつ、市民へのアンケート調査により得られたニーズを反映したサイクルステーションを河川空間整備に伴い設置することで、歩行者や自転車利用者、観光客や市民など皆が楽しめる場かつ防災機能を持つ場を検討する。

サイクルステーションの設置
自転車利用の拠点となる場を整備する。

ハブ空間となる場の整備
広い堤防と、河川とサイクルステーションを一体とした憩いの空間を創出することでまちと川、自転車と歩行者を繋ぐ。

防災機能の整備
河川とサイクルステーションを一体として、防災機能の強化、防災拠点としての整備を行う。



モビリティハブの整備
自動車等で訪れた人が自転車に乗り継げるように、サイクルステーションにモビリティハブを整備する。

サイクリングロードの整備
快適な自転車走行空間を整備する。

日常的に市民に親しまれる場の整備
カフェ等の仮設飲食施設、アウトドア広場、ドッグラン駐輪場、BBQ 場など

● 参考事例：美濃加茂かわまちづくり（岐阜県美濃加茂市）

周辺地区と木曽川の親水空間との周遊性を確保し、河川空間の更なる賑わい創出のため親水護岸等の整備が行われた。拠点となるリバーポートパーク美濃加茂では BBQ 用品やレンタサイクル等の貸出を行い、供用開始後の利用者は前年よりも大幅に増加している。

ミズベリング HP より引用

● 参考事例：石巻地区かわまちづくり（岩手県石巻市）

東日本大震災で壊滅的な被害を受けた当地域にて、旧北上川の堤防整備と合わせてかわまちづくりを実施した。旧北上川右岸「中央地区」では石巻市の「水辺の緑のプロムナード計画」「かわまち交流拠点事業」と連携し、堤防と建築を一体空間として整備しており、様々な利活用がなされている。

土木学会デザイン賞より引用

北上川下流河川事務所 HP より引用

5-2-4 狩野川を活かすバイカブルなまちづくり

まちなかの自転車走行の空間・環境づくり

▶ まちなかの自転車走行環境整備の位置づけ

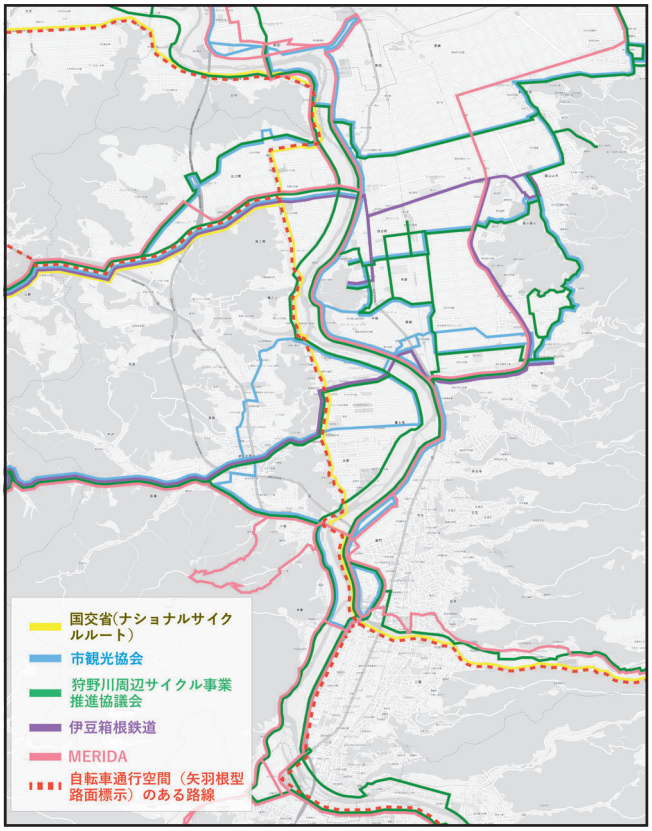
伊豆の国市全体をバイカブルにし、市民が日常生活の中で自転車を利用できるようにするため、前頁までの狩野川沿いの自転車走行環境環境整備に加えて、まちなかにおける自転車走行環境もあわせて整備することを提案する。市民がかわに、サイクリストがまちにアクセスしやすい環境を整備するために、南北の広域移動の主軸である狩野川沿いのサイクリングルートに接続するような形で、まちなかの走行空間を整備する。

まちなかの自転車走行空間・環境づくりの例
- 自転車通行空間の確保（道路再配分や路面標示等）
- バリアの除去（舗装整備等による段差・がたつき解消）
- シェアサイクル、サイクルポート等の充実　　等

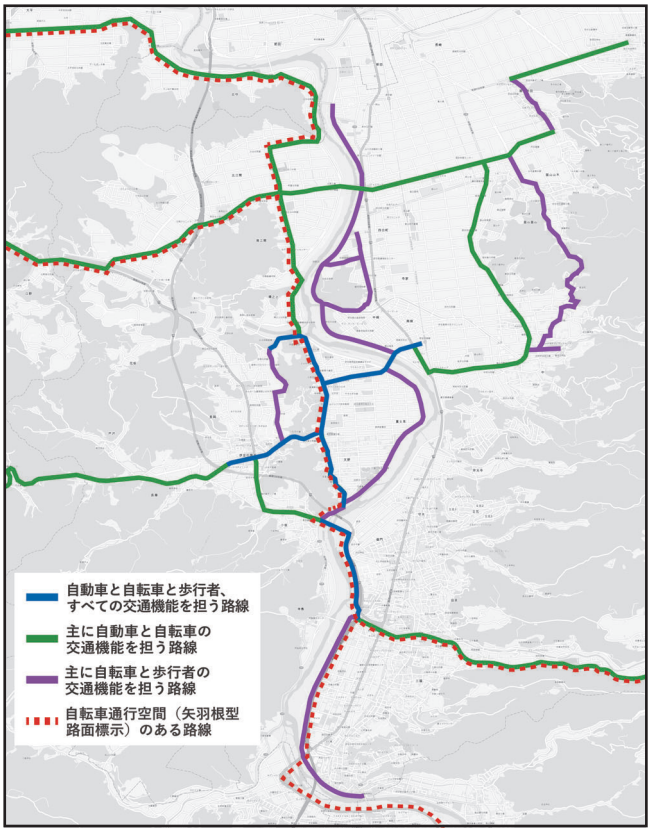
▶ まちなかの自転車走行環境整備に向けた自転車ネットワークの検討

自転車走行空間の整備にあたっては、まちなかのバイカブル化を図る路線を選定し、「自転車ネットワーク」のあり方を検討する必要がある。本ビジョンにおいては、既存の自転車通行空間の整備状況や各主体の提案するサイクリングルートを重ね合わせ（図１）、自転車ネットワークの一例（図２）を検討した。

限られた幅員しか持たない各路線の整備方針（自動車交通やウォーカブルとの関係性のあり方、周辺道路との役割分担等）については、自転車ネットワークのあり方を含めて今後さらに検討を深めていくことが必要である。



【図１】各サイクリングルート重ね図



【図２】自転車ネットワーク検討例】

出典：各主体発行のサイクリングマップより作成

補足事項	市内の既存の自転車通行空間やサイクリングルートについて

- 市内の既存の自転車通行空間は、図１の赤線に示す路線（国道や県道の一部）にて、矢羽根型路面標示の整備がなされている。
- 伊豆の国市では、自転車利用に関して、図１に示すような多様な主体がサイクリングルートを作成している。

市民の自転車利用の促進

▶ ソフト施策による市民の自転車利用促進

市民の自転車利用を促進するためには、自転車で快適に走行するための環境・空間づくり（狩野川やまちなかの自転車走行環境整備）と、自転車に乗る目的・きっかけづくり（ソフト施策）の両方からの働きかけが必要であると考える。本ビジョンでは、市民の自転車利用の気運の醸成やライフスタイルの変化等の効果を期待し、以下のようなソフト施策の取り組みを提案する。

▶ 自転車利用促進施策「自転車走行距離のポイント化」

本市における自転車利用促進のための施策として、以下を提案する。

「自転車走行距離のポイント化」

- 自転車移動距離を計測するスマホアプリ等を開発
- 自転車の移動距離に応じてポイントを付与し、貯めたポイントは、市内協力店での利用や景品抽選への応募等にて還元
- 移動距離に応じた走行ポイントの他、観光拠点やサイクルステーションへ訪れた際の地点ポイント、お散歩市等の市内イベントに参加した際のイベントポイント、他のアプリ利用者と交流した際の交流ポイントなど、様々なポイント導入を検討
- 観光客・サイクリストも利用でき、市内での滞在を促すような仕様を検討

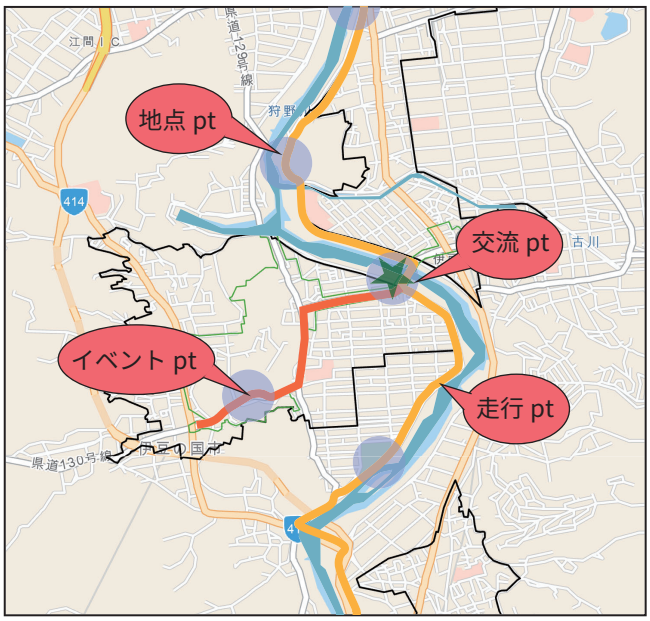


図　自転車利用促進施策の全体像

● 参考事例：市民の自転車利用促進の取組

「ビワイチサイクリングマイレージ」

滋賀プラス・サイクル推進協議会は、県内各地の観光地等への観光周遊を促進するため、アプリを活用した健康マイレージの取組を実施。走行ポイントや地点ポイントを貯め、貯まったポイントを使って景品に応募できる。

出典：滋賀プラス・サイクル推進協議会 HP より引用

「福井市自転車利用サポーター」

福井市は、自転車を活用したまちづくりを推進するため、自転車利用の普及啓発に積極的に取り組む企業・団体を「自転車利用サポーター」に認定。自転車通勤手当の支給等、企業が従業員にインセンティブを与える取組例も。

出典：福井市 HP より引用

5-2-5 モバイルツールを活かして「場」をつくる

目標項目											
交通安全性	ユニバーサルデザイン	公共交通利便性	目的性	回遊性	交流性	快適性	生活圏の構築	健康まちづくり	多様性	都市活力の向上	地域性

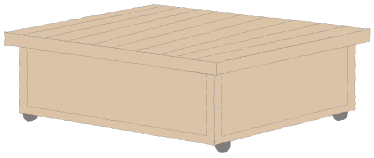
モバイルツールとは

モバイルツールとは、簡単に設置・移動できるストリートファニチャーである。まちなかの使われていない空間にモバイルツールを設置することで、気軽に人々の居場所をつくり、景観的にもまちを豊かにする効果が期待できる。また、比較的安価で特別な技術がなくとも製作できるため、複数制作することも可能である。

伊豆長岡の課題として、誰もが気軽に立ち寄れる場の不足が挙げられる。旅館のように観光客が長時間滞在するための施設は充実している一方で、短時間滞在できる場は多くないのが現状である。モバイルツールは、そんな伊豆長岡に人々の居場所を生み出すことができるという点に意義がある。

安く作成できる⇒量産可能！

仮設的に場を生み出せる！



モバイルツールの概念図

簡単に組み立て可能⇒誰でも扱える！

容易に動かすことができる！

● 参考事例：EMMAs Hoftour（ドイツ）

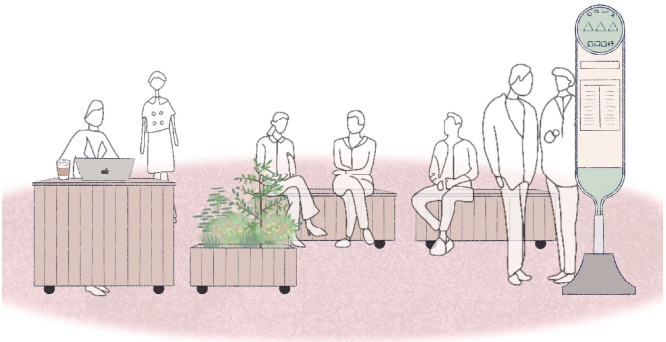
移動可能な車輪付きテーブルをワークショップ、レクリエーション、キッチン、オフィス、運搬、展示など様々なに応じて使い分けているドイツの事例。まちなかの公共空間を巡りながら、居場所としての可能性を可視化している。企画には地域住民も積極的に参加している。

出典：EMMAs Hoftour 公式サイト
https://emmashoftour.bfh.ch/

モバイルツールから生まれる場

伊豆長岡エリアには、その地域で暮らす住民のほかにも観光客、順天堂病院の従事者や患者など様々な世代、所属の人々が存在しているが、各々が別の時間帯や場所で過ごしているため、普段は交わることが少ない。また、ほっとすぽっと（5-2 で前述）をはじめとし、人々の活動の土壌になりうる空間資源も多く存在しているものの、こちらもうまく使いこなされておらず、人々の活動や交流が十分には見えていない空間も多く存在するのが現状である。そんな伊豆長岡エリアにおいて、気軽に場を生み出すことのできるモバイルツールは、人々の活動が交わる触媒になる可能性がある。多様なモバイルツールが普及するとまちなかにどういった空間が生まれるのか、具体的なイメージを下に示す。

ちょっとした空間がオープンテラスに



バスを待ちながら談笑やデスクワークができる

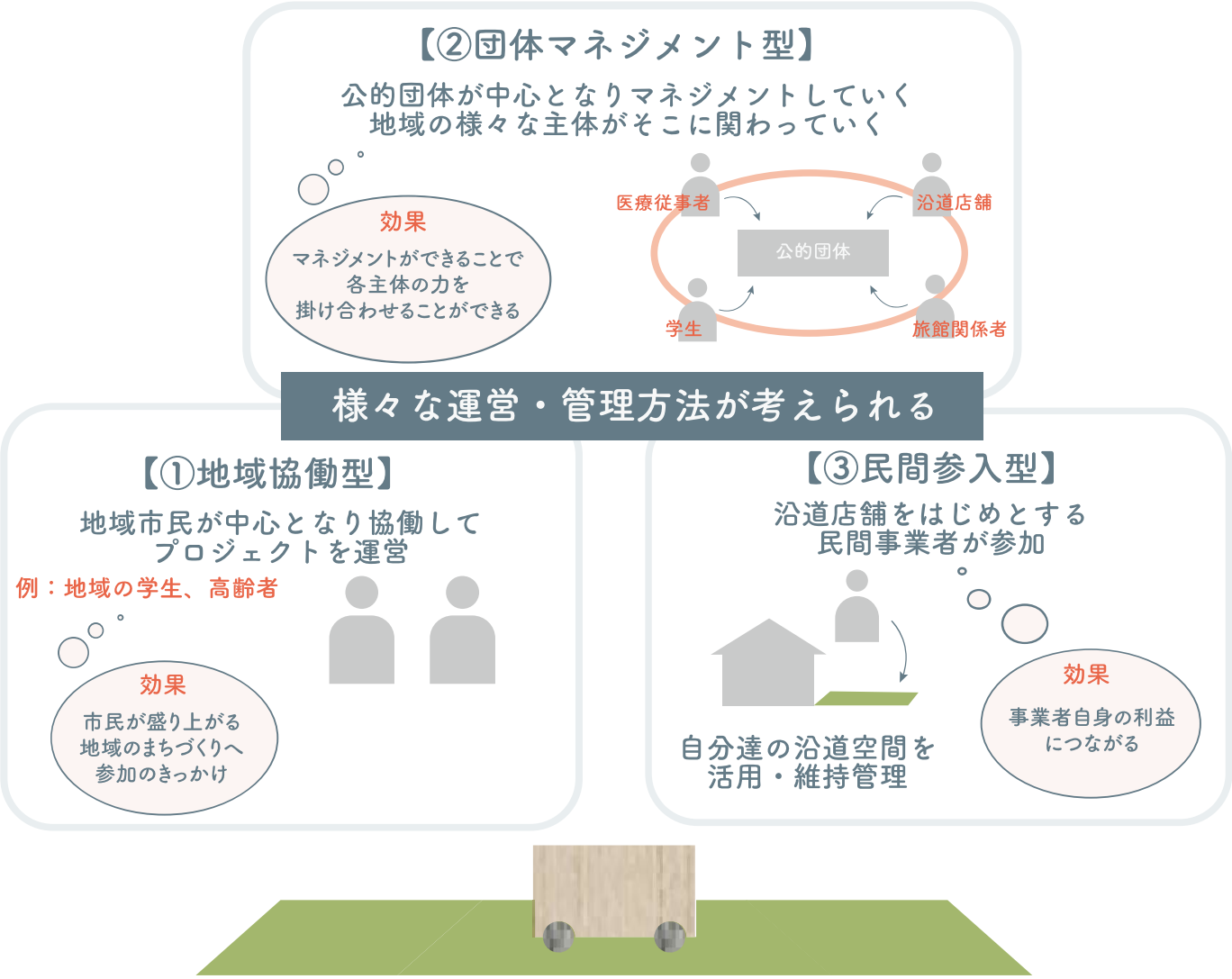
モバイルツールが普及し、伊豆長岡全体で活用されていくイメージを以下の図で示した。5-2 で紹介したほっとすぽっとをはじめとしたまちなかの様々な公共空間でモバイルツールによる「場」が、らに単一的なものではなく、同時に複数個所で生み出されることで伊豆長岡がまちじゅう楽しく歩ける場となり、歩行意欲の増進にもつながる。

図　モバイルツールを活用したほっとすぽっとの活動例

5-2-5 モバイルツールを活かして「場」をつくる

▌モバイルツールのシステムとその効果

このモバイルツールプロジェクトを実現するためには、そのシステムについても検討する必要がある。また、そのシステムを考える際、実施主体を誰に設定するかによって、その結果も異なってくると考えられる。ここでは、モバイルツール実施のタイプとして 3 つのパターンを提案し、事例と合わせてそれぞれのパターンで考えられる効果を提示する。



モバイルツールの運営・管理の方法パターンを示した図

●【タイプ例①】地域の学生と協働する～モバイル屋台で高校生とのコラボ出店～

モバイル屋台活用の第１弾として、2023 年 6 月のお散歩市にて伊豆中央高校の家庭部とコラボし、洋菓子の販売を行った。この取り組みは口コミによって広がり、多くの方が訪れる結果となった。お散歩市後には、モバイル屋台を動かしながら他の出店者にも洋菓子を配り、地域住民同士の交流も活発に行われた。

このように地域の子供たちがまちづくりに関わることは地域の活気に大きく影響すると考えられる。

●【タイプ例②】市民参加で公共空間を創る～横浜市ストリートファニチャーコンペ～

横浜市では、「まちを楽しくするストリートファニチャーデザインコンペティション」が開催されている。このコンペは、“まちづくりについて地域の皆様と一緒にアイデアを出し、街の活性化につなげる”を目的としている。そして、優秀賞のアイデアは制作し、公共空間に設置する。

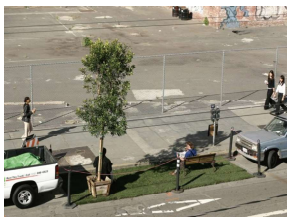
このように、行政がサポートしながら、市民の意見を吸い上げ、アイデアを反映させたモバイルツールをまちなかに配置することも考えられる。

第6回（2023年）のコンペでは、街に馴染みながら犬と人間がともに座れる椅子が採用され、制作された。
出典：https://streetfurniture.jp/

●【タイプ例③】：沿道店舗が主体的に「場」を創る～パークレット～

サンフランシスコ市におけるパークレットでは、沿道の人が自身の店舗等の沿道空間を活用していいかを行政に許可を取り、そのデザインや管理も市民協働で行う。沿道空間を豊かにすることで店舗利用者が増えるといったメリットがあるからだ。この仕組みを参考にして、市民それぞれが自身の沿道空間に必要なものをモバイルツールにデザインし、空間の管理を行うことも考えられる。

沿道店舗が沿道空間の延長としてパークレットを管理している。



路上駐車場に人工芝を敷き植栽やベンチを置く事でそこを人間の居場所にする。

出典：San Francisco Planning Department
https://sfplanning.org/

▶ モバイルツールの活用ステップ

ウォーカブルなまちの実現のために、上述のシステムに加え、モバイルツールを活用していくステップを以下に示す。

現在

まずは
小さいところから
モバイルツールを
普及させる

→

モバイルツールを
上手く使って
まちを盛り上げる

→

店舗や道路が整備された
魅力的なまち

住民や観光客が
屋外空間を使い倒す

→

目指すまち

そとに出て活動したくなるまち
歩いて楽しいまち
様々な出会いがあるまち

モバイルツール活用の最終目標

様々な人が気軽に屋外を使っている

1．常に屋外に出しっぱなしになっている状態
2．モバイルツールパーク（倉庫）があり、そこから必要な時に取り出せる状態

まちのハード整備につながる

各所で、モバイルツールを活用して社会実験が行われ、ハード整備の方向性を定めていく
ex）道路整備、かわまちづくり、空き家活用等

5-2-5 モバイルツールを活かして「場」をつくる

実施事例	伊豆長岡で実装しているモバイルツール

▶モバイル足湯～ 人々が集い、談笑する場を作り出す～

地中の配湯管からひいた源泉を使用した移動式の足湯。このモバイル足湯の設計・制作は、伊豆長岡出身でサウナ・スパ健康アドバイザーの資格を持つ伊藤まゆみさんをはじめとする数名によって行われた。2021 年には伊藤さんがリーダーを務めるソトノバ「モバイル足湯クラブ」が発足し、社会実験の実施を通して足湯を用いた場づくりの実践を展開していくことを目指している。

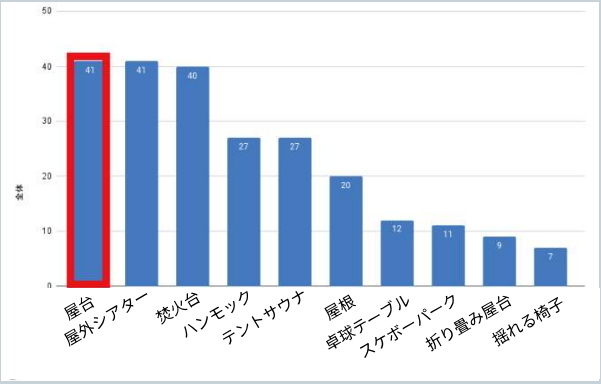
伊豆長岡では、このモバイル足湯を毎月のお散歩市時に出逢い通りに設置し、子供からお年寄りまで幅広く利用されている。

▶ モバイル屋台～カフェや立ち飲みができ、人を引き寄せる～

コンパクトな形状と、トレードマークの大きな車輪により、1 人でも容易に動かすことができる屋台。台の部分は伊豆の国市の廃木材を再利用し、車輪は地域にある自転車ショップ MERIDA さんの使わなくなった自転車の車輪を提供いただき、使用している。地元の高校生や地域の飲食店とのコラボ出店や、チャレンジショップとしての試用を開始している。この屋台を徐々に増やすことで、屋台が並び温泉場の街並み向上や、住民や観光客の目的地の創出を目指している。

● どんなモバイルツールが欲しい？

2023 年 3 月のお散歩市にて、モバイルツールに関する来場者を対象としたワークショップを実施した。横浜国立大学の学生による 10 個の提案の中から、ミライ広場に何が欲しいか投票してもらい、最多票を獲得したモバイル屋台の作成が決定した。このように現地の方々の声を聞き、実際に使ってもらえるモバイルツールを目指している。



▶ モバイル縁側～時に休憩したり、談笑したりする場を作り出す～

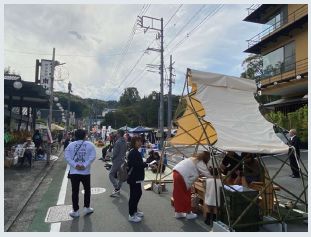
気軽に腰掛けることができる縁側。高さが低めで子供やお年寄りも容易に座ることができる。座面部分は開閉可能な形状とし、十分な収納機能も備えている。大きさは３人程度横に並んで腰掛けることができる大きさに設計した。

▶ モバイルデスク～遊・働・食…様々な活用が考えられる～

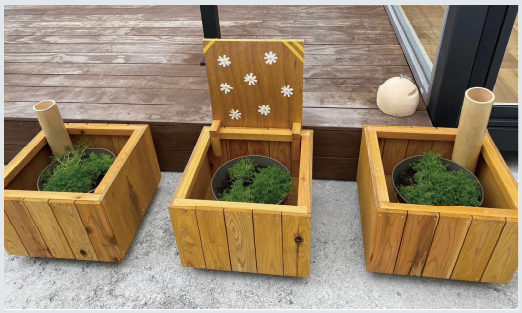
両サイドを展開してデスクとして使用し、動かす際にはこれをたたみ、コンパクトに移動できる。コンセントタブを取り付け、ちょっとしたワークスペースとしても利用可能。また、イベントの時に卓球台として使用するなど、遊び場としての活用も検討している。

▶ モバイル屋根～日や風をよけ、快適な場を生む～

伊豆長岡エリアに日陰を増やし、快適な滞在空間をつくるために考案したモバイル屋根。骨組みには伊豆長岡の竹材を使用している。竹をしならせ、コンクリートブロックで固定することで屋根としての形を支えている。



▶ モバイル植栽～緑が増え、まちなかが彩られる～



プランターをはめ込むことで各所に緑を配置することができるモバイル植栽。お散歩市等のイベント時には会場づくり、日常的にはまちに緑が増えて街並みがより良くなるといった効果が期待できる。

また、地域住民が花や野菜の成長を見守ることができるなど、植栽を通じた新たな地域コミュニティの形成に寄与する。

5-2-6 暮らしの中でウォーカブルなまちをはぐくむ

目標項目											
交通安全性	ユニバーサルデザイン	公共交通利便性	目的性	回遊性	交流性	快適性	生活圏の構築	健康まちづくり	多様性	都市活力の向上	地域性

ウォーカブルなまちづくりは、行政や誰かが推進してくれるものではなく、利用者や市民も含めて、一緒になって「はぐくむ」ことが大切である。特に、日々の暮らしや営みの中で、ウォーカブルなまちづくりにみんなで参画しながら楽しんで進めてゆく方法について考える。

(1) 暮らしのみちプロジェクト

日々の暮らしを支える生活の中のみちについて、地域住民自らが楽しみながら積極的にウォーカブルなまちづくりを進める方法について考える。具体的には、自分の家の前の道路や周辺の道を自分達の手で整備、もしくは利活用することによって、ウォーカブルなみちづくりに参加しながら住民の方が愛着を持つ、そういったプロジェクトである。本プロジェクトの具体的な活動例として、参考事例とともに 2 つ紹介する。

▶ 住宅地でも行うことのできるウォーカブルなまちづくり

このプロジェクトは、自分の家の前や、子供達の通学路など、日常的に利用する場所が「ウォーカブルな場」となるために、生活者も一緒になってはぐくむことのできる場所を検討する。伊豆長岡地区にも以下の地図のように住宅が立ち並ぶエリアが存在しており、このエリアでも行うことのできるプロジェクトを考えてみる。

図 「暮らしのみちプロジェクト」の対象地イメージ

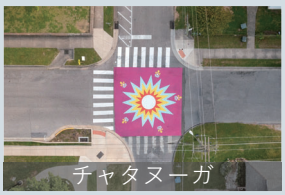
▶［事例 1］住民自らみちを整備する道づくりーアスファルトアートー

アスファルトアートとは、道路にペンキ等を用いてアートを描く取り組みのことである。この取り組みは、L(lighter: 軽く）Q(quick: 早く）C（cheaper: 安く）で市民が楽しんでみちづくりを行うことができ、視覚的な注意喚起による自動車通過速度の抑制や道路のイメージ刷新、街に対する愛着の醸成につながる。1990 年ごろからニューヨークやポートランドで始まった動きであり、近年日本ではペンキのほかにマスキングテープやチョークを用いて取り組まれている。

伊豆長岡温泉街で実施されるお散歩市でも一部アスファルトアートを取り入れている。お散歩市実施中は道を車両通行止めにしており、チョークやテープを用いて子供達が自由に道路を彩っている。

お散歩市でのアスファルトアートの様子

● アメリカのアスファルトアート



出典：Street Plans Collaborative

アメリカでは各地でアスファルトアートが展開されており、道路が鮮やかに彩られている。これにより自動車の速度が低下し歩行者や自転車が安全に通行できるだけでなく、住民の様々な活動がみられるようになった。

▶［事例 2］車道の一部を転用して人のための空間を創るーパークレットー

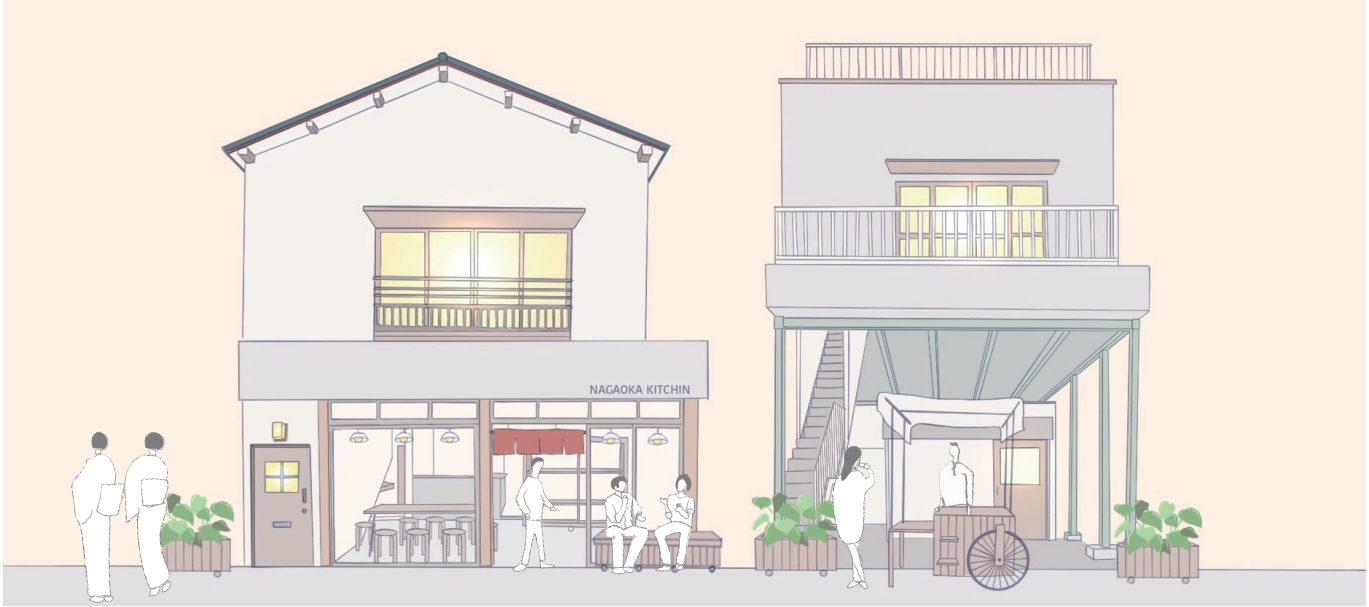
パークレットとは、車道の一部（パーキングメーター等）を転用して仮設構造物を設置し、その上に机や椅子、プランターといったアメニティを配置する取り組みである。生まれた空間で目の前の店舗で買った飲み物を飲んだり、ちょっと立ち止まって話したりと、多くの人が思い思いに道路空間を利用しまちなかに滞在することができる。

● 参考事例：パークレット（サンフランシスコ）

パークレットは、駐車場 1~2 台分のスペースに人々がくつろぐための小さな公園をゲリラ的につくり始めたのがきっかけで、サンフランシスコが発祥。現在では市の制度として位置づけられており、スポンサーが沿道店舗であっても、店舗の利用に関わらず全ての一般市民が利用できるように配慮して運営が行われている。

出典：
https://www.realpublicestate.jp/post/parkingdayparklet/

5-2-6 暮らしの中でウォーカブルなまちをはぐくむ



(2) 空き家・空き店舗プロジェクト

伊豆長岡エリアにおいては、対象地区は古奈温泉街付近と温泉駅周辺、伊豆長岡駅周辺に空き家・空き店舗が分布しており（3-1-11 参照）、いずれも「移動の骨格」沿いに位置していることがわかる。したがって、これらの空き家・空き店舗は比較的立ち寄りやすい位置にあり、骨格の整備とともに検討することで、生活者の新たな目的地の創出につながり、より歩きたくなる道が伊豆長岡に生まれると考えられる。

空き家･空き店舗はばらばらに活用するのではなく、方針を定めて伊豆長岡らしい活用を進めていく必要がある。街がより魅力的に歩きたくなるような空き家・空き店舗活用を考える。

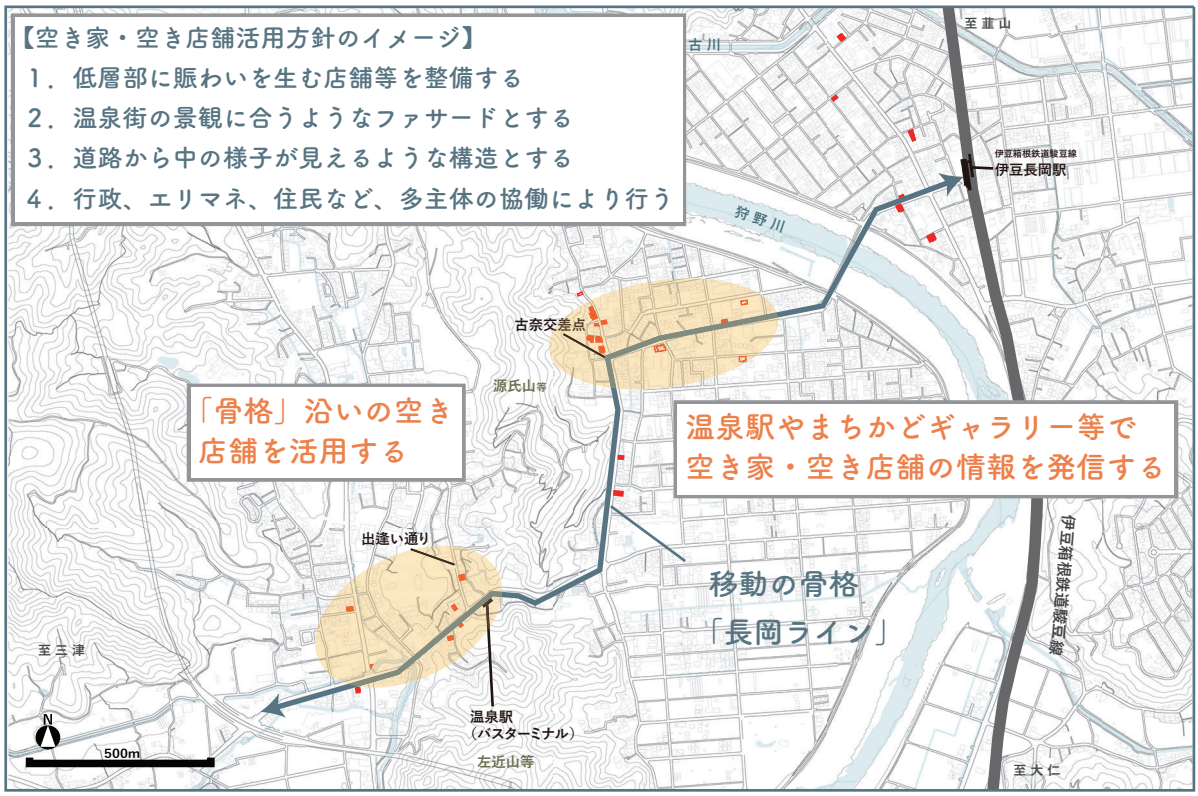


図　伊豆長岡地域における空き家・空き店舗活用方針のイメージ

▶ 空き家・空き店舗活用に関する考え方

空き家・空き店舗活用といっても、その用途には様々な選択肢があり、周辺の環境や人々のニーズなどを複合的に考慮しながら活用を進めていく必要があるが、いきなり改修は難しい場合もある。したがって前述したモバイルツールを用いて実験的、簡易的に空き家・空き店舗を活用しつつ、徐々に本格活用していくようなステップを踏むことが考えられる。

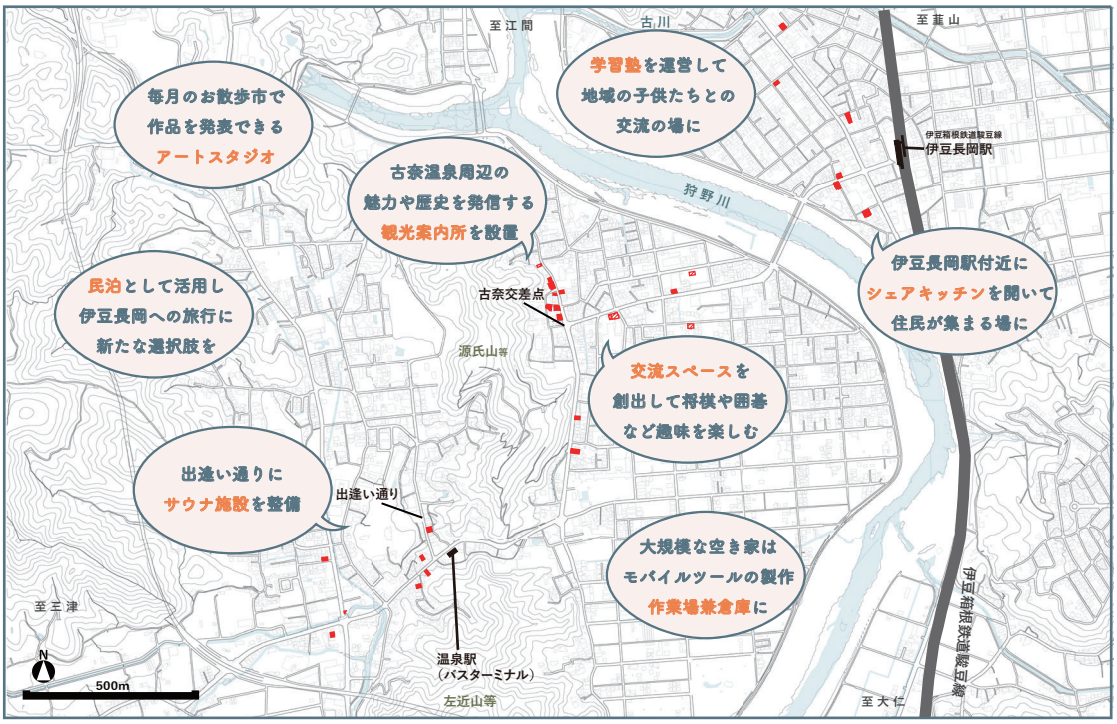


図　空き家・空き店舗活用のイメージ

● 参考事例：長岡賃貸（伊豆の国市）

長岡賃貸

ヨガ会場としての活用

不動産会社と（一社）伊豆長岡温泉エリアマネジメントがコラボした地域イノベーション支援事業の一環として、地域にある空き店舗の「長岡賃貸」が活用されている。空き店舗の状態ではヨガ等のイベントスペースとして使われ、現在はスポーツバーや足湯のあるカフェ等の多様な貸店舗が入居しており、今後も更なる活用の可能性が考えられる。

● 参考事例：藤棚デパートメント（横浜市）

「藤棚デパートメント」は、商店街の中にあった空き物件をシェアキッチンや設計事務所、書店を兼ねた地域のコミュニティースペースとして活用した事例である。キッチンスペースは誰もが使える場所として開放され、日替わりカフェや、料理教室として使われる。またお店をこれから開きたい人に向けたチャレンジショップとしても機能する。地域の新たな担い手や人のつながりの生まれる環境づくりを行うための実践の場となっている。

出典：藤棚デパートメント HP

5-2-6 暮らしの中でウォーカブルなまちをはぐくむ

(3) 健康まちづくりへの展開

伊豆長岡では、豊富な温泉資源の存在もあり、「健康まちづくり」が積極的に進められている。「歩きたい、歩いて楽しいまち」の実現とともに自然と健康になれる環境づくりをあわせて行うことで、多くの市民が自立的に、より活動的に暮らせるまちの実現につながる。なお、ここでいう健康とは、身体的健康だけでなく精神的にも社会的にも満たされた状態のことを指す。

【健康まちづくりを踏まえたウォーカブルなまちづくりのイメージ】
伊豆長岡は、まち全体を巡ることで健康になれるポテンシャルを秘めている。そのモデルを以下に示した。

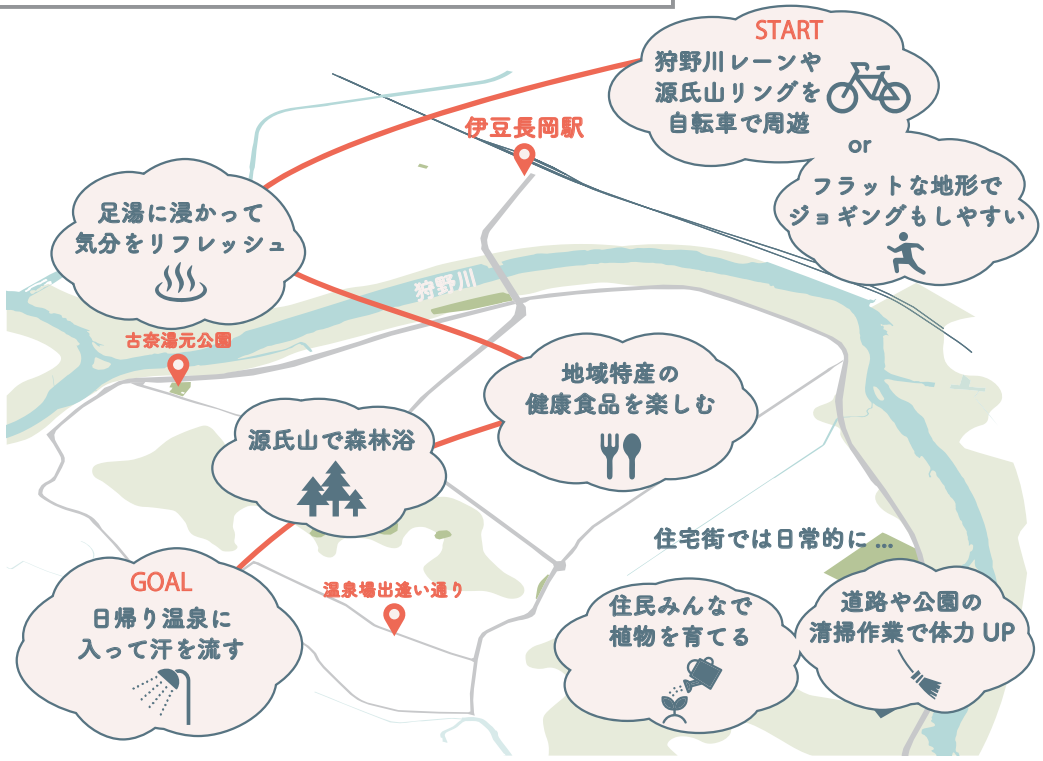


図　健康まちづくりを踏まえたウォーカブルなまちづくりのイメージ

▶ まちなかの標識で健康意識アップ

ウォーカブルの骨格の一つとして挙げた狩野川沿いのサイクルレーンや源氏山リングの整備において、サインと併せて消費カロリー数やの健康指標を記載することで健康まちづくりを推進することが考えられる。これにより、狩野川沿いをウォーキングやサイクリングをすることの意義を見出すことができ、住民一人ひとりのウォーカブル、バイカブルへの意識向上が期待できる。

● 参考事例：WALK&HEALTH KASHIWA-NO-HA

柏の葉キャンパス地域にある高架脇の歩道には楽しく歩ける工夫が施された路面サインが設置され、単調でネガティブな空間になりやすい高架脇空間に変化を与えている。1m 毎の距離表示に加え、その横には「歩数を増やすには…」や「運動をしていますか？」などのメッセージが書かれたサインが並び、QR コードにスマホをかざすと、詳細な情報が見られる。

出典：健康都市・空間デザインラボ

● 参考事例：BAYWALK YOKOHAMA

山下公園、大さん橋、象の鼻パーク、赤レンガ、臨港パーク等の観光名所を信号なしでランニングできる海沿いのコース。スタートからの距離とゴールまでの距離が表示されている。潮風を感じながら横浜のインナーハーバーの観光スポットをまわるコースで、昼の景色のみならず美しい夜景も楽しめる。

出典：ヨコハマ経済新聞

COLUMN　健康まちづくりに関する既存の取り組み

１．いずのくに健康マイレージ

「いずのくに健康マイレージ」は、健康意識を高めて「日々の生活習慣をちょっと良くする」、「地域の行事やボランティアに参加する」、「健（検）診を受ける」など健康につながる実践をすることでポイントを貯め、様々な特典を受けられる制度である。

２．ICOI プロジェクト（Izu Health Care Onsen Innovation Project）

全国でも有数の温泉地である静岡県では、豊富な温泉資源を活用し、食や運動等を組み合わせた伊豆に適した新しいヘルスケア産業の創出と、温泉研究拠点の創出を目指して、令和３年度に伊豆ヘルスケア温泉イノベーションプロジェクト（通称 ICOI プロジェクト）が始動した。プロジェクト推進地域には伊豆の国市も指定されており、エリマネや企業が共同して事業を行っている。

伊豆の国市ではこのほかに、健康づくり活動に関する取組等を積極的に行っている事業者等を募集し、その中から特に優良な取組事例を情報発信することで、健康づくりに対する市民の意識を高め、さらなる健康寿命の延伸を目指している。

これらの既存の取り組みと絡めながら、まちなかを歩いて巡れるような仕組みをつくることが今後求められる。

出典：伊豆の国市 HP

出典：静岡県公式 HP

5-2-6 暮らしの中でウォーカブルなまちをはぐくむ

(4) 源氏山を活かす / 源氏山周辺を回る

源氏山は長岡地区と古奈地区の間に位置する小高い山である。春には桜やあじさい等が楽しむことができ、七福神めぐりのウォーキングコースにもなっている。頂上には展望広場が整備されており、伊豆長岡の市街地を望むことができる。しかし現状は歩く人を見かけることは少なく、豊かな自然資源がうまく活かされていない。

その原因として、入り口がわかりにくいことや登るルートが険しいこと、登る目的がないことなどが考えられる。そこで、「入り口」「登山ルート」「頂上」のそれぞれを改善することで、源氏山を地域資源として捉え直し、活発な利用の促進につながることが考えられる。

①入口

源氏山の入り口はそれぞれ出逢い通り、順天堂病院、古奈もみじ公園、古奈温泉の付近の４か所あるが、どれも普通に歩いているだけでは入り口とわかりにくく、住民でも把握していない人がいるのが現状である。

そこで、将来的には初めて来た観光客でもわかりやすいようなサインを設置し、４つの入り口を明示することを提案する。また、シェアサイクルやサイクルスタンドを設置することで、源氏山リングなどを走るサイクリストなども引き込むことが可能になる。

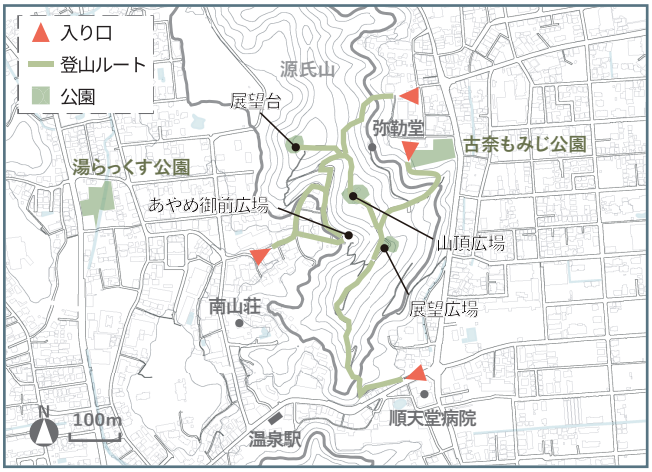
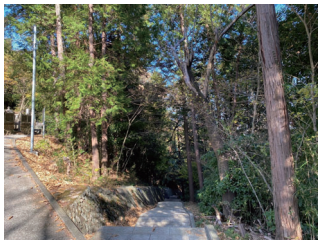


図　源氏山の入り口と登山ルート

②登山ルート

登山ルートは木々が生い茂っており自然を感じられる一方で、勾配があるため子供や高齢者にとっては登るのが難しいのが現状である。またルートには階段があり、自転車で源氏山を登って抜けることができない。

そこで、現状の登山ルートに加えて勾配が緩く自転車でも通れるようなルートを長期的に整備することが考えられる。また、軽食店や自動販売機を設置し、ルートの途中でも一息つけるようにすることで登る際の心理的な障壁を取り除けることも考えられる。



③頂上

源氏山の頂上には展望台があるものの、それ以外の目的性が乏しいため訪れる人が少ないと考えられる。

フォトスポットや BBQ 場などの整備、天体観測やスタンプラリーのようなイベントの開催を通して人々と源氏山の心の距離を縮めることで、源氏山が地域の資源として認識されるようになり、歩く人が増えるのではないかと考えられる。

● 参考事例：INN THE PARK 沼津（沼津市）

Park-PFI を活用し、沼津市立少年自然の家をコンバージョンして誕生したグランピング施設。宿泊だけではなく、映画祭、ウェディング、オーガニックフェスなど様々なイベントを展開し、今まで注目されていなかった自然資源が上手く利活用されている。

出典：INN THE PARK HP

(5) 温泉資源を活かす

伊豆長岡地区には、旅館のほかに足湯や日帰り温泉が多く点在している。しかし、温泉街及び旅館に訪れる観光客は車利用者が多く、温泉を歩いて回ることが少ないと考えられ、点在しているというポテンシャルを発揮しきれていない。そこで、点在する「温泉」という資源を生かし、温泉を求めて人々が地区内を回遊する新たな仕組みを考える。

▶「伊豆長岡温泉　湯めぐり物語」の実績

「伊豆長岡温泉　湯めぐり物語」とは、伊豆長岡地域を盛り上げるべく 2023/9/1~10/31 に実施された。本企画は「弘法の湯」と「おおとり荘」に宿泊した客を対象にどちらの温泉も楽しめる湯めぐり手形を発行し、温泉の魅力を伝えることを目的として行われた。本企画が好評だったことを受け、2024/1/11~5/31 において新たに「頼朝の湯本陣」が参画し、3 施設の温泉が楽しめる企画に刷新された。弘法の湯では、今後も参画施設を増やし、湯めぐり物語が楽しめる街として印象付けることで、地域全体での集客力の強化を目指している。

▶ 伊豆長岡の温泉資源を回遊する

伊豆長岡の温泉資源の回遊を促す具体的な提案として、湯めぐり手形を伊豆長岡における地域通貨として利用することを挙げる。この手形を事前に購入することで、伊豆長岡の複数温泉をお得に入湯することができる。また、各温泉や観光地に用意された独自のスタンプを手形に押すことで、この手形が旅のお土産ともなる。

本提案では、温泉に限らず、この地区の飲食店やお土産屋とも連携することを考える。手形を見せると割引やサービスを受けることができ、観光客がより地区全体を回遊したくなる仕組みとする。

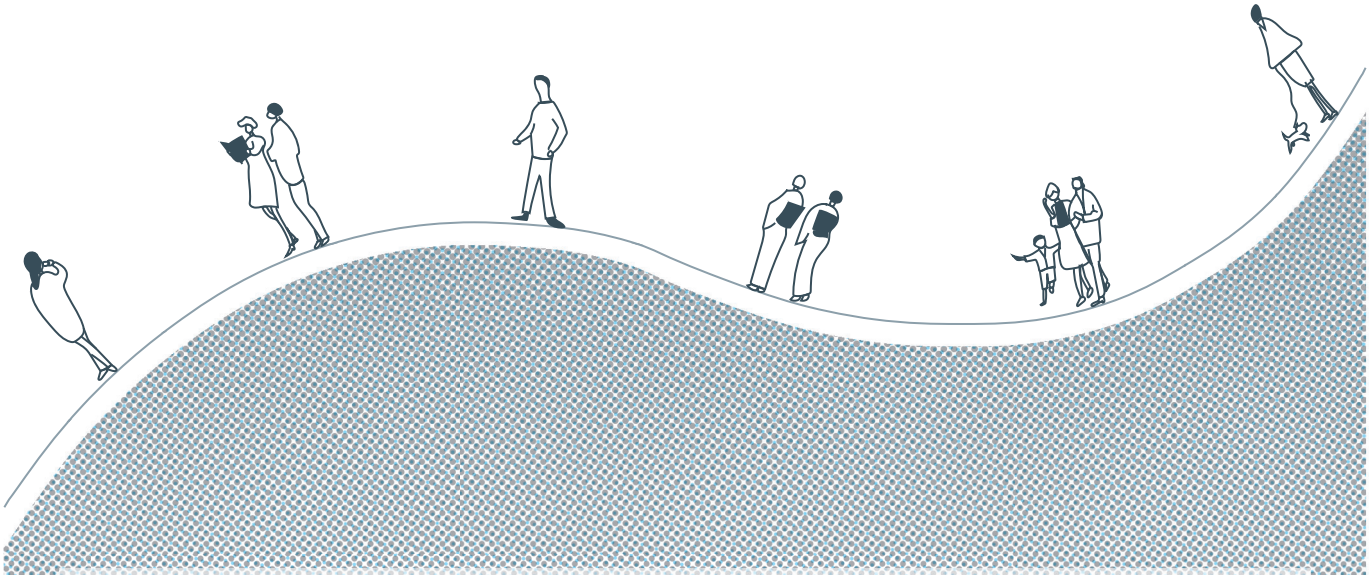
伊豆長岡温泉
湯めぐり手形完成イメージ（案）
※湯めぐり物語の 3 施設を
回遊した場合

図　温泉資源の回遊イメージ

● 参考事例：黒川温泉（熊本県南小国町）

黒川温泉郷では、地域全体で観光客を迎える地域理念をもとに、各宿が持つ露天風呂を自由に巡る「入湯手形」のしくみがある。全 26 か所の旅館の露天風呂の中から、1 枚につき 2 か所の温泉を選んで入浴できる。手形を利用の際に押すスタンプは各旅館の独自のデザインであり、自分だけの手形をつくることができる。

出典：黒川温泉公式 HP



Chapter 06
伊豆の国市ウォーカブルなまちづくりのマネジメント

6-1. ビジョンを実現するためのマネジメント

6-2.「外部空間の目的地化」を促す「ほっとすぽっと」社会実験

6-3. 市民が参画するワークショップ

6-4. ウォーカブルなまちの実現へのステップ

6-5. フリンジパーキングを用いた「車」から「徒歩」へのシフト

6-1　ビジョンを実現するためのマネジメント

５章までで掲げてきたビジョンを実行してゆくためには、これを実行するための戦略や手順、合意形成や実験などを通じて、実際に実際に動かしてゆくプロセスが必要となる。そこで下記のようなマネジメントのあり方を検討する。

1) 社会実験を通じた実現への手順（特に「目的地」の創出に向けて）

まちなかに目的地を創出する際に、はじめから常設にするのではなく設置可能性を試しながら場所ごとに適した空間創出を検討する必要がある。社会実験の形でニーズを確認した上で、「使われる空間」の創出を目指す。

6-2 (p.126～)
「外部空間の目的化」を促す「ほっとすぽっと」社会実験

2) まちなかの「みち」を位置付けるためのワークショップ

実際のウォーカブルなまちづくりでは、ワークショップ等を開催し、市民参画で対象地区のみちがそれぞれどのようなみちなのかを考えながら進めていくことが望ましい。みちを考える上で共通言語となり得る「リンクアンドプレイス」という考え方と、市民参加のワークショップにより、市民の意見を反映したウォーカブルなまちの実現を目指す。

6-3 (p.130～)
市民が参画するワークショップ

3) 推進のための体制の検討

ウォーカブルなまちを目指すために必要なステップの一例として、3 つのステップを検討する。現在伊豆長岡地区で進行しているプロジェクトに加え、新たなプロジェクトが多数生まれ、さらにそれらが連携し、長期化・組織化を目指していく、といったステップが考えられる。

6-4 (p.132～)
ウォーカブルなまちの実現へのステップ

4)「車」のまちをウォーカブルにするための検討

現在、伊豆長岡地区は車中心の生活である。そこで、車での来街者をまちの周縁部で受け入れ、そこから徒歩や公共交通機関に乗り換えてもらうフリンジパーキングを用いることで、徒歩でのまちなか回遊の実現を目指す。

6-5 (p.134～)
フリンジパーキングを用いた「車」から「徒歩」へのシフト

6-2「外部空間の目的地化」を促す「ほっとすぽっと」社会実験

伊豆長岡地区でウォーカブルなまちづくりを展開するにあたっては、地区内に豊かな活動が行われ、立ち寄りたくなり、歩く動機となるような「目的地」をたくさん用意してゆくことが求められる。しかしながら、そうした場所を実際に設けた場合のニーズや可能性について未知数な部分も多いため、実際に設置可能性を試してみながら検討する必要がある。そこで、まちなかにおいて、歩きたくなる場所や立ち寄りたくなる場所を増やしてゆくための、「ほっとすぽっと」設置の社会実験を通じて、徐々に実現可能性を探る方法が考えられる。

▶ 地域資源と結びつける

伊豆長岡地区で活動・滞留の場を創出するには、地区に存在する地域資源や地区で暮らす多様な人々を社会実験と結びつけて考え、人々が緩やかに繋がりながら活動の場を生み出す仕組みをつくっていくことが重要である。

伊豆長岡の地域資源・人的リソースの例

※1 参照：https://www.konastay.jp
※2 参照：https://www.city.izunokuni.shizuoka.jp

▶ どこで、何をやる？

実際に、国内外では、各地域の個性や特徴を生かしながら、ウォーカブルなまちづくりを目指したプレイスメイキング（居場所づくり）の社会実験が多くなされている。伊豆長岡地区でも、どこで、何をするか検討していく必要がある。

伊豆長岡地区での外部空間の目的地化のイメージ

× 川床テラス BBQ

× 遊び場 / 足湯 屋台（マルシェ）

× 屋台

× 遊び場 / 足湯 カフェ BAR

● 参考事例：てくてくやまぐちーまちなかウォーカブルプロジェクトー（山口市、2023）

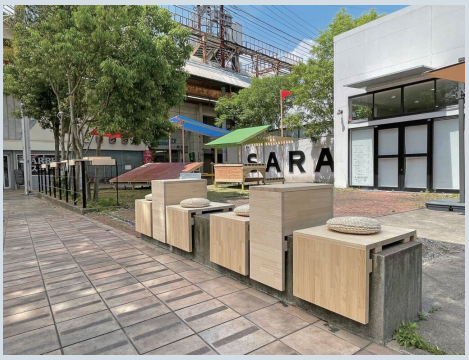
山口市は、市役所や県立美術館・博物館などの文化・教育施設が集まる亀山周辺エリアと、商業施設の集積する中心商店街エリアとの回遊性を向上させる「まちなかウォーカブル」推進への取り組みの 1 つとして、社会実験「てくてくやまぐちーまちなかウォーカブルプロジェクト」が、2023 年 5 月の 5 月 11 日から 5 月 21 日までの 10 日間にわたり、同市内 3 カ所で実施された。

1 カ所目は「山口駅通り」。趣旨に賛同する沿道の 8 事業者が、店の外の歩道空間に客席や休憩スペースを設置。屋外でのサービス提供等を行った。また、安心して歩ける環境づくりのため、自転車通行者に向けた歩行者への配慮を促す看板も置かれた。

2 カ所目は「どうもん広場」。同広場と隣接民地との一体的な活用を図り、滞在時間の長期化と中心商店街における消費増加が図られた。ベンチやテーブル、子ども向け遊具等を設置し、休憩スペースを拡張。さらに、日替わりでキッチンカーも出店した。

3 カ所目は「一の坂川交通交流広場」で、ここのみ 5 月 20 日（土）と 21 日の 2 日間が実験期間となる。「交流広場」と「情報発信広場」間を走る市道も含めて、広場を一体的に活用。一の坂川のせせらぎを間近に感じられるテラス空間、広場を流れる風を感じられるベンチ、子ども向け遊具等を臨時に設置。さらに、キッチンカーや屋台、ポップアップ（期間限定）レストラン等の出店もされ、「広場の魅力向上と回遊のハブ機能向上」が図られた。

山口駅通りの休憩スペース（左下地図③）

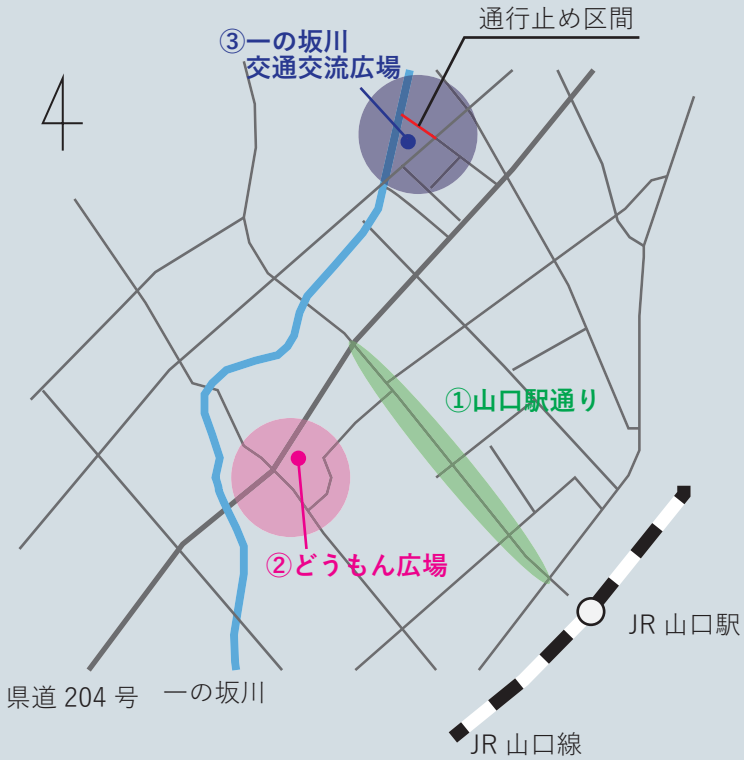


どうもん広場の休憩スペース（左下地図②）

風の涼み台（左下地図③）

水辺テラスの様子（左下地図③）

出典：てくてくやまぐち公式 facebook



6-2「外部空間の目的地化」を促す「ほっとすぽっと」社会実験

● 参考事例：KOSUGI 3E OPEN TERRACE（川崎市，2020）

「KOSUGI 3E OPEN TERRACE」は、2020 年 11 月に武蔵小杉駅前の道路を占用して行われた社会実験である。この社会実験の舞台となった道路は、かつて狭あいな道路だったが、再開発によって歩道付きの 2 車線道路として整備が完了した市道小杉町 21 号線である。

「KOSUGI 3E OPEN TERRACE」が行われた背景として、武蔵小杉駅前に新たな複合施設「Kosugi 3rd Avenue」が完成し、さらに駅南口にある「こすぎコアパーク」もまちの憩いの場へとリニューアルが予定されているなど駅前の空間が魅力的に変化していた。そんな駅周辺エリアでは以前から、「もっとゆっくり座れる場所がほしい」「くつろげる場所がほしい」といった声があった。そこで、まちや社会の変化に合わせて、駅前の屋外空間をより居心地の良い場所にする可能性を探るため、みちを日常の生活に引き寄せるきっかけをしつらえることで武蔵小杉のポテンシャルを引き出す実験的な空間づくりが行われた。

普段の市道小杉町 21 号線　出典：川崎市 HP

内容としては、二日間に渡って道路に交通規制をかけ、「たべる」「あそぶ」「まなぶ」をテーマにした３つのエリアが創出された。

１.「たべる」エリア
周辺店舗のテイクアウト商品を食べることができる
２.「あそぶ」エリア
人工芝でくつろいだり、白いガムテープを使って道路に自由に絵をかいたりすることができる
３.「まなぶ」エリア
図書館のリユース資料を自由に読んだり、武蔵小杉周辺の今昔写真を見て歴史を学んだりすることができる

野原先生から写真もらう

当日は、人工芝やパレットの活用、こたつの設置等で簡易でありながら魅力的な場づくりが行われるとともに、マスキングテープの使用などで、LQC を実現する取り組みであった。

また居心地の良い空間の創出に加え、利用者アンケート、歩行者アクティビティ調査、車両通行量調査等が行われた。利用者アンケートでは、「快適である」「居心地が良い」といった声が多く寄せられた

この社会実験を主催した行政は、得られたアンケート結果やデータの詳細な分析、周辺事業者へのヒアリング、地域の意見収集を行い、居心地の良いまちづくりに向けた検討を行っていくとしている。KOSUGI 3E OPEN TERRACE の後も、武蔵小杉では屋外空間を利用した社会実験が継続的に行われている。

社会実験の様子

● 参考事例：長門湯本温泉の再生における社会実験の活用（長門市 , 2017-2019）

山口県長門市に所在する長門湯本温泉は、豊かな自然環境に囲まれた音信川沿いに広がる温泉街である。かつては団体客中心に大きく賑わいを見せたものの、ニーズの変化等により宿泊客数の減少、2016 年には老舗ホテルの倒産に至った。そんな長門湯本温泉街を再生するため、長門市は星野リゾートにマスタープランの策定を委託し、官民連携により事業を推進した。長門湯本温泉のまちづくりのコンセプトとして、圧倒的に豊かな外部空間で、そぞろ歩きが楽しいまちを目指し、働くこと、暮らすこと、旅することが緩やかにつながる、共有の空間と体験の連鎖の創造が目指されている。

豊かな外部空間の実現に向け、長門湯本温泉では毎年秋頃に開催されるイベントと並行して、主に河川空間、道路空間、夜間などのオープンスペースの活性化のため、長門湯本オソト活用協議会が主催となって社会実験が実施された。

１．河川空間の活用

音信川・大寧寺川において、川床・置き座の設置や河川区域での出店・休憩スペースの設置、それらを使った活用のプログラムが行われた。

川床・置き座の設置にあたっては、長門市及び河川管理者である山口県と協議を重ね、社会実験によって 4 か所で設置の安全性や活用プログラムの検証を行い、その結果を踏まえて常設を検討するというプロセスがとられた。

２．道路空間の活用

道路空間の活用では、拡幅された歩行空間に出店や休憩スペースなどが配置され、そぞろ歩きが楽しめる温泉街の風景が創り出された。

3 年間で 3 度にわたる社会実験と効果検証をもとに、地域住民等との合意形成を図り、道路管理者や警察との協議を重ね、道路詳細設計に反映し、道路空間再編の実現へと結びつけた。実現へのポイントとして、道路管理者が根拠をもって道路空間再編の有効性を示すとともに、整備後の利活用や安全対策等の自治を担う地元組織を組成できたことが挙げられる。

３．夜間照明

夜間照明では、橋や河川といった温泉街の景観上重要となる箇所でライトアップや住民・事業者と連携した灯りの設置が行われた。

また閑散期の誘客手段として住民参加型冬季あかりイベントの実験等、３年間で多岐にわたる照明社会実験がなされた。

河川空間、道路空間、夜間照明のほかには、歩ける温泉街の実現のために、車両の通過速度の抑制や違法駐車への注意喚起など、さまざまなサインも仮設された。

社会実験の様子
出典：長門湯本みらいプロジェクト

6-3　市民が参画するワークショップ

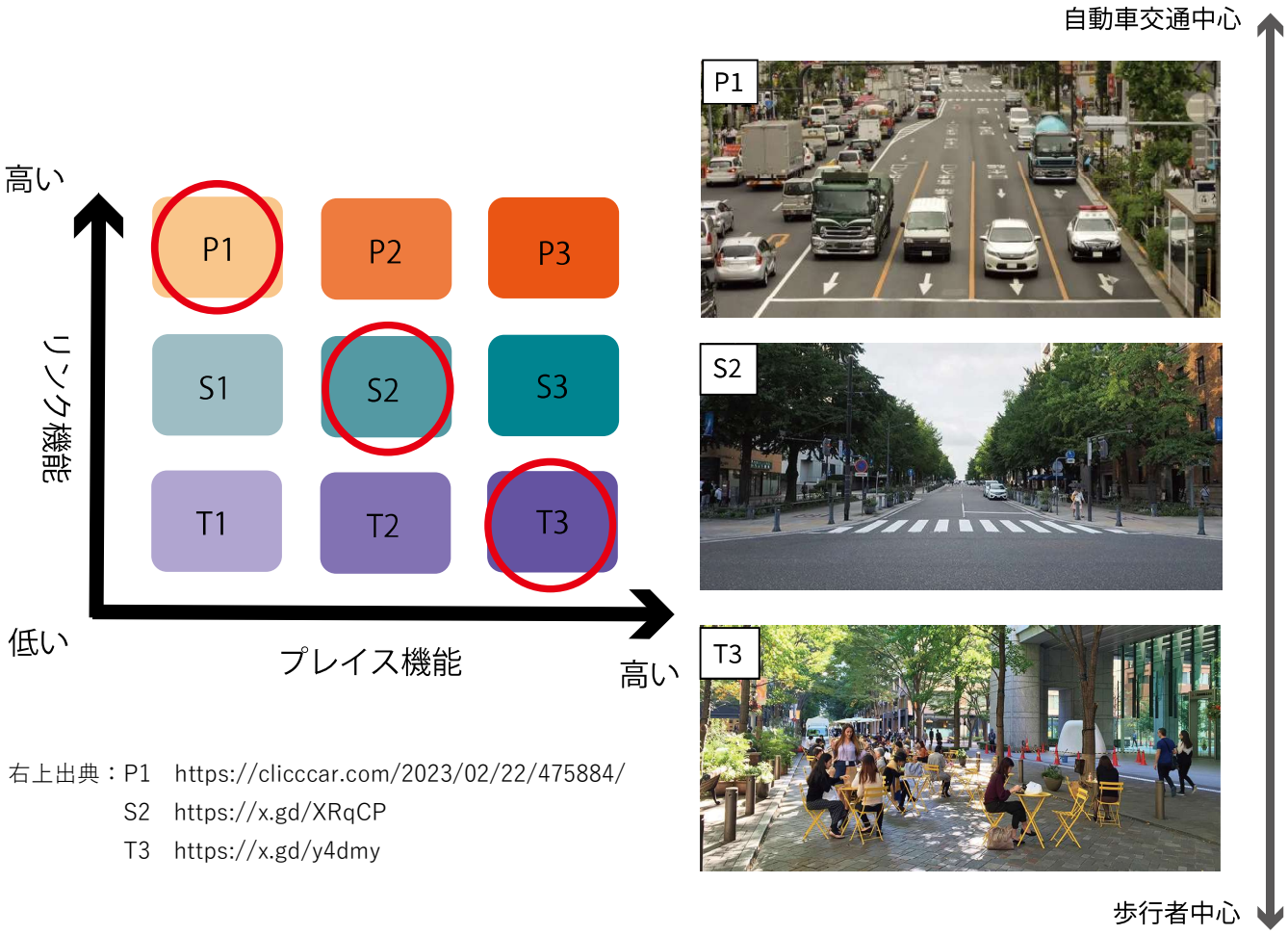
市民が参画しながらみちを考える

本冊子では、ウォーカブルなまちづくりに取り組むうえで重要だと考えられる道を位置づけ、その道に対して具体的な取り組みを提案した。実際にウォーカブルなまちづくりを進めていくうえでは、本地区のみちがそれぞれどんなみちであるべきかをワークショップを開催し、市民参画で考えながらすすめていくことがベストである。そこで、市民参加でみちを考える際に、共通言語となり得るみちに対する考え方「リンクアンドプレイス」を紹介する。

▶ リンクアンドプレイスとは

歩きやすいウォーカブルなまちを目指すには、道路のあり方が重要になるが、本来道路が担う、快適な「移動」（リンク）の機能だけでなく、ちょっと休んだり、佇んだり、交流したりする、時には目的地にもなるような、「滞留」（プレイス）としての機能も併せて意識する必要がある。

イギリスでは、それぞれのみちが、Link（通行・広域交通）から、Place（地域に寄与する活動空間）に至るまでのどこに属するかについて議論する「リンクアンドプレイス理論」というみちに対する考え方がある。具体的には、「時間の節約」を目指す移動経路としての街路（リンク）と「時間の浪費」を目的とする街路（プレイス）を２軸にとったマトリックスをつくり、その機能を掛け合わせから９つのタイプに分けられる。このタイプ分けをもとに、道の在り方を考え、空間をデザインしていく。



右上出典：P1　https://clicccar.com/2023/02/22/475884/
S2　https://x.gd/XRqCP
T3　https://x.gd/y4dmy

▶ リンクアンドプレイスワークショップとは

リンクアンドプレイスワークショップとは、上述にある「リンク」と「プレイス」両方の側面から見た道路の在り方をワークショップを通して市民の方々と共に考えていくものである。参加者で一緒になって、伊豆長岡地区のみちそれぞれがどんな役割を担うのかを考え、共有する。そして、その結果をもとにみちの将来像を具体的に考えていく材料とする。

● 参考事例：プレイス・ゲーム　シブヤホンマチ　【プレイスを考える】

渋谷区の北端に位置する本町地区は、木造住宅密集地域でその改善に向けた取り組みが重点的に実施されている地域である。その取り組みの一環として令和 2 年度に策定された「本町地区防災都市づくりグランドデザイン」において 8 つのプロジェクトを推進しており、その中の一つに「パブリックスペースを居心地の良い空間にするプログラム」がある。この取組では、災害時の共助の土台となるような緩やかな日常のつながりづくりと共に、日常的に訪れたいと思うような居心地のよいパブリックスペースや居場所を地域の人々が自ら作り上げていくことを目的としている。

● 公共空間について考える WS

参加者のまちなかのお気に入りの場所などについてワークショップを行い、「プレイス」に必要な要素を探る WS を開催した。さらに、複数回開催し、ワークショップだけではなく、まち歩きも合わせて実施するなど、ワークショップ・フィールドワーク・ミーティング等を通して、活動の拠点となる場の創出に向けた社会実験を行っている。

ワークショップ実施時の様子
出典：渋谷区公式 HP　https://x.gd/Q0z4G

● 参考事例：プレイス・ゲーム　シブヤホンマチ　【みちを考える】

国立市では、南部地域整備基本計画の改定に向け、2023 年に 2 度市民にむけたワークショップ「ウォーカブルなみちはどんなみち？」を開催した。

第 1 回では、「歩きたくなるみち (歩きやすいみち)」がどんなみちなのか話し合い、イメージを膨らませてもらうとともに、南部地域のみちについて感じることを意見交換し、身近なみちの良い印象と悪い印象をまとめた。第 2 回では、第 1 回でまとめた南部地域のみちの良い印象と悪い印象を踏まえて、良い部分の伸ばし方や悪い部分の改善策などについて意見交換し、南部地域のみちが「歩きたくなるみち (歩きやすいみち)」となるために必要なことについてまとめる。

● WS 開催の様子と実際の意見

WS には各回 10 名の地域住民が参加した。第 1 回では地域住民が好きなみちが明らかになった一方で、『まちなかにベンチが少ない』『信号待ちスペースが狭い』といった日常的に利用している地域住民ならではの意見が集まった。そして、第 2 回では歩きたくなる道の要素として、安全性や自然歴史といった意見の他に、『おいしいお店やカフェなどの休めるところ』といった周辺施設を求める声も挙がった。

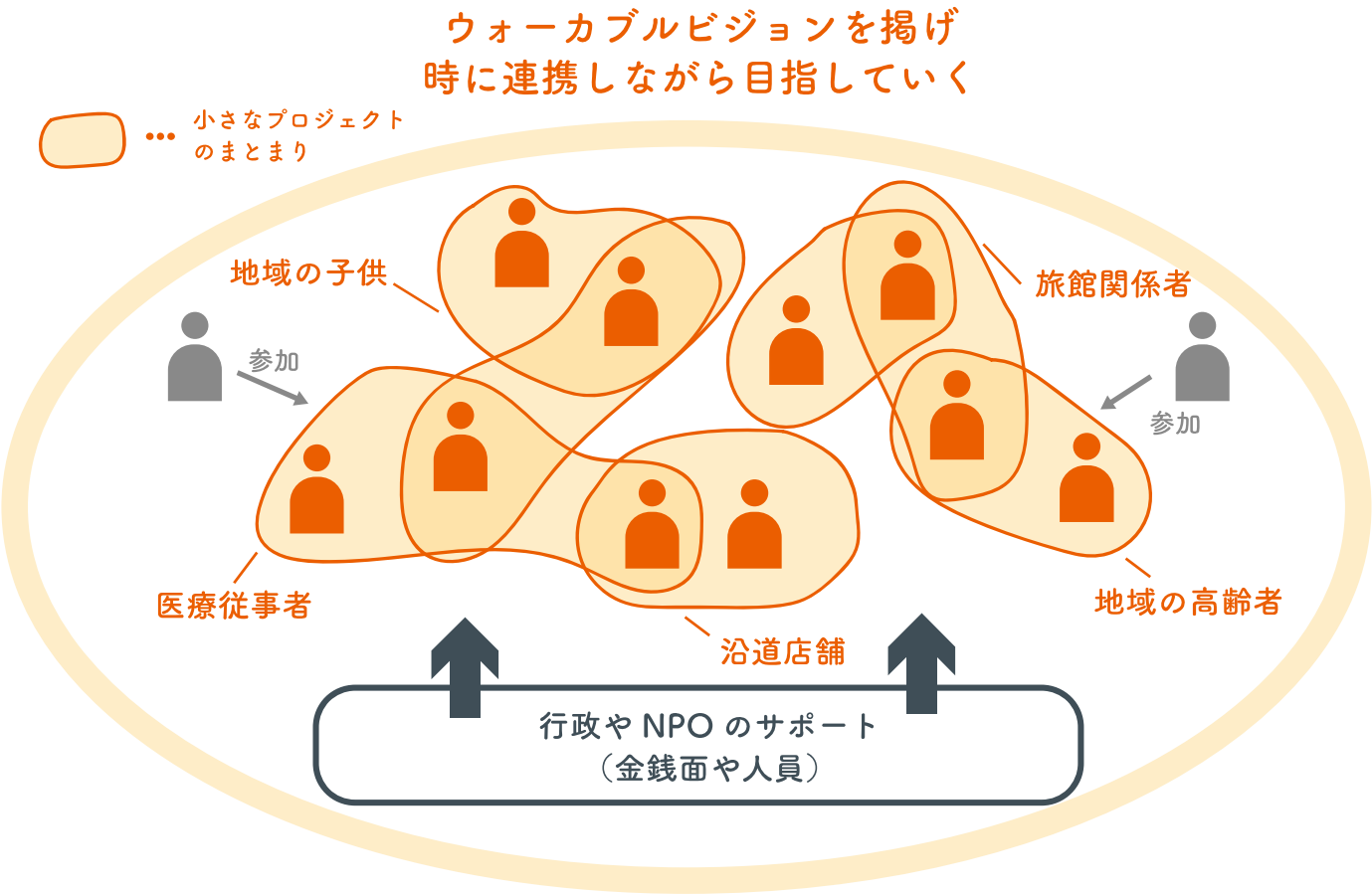
ワークショップ実施時の様子
出典：国立市公式 HP　https://x.gd/G6WT2

市民を巻き込むことで、利用者視点の意見を取り入れることができたり、ウォーカブルやまちづくりへの関心・まちの公共空間やみちへの愛着を高めることができたりといった効果がある。そして、こうしたワークショップを積極的に行うことで、「居心地がよく、歩きたくなるまちなか」形成に向けた検討をしやすくなると考えられる。

6-4　ウォーカブルなまちの実現へのステップ

どういったステップでウォーカブルなまちを目指すか

行政や NPO 法人、地域事業者、市民等がそれぞれ活動し、時に連携してウォーカブルなまちを目指していくために、どのような組織体制がよいだろうか。2020 年度より始まった「伊豆長岡温泉ミライ会議」のように、事務局である「一般社団法人伊豆長岡温泉エリアマネジメント」が中核となり、賑わいある温泉場通りの再生を目指し、地域や自治体、民間事業者が連携してつくるエリアプラットフォーム（会議体）を設立し、それぞれが活動しながら同じビジョンを目指していく形もあれば、一つの NPO 法人が中心となってすべてのプロジェクトに関わっていく形もある。本地域でウォーカブルなまちを目指すためにはどういった体制が最適なのか、今後考えていく必要がある。



STEP1 ためす

現状活動しているプロジェクトに加え、ウォーカブルに寄与する新たなプロジェクトを L（light: 軽い）Q（quick: 早い）C（cheap: 安い）で実践する。

STEP2 長期化を図る

単発のイベント等で終わらせず、ときにプロジェクト間で連携を図りながら定期的な活動を目指す。その過程で賛同者を集め、プロジェクトを徐々に拡大していく。

STEP3 組織化する

プロジェクトがそれぞれで動きつつも、ウォーカブルなまちを目指すための方向付けができるような組織を構築する。行政や NPO もそれらをサポートする存在として参加する。

▶ 各ステップの具体的なイメージ

STEP1 ためす： モバイルツールプロジェクト

横浜国立大学と（一社）伊豆長岡温泉エリアマネジメント（以下エリマネ）により、現在モバイルツールプロジェクトが進められている。（モバイルツール自体の詳細は 5-2-5 参照）そして、モバイルツールの企画・設計・施工は横浜国大の学生を中心に行っている。また、運営は両者共同で進めており、エリマネが主催するお散歩市において場所を借りたり、温泉駅に配したりしている。モバイルツールは、簡易に施工することができ、実験的にいろいろな場所で人のための憩いの場づくりをやってみることができる。

温泉駅に設置したモバイル縁側の様子

STEP2 長期化を図る： 温泉場お散歩市

温泉場お散歩市は、長岡温泉場からまちの活性化を目指して（一社）伊豆長岡温泉エリアマネジメントが主催し、毎月第 2 日曜日に開催されている。開催時は出逢い通りの交通を止め、普段は歩道が狭く車が走るために歩きにくい温泉街である出逢い通りが、沿道に店舗が出て歩行者天国化していて歩きたくなる道が実現化されている。

当初は社会実験として始まったこのプロジェクトは、2024 年 5 月現在では 7 周年を迎え、定期的に開催できている。このように、単発に留まらず、定期化・長期化を目指していくことが求められる。

2023 年 11 月お散歩市の様子

▶ 既存と新規のプロジェクトを重ね合わせ、まとまっていく

上記に示したお散歩市の他にも、本地区で既に取り組まれているまちづくりプロジェクトは多数ある。それらはウォーカブルなまちを目指して始まったわけではないものもあるが、今後のウォーカブルなまちづくりに活かされていくことが十分考えられる。そして、今後新たに生まれるプロジェクトと既存のプロジェクトが時には連携し、相乗効果を生み出すことが期待できる。そのためには、組織化して各プロジェクトをマネジメントする必要がある。本章で述べたステップ１～３のように、段階的に組織化されることを期待する。

6-5　フリンジパーキングを用いた「車」から「徒歩」へのシフト

▌フリンジパーキングの導入

現在、伊豆長岡地区での生活は、車移動を基本としている。徒歩でのまちなか回遊を促すには、車での来街者をまちの周縁部で受け入れ、そこから徒歩や公共交通機関に乗り換えてもらう必要がある。

例えば、現在出逢い通りには小さな駐車場が点在しているが、これらを周縁部にまとめることで、遠方からの観光客に温泉街をそそぞ歩きしてもらうことにつながる可能性がある。

▶ フリンジパーキングとは

駐車場を都心部の外周に計画的に配置し、都心部への車の乗り入れをマネジメントするもの。
パークアンドライドと組み合わせて整備されたり、公共交通の乗換駅や停留所に併設されたりすることも多い。また、都心部をモール化し歩行者優先空間を整備する際にも用いられ、アメリカやドイツ、イギリスなどで実施されている。日本国内でも京都や福岡といった観光地で導入が進んでいる。地域内交通への乗り換えを促すことで、低炭素社会の実現への貢献も期待できる。

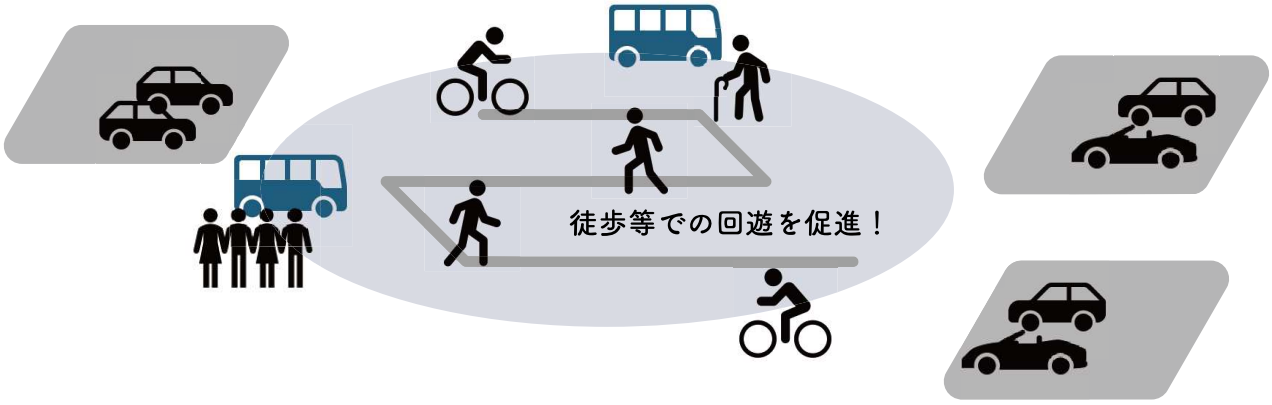


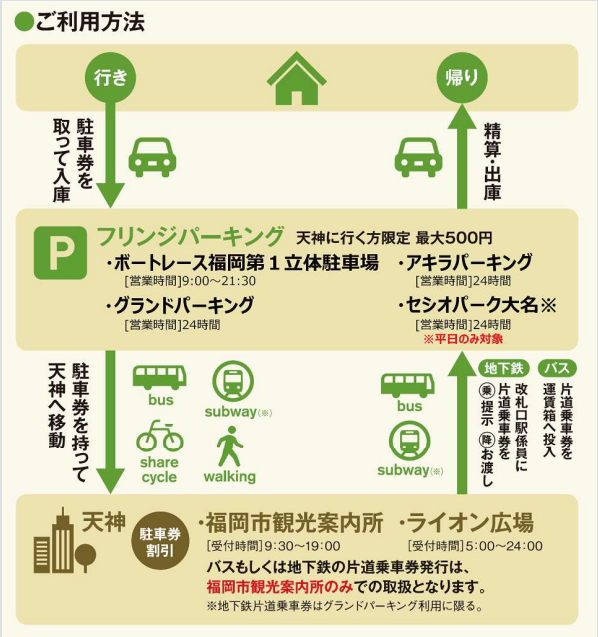
図　フリンジパーキングのイメージ

● 参考事例：福岡市天神地区フリンジパーキング

福岡市天神地区では、天神地区中心部の交通混雑緩和に向け、フリンジパーキングを実施している。フリンジパーキングとして４つの駐車場が対象となっており、天神地区の対象施設で手続きを行うと入庫後12時間まで最大500円で利用できる、かつ、乗車人数分の公共交通が片道無料で利用できる。

合計収容台数は約 1908 台（休日は 1664 台）にも上り、十分な台数を収容できる。

福岡市と We Love 天神協議会によると、2019 年３月から始まった現在の形態において、緊急事態宣言の発出に伴う影響もあるが、フリンジパーキングの利用状況は概ね右肩上がりになっており、利用者の評価も概ね好評なため、恒常的な運用に向けた検討や利用促進を実施している。



天神地区フリンジパーキングの仕組み
出典：https://00m.in/ykrjk

▶ 伊豆長岡での導入検討

右図は、伊豆の国市において、多くの車を収容可能な駐車場を示した図である。3-1-7 の調査結果より、伊豆の国市にはコインパーキングが伊豆長岡駅周辺に２つあるのみで、目的施設である店舗・旅館・伊豆パノラマパーク・病院駐車場などに、多くの台数を収容できる駐車場が設けられている。それゆえ、観光客や住民は目的地まで車で移動することが前提となっている。

こうした状況を踏まえつつ、ゆるやかにウォーカブルなまちなかの利用につなげていくために､｢フリンジパーキング｣の導入を用いて、徒歩やまちなか回遊を促すことが考えられる。

特に前述の「ほっとすぽっと」と駐車空間やモビリティハブを組み合わせて、まちなかの利活用を促すことを検討する。

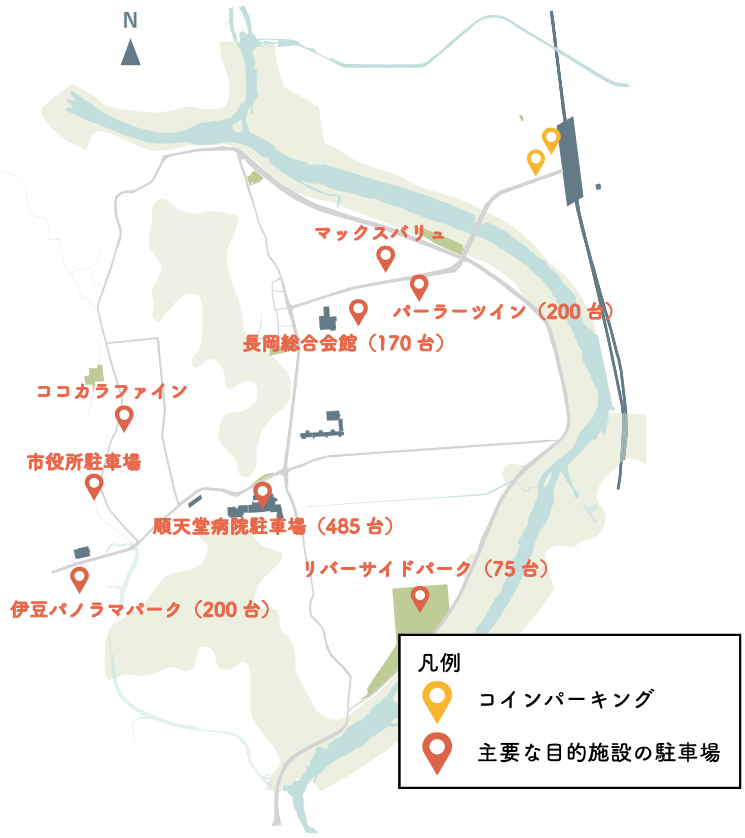
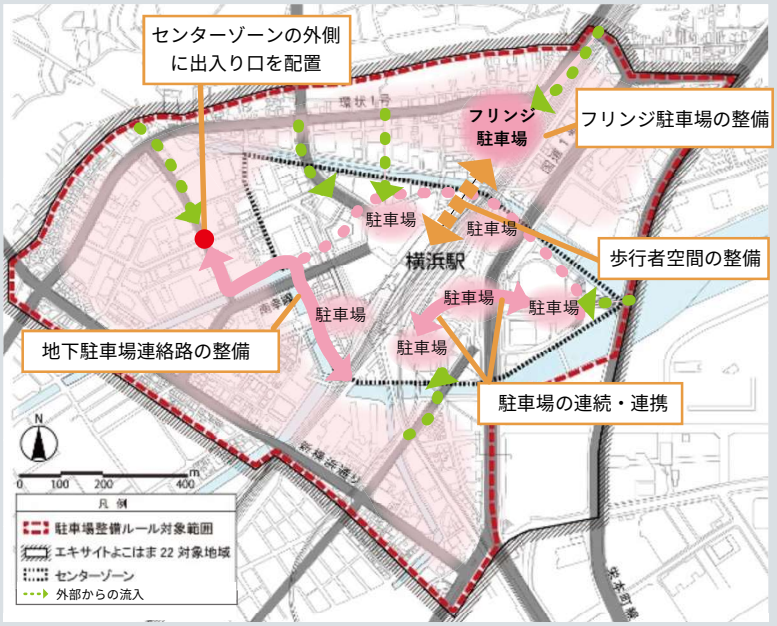


図　伊豆長岡地区にある主な大型駐車場

● 参考事例：附置駐車場の集約化の検討（横浜駅周辺）

横浜駅周辺エリアでは、「エキサイトよこはま 22」の中で地区の基盤整備として、駐車場の接続・連携や配置に関する方針が示され、平成 22 年 8 月には駐車場整備ルールを策定し運用を行っている。横浜の玄関口となる駅前地区をセンターゾーンとして、その周囲を取り囲むようにセンターゾーン外を設け、それぞれ役割を持たせた計画となっている。

センターゾーンの開発等において必要駐車場台数を確保する際は、極力すべての台数を積極的にセンターゾーン外で確保する。例えば、地下駐車場出入り口をゾーンの外側に配置することや、空き駐車場の有効活用、附置駐車場を集約しフリンジ駐車場の整備を行うことが挙げられる。これにより、センターゾーン内での自動車と歩行者の錯綜を解消し、安全で快適な歩行者空間の実現に取り組むと共に、エリア全体の駐車場利用の平準化を促進している。

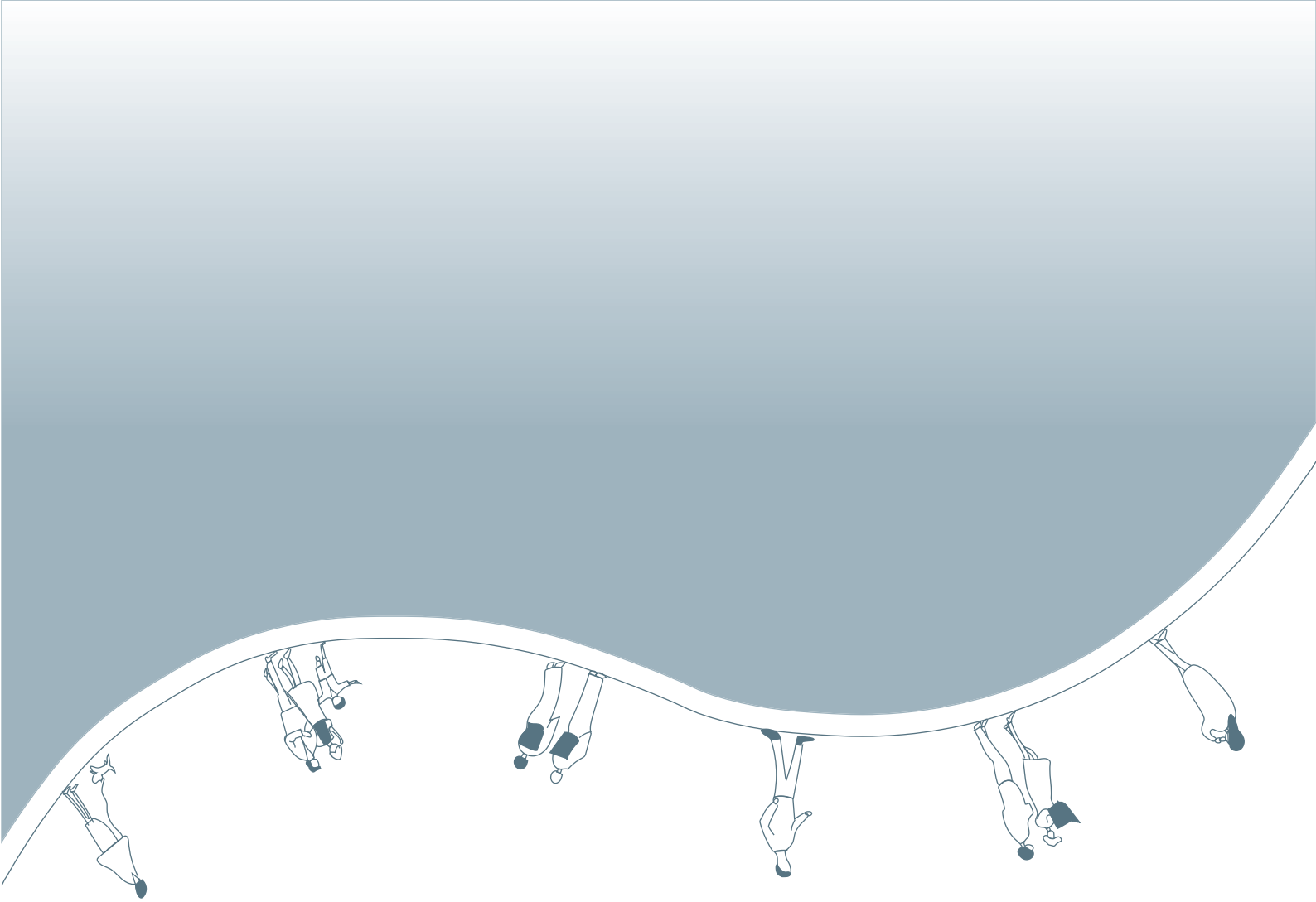


『エキサイトよこはま２２』を元に作成
出典：https://00m.in/usylQ

調査メンバー一覧

メンバー

代表　　：野原卓（横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院准教授）
調査担当：佐藤綺香（横浜国立大学大学院都市イノベーション学府博士課程前期２年）
中能泰知（同上）
山口佳恋（同上）
横山創紀（横浜国立大学大学院都市イノベーション学府博士課程前期１年）
川田真史（横浜国立大学大学院都市イノベーション学府 2023 年度卒業生）
河村凌平（同上）
黒川春香（同上）
奥野慎（横浜国立大学大学院都市イノベーション学府 2022 年度卒業生）
加治屋知志（同上）
近藤沙紀（同上）
林俊宇（同上）
土川豊（株式会社オオバ）
出口健太（同上）
久保貴生（同上）
田中美有（同上）
上野智弘（同上）
和田倫典（同上）



伊豆の国市
ウォーカブルビジョンに向けて

伊豆の国市
ウォーカブルビジョン策定
のための基礎調査報告書
2023年度作成（2024年3月）

横浜国立大学都市計画研究室
株式会社オオバ